

# みかん山古墳群第2次発掘調査報告

2009.3

東大阪市教育委員会

# 例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴うみかん山古墳群第2次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査地は大阪府東大阪市東豊浦町1113-6・7、1118、1119-1、1121-1、1123-1・5である。
3. 本調査は株式会社TGMの依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
4. 調査にかかる費用は全額株式会社TGMが負担・用意した。
5. 調査は平成20年7月7日から8月19日まで発掘調査を行ない、遺物整理および報告書作成作業は平成21年3月31日まで実施した。
6. 調査は若松博恵が担当し、遺物整理については佐藤由美が行なった。
7. 12号墳から出土した人骨の同定については大阪市立大学大学院医学研究科分子生体医学大講座器官構築形態学（解剖学第2）の安部みき子氏に依頼し、報文を賜った。
8. 遺物写真はエイチ・エス写真技術株式会社に委託して実施した。
9. 鉄刀および耳環状況および成分分析については株式会社日鐵テクノリサーチのご協力を賜り、報文を頂いた。
10. 本書はⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1～3の遺構およびⅤを若松、Ⅲ-3の遺物を佐藤、Ⅳ-1を安部、Ⅳ-2を株式会社日鐵テクノリサーチが執筆し、若松が編集した。
11. 現地の土色及び土器等の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表記もこれに従った。
12. 調査及び報告書作成にあたっては下記の方々のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。  
株式会社TGM、株式会社島田組、株式会社アコード、大阪市立大学大学院医学研究科、株式会社日鐵テクノリサーチ、白石太一郎、中西克宏、竹谷俊彦、原山修、森瀬正之、中摩浩太郎、櫻尾茂樹、大野剛正、伊藤薫、山下真理子、山本与敬
13. 現地調査及び遺物整理・報告書作成には下記の方々に参加を得た。  
片山くみ子

## は し が き

今回の調査では、横穴式石室を有する古墳、竪穴式小石室および鎌倉時代以降の住居、耕作状況を確認するとともに、縄文時代から江戸時代の遺物も多数出土しました。とくに古墳時代における横穴式石室内の火葬および平安時代における再利用時の埋葬人骨群と、石室への追葬、再利用状況を確認することができました。

本書の内容は、古墳状況および地域史解明の一助になるものと思っています。

現地調査および遺物整理・報告書作成にあたってご協力・ご教示を賜った関係諸機関・諸氏に感謝するとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成21年3月

東大阪市教育委員会

## 本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
1. 調査の方法と経過	4
2. 層位	5
3. 遺構と遺物	6
IV. 自然科学	55
1. 12号墳石室内出土人骨の同定	55
2. みかん山12号墳出土鉄刀の自然科学的調査	69
V. まとめ	68

## 挿 図 目 次

第1図	調査地および古墳・周辺調査地位置図	1
第2図	遺跡周辺図	2
第3図	調査トレンチ位置図	4
第4図	調査範囲地区割図	5
第5図	南壁・3地区東突出部北壁断面実測図	6
第6図	12号墳横穴式石室実測図	8
第7図	第4遺構平面実測図	9・10
第8図	12号墳平面・断ち割り断面実測図	11・12
第9図	12号墳横穴式石室内埋土断面実測図	14
第10図	12号墳横穴式石室敷石状況平面実測図	15
第11図	12号墳横穴式石室内遺物出土状況平面実測図	16
第12図	12号墳横穴式石室内人骨群等出土状況平面実測図	17
第13図	12号墳横穴式石室内出土土器実測図(1)	19
第14図	12号墳横穴式石室内出土土器実測図(2)	20
第15図	12号墳横穴式石室内出土土器実測図(3)	21
第16図	12号墳横穴式石室内出土鉄刀実測図	23
第17図	12号墳横穴式石室内出土小玉実測図	24
第18図	12号墳横穴式石室内出土小玉写真	24
第19図	12号墳横穴式石室内出土耳環・馬具実測図	24
第20図	13号墳竪穴式小石室平・断面実測図	26
第21図	落ち込み断面実測図	27
第22図	第3遺構平面実測図	28
第23図	第3遺構SK3・4・5断面実測図	29
第24図	第3遺構ピット群平面実測図	29
第25図	SK2出土土器実測図(1)	31
第26図	SK2出土土器実測図(2)	33
第27図	SK2出土土器実測図(3)	34
第28図	SK2出土土器実測図(4)	35
第29図	SK2出土土器実測図(5)	36
第30図	SK2出土土器実測図(6)	37
第31図	SK2・3出土土器実測図	39
第32図	SK3・5、石垣2内出土土器実測図	40
第33図	第2遺構平面実測図	41
第34図	第2遺構石垣1平面実測図	42
第35図	2地区東西アゼ断面実測図	42
第36図	第8・9層出土土器実測図	43
第37図	第8層出土土器実測図	44
第38図	第6・8、7層出土土器実測図	46

第39図	第1遺構面平面実測図	49
第40図	第4・6層出土土器実測図	50
第41図	埴輪実測図	52
第42図	土製品・石器実測図	53
第43図	上層の人骨（再利用時）	57
第44図	下層の人骨（焼骨）	58
第45図	大刀の外観と断面組織	63
第46図	小刀の外観と表面・断面組織	64
第47図	大刀、黒錆層及び非介在物のE P M A分析結果	65
第48図	小刀、黒錆層及び非介在物のE P M A分析結果	66
第49図	耳環の外観	67
第50図	12号埴石室被熱箇所図および敷石抜き取り石位置図	70

## 表 目 次

第1表	みかん山古墳群古墳一覧	3
第2表	上層A群の出現頻度表	56
第3表	脛骨の計測値ならびに腓示数	56
第4表	資料番号対比表	57
第5表	鉄刀（黒錆層）の成分分析結果	62
第6表	非金属介在物の組成	62

## 図 版 目 次

図版1	遺構	1. 調査地周辺航空写真（1942年） 2. 調査地遠望航空写真（1985年ごろ）
図版2	遺構	1. 調査前状況（南より） 2. 南断面東側（北より） 3. 南断面西側（北より）
図版3	遺構	1. 東突出部北断面（南より） 2. 中央東西断面（南より） 3. 1地区（南より）
図版4	遺構	1. 第12号墳全景（南東より） 2. 第12号墳横穴式石室および竪穴式小石室（上より）

3. 第12号墳断ち割り断面 (南より)
- 図版5 遺構 1. 第12号墳断ち割り断面西 (南より)  
2. 第12号墳断ち割り断面中 (南より)  
3. 第12号墳断ち割り断面東 (南より)
- 図版6 遺構 1. 第12号墳横穴式石室全景 (上より)  
2. 第12号墳横穴式石室全景 (南より)  
3. 第12号墳横穴式石室奥壁 (南より)
- 図版7 遺構 1. 第12号墳横穴式石室東壁 (西より)  
2. 第12号墳横穴式石室東壁奥 (西より)  
3. 第12号墳横穴式石室西壁奥 (東より)
- 図版8 遺構 1. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況 (上より)  
2. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況 (南より)  
3. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況南部 (上より)
- 図版9 遺構 1. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況北東部奥 (上より)  
2. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況北東部 (上より)  
3. 第12号墳横穴式石室内敷石上遺物検出状況 (上より)
- 図版10 遺構 1. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況 (南より)  
2. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況北部 (西上より)  
3. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況南部 (東上より)
- 図版11 遺構 1. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群検出状況 (南より)  
2. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群奥壁部検出状況 (南より)  
3. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群奥壁部検出状況 (北より)
- 図版12 遺構 1. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群東奥壁部検出状況 (北より)  
2. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群西奥壁部検出状況 (北より)  
3. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群中央検出状況 (南より)
- 図版13 遺構 1. 第12号墳横穴式石室検出状況 (南より)  
2. 第12号墳横穴式石室内畔断面上 (南より)  
3. 第12号墳横穴式石室内畔断面上 (南より)
- 図版14 遺構 1. 第13号墳竪穴式小石室完掘状況 (上より)  
2. 第13号墳竪穴式小石室畔断面上 (西より)  
3. 第13号墳竪穴式小石室断ち割り断面 (南より)
- 図版15 遺構 1. 第4遺構完掘状況 (南より)  
2. 第4遺構・落ち込み断面 (西より)  
3. 第4遺構・SK6畔断面 (西より)
- 図版16 遺構 1. 第3遺構検出状況 (南より)  
2. 第3遺構完掘状況 (南より)  
3. 第3遺構・段2北埋土内遺物出土状況 (西より)
- 図版17 遺構 1. 第3遺構・SK2検出状況 (西より)  
2. 第3遺構・SK2埋土内遺物出土状況 (南西より)  
3. 第3遺構・SK3畔断面 (南より)

- 図版18 遺構 1. 第3遺構北部完掘状況(北より)  
2. 第3遺構北部完掘状況一部(北西より)  
3. 第3遺構SP12完掘状況(東より)
- 図版19 遺構 1. 第3遺構SP39完掘状況(東より)  
2. 第3遺構SP50完掘状況(東より)  
3. 第3遺構SP26完掘状況(東より)
- 図版20 遺構 1. 第2遺構・段2南石垣(南より)  
2. 第2遺構完掘状況(南より)  
3. 第2遺構・段2南完掘状況(南より)
- 図版21 遺構 1. 第1遺構検出状況(南より)  
2. 第1遺構完掘状況(南より)  
3. 段2埋土内須恵器出土状況(西より)
- 図版22 遺物 12号墳横穴式石室内出土須恵器 蓋杯・有蓋高杯蓋・杯身
- 図版23 遺物 12号墳横穴式石室内出土須恵器 杯身・広口壺・長頸壺・短頸壺
- 図版24 遺物 12号墳横穴式石室内出土須恵器 器台・高杯・土師器 杯
- 図版25 遺物 12号墳横穴式石室内出土須恵器 提瓶・土師器 杯
- 図版26 遺物 12号墳横穴式石室内、SK2出土須恵器 提瓶・有蓋高杯蓋・土師器 杯・高杯
- 図版27 遺物 SK2出土須恵器 有蓋高杯蓋・杯身・高杯・台付壺・広口壺・短頸壺・捏鉢、土師器 杯
- 図版28 遺物 SK2出土土師器 皿・高杯・羽釜
- 図版29 遺物 SK2出土土師器 羽釜、瓦器 皿
- 図版30 遺物 SK2出土瓦器 皿
- 図版31 遺物 SK2出土瓦器 椀
- 図版32 遺物 SK2・3、第6層、6・8層出土瓦器 椀、土師器 皿
- 図版33 遺物 第6・8層、第7、8層出土土師器 皿、瓦器 椀、須恵器 蓋杯・捏鉢
- 図版34 遺物 12号墳横穴式石室内出土耳環、馬具
- 図版35 遺物 12号墳横穴式石室内出土鉄刀
- 図版36 遺物 1. 12号墳横穴式石室内出土須恵器 杯身・蓋杯・器台・壺・高杯・鉢、黑色土器 椀  
2. 12号墳横穴式石室内出土須恵器 蓋杯・杯身・器台
- 図版37 遺物 1. SK2出土須恵器 高杯・台付壺・広口壺  
2. SK2出土土師器 皿
- 図版38 遺物 1. SK2出土土師器 皿  
2. SK2出土土師器 皿
- 図版39 遺物 1. SK2出土土師器 羽釜・杯 輸入磁器 碗  
2. SK2出土土師器 羽釜
- 図版40 遺物 1. SK2出土須恵器 捏鉢  
2. SK3・5出土須恵器 甕、土師器 皿
- 図版41 遺物 1. SK2出土瓦器 椀(外面)  
2. 同上(内面)
- 図版42 遺物 1. SK2出土瓦器 椀(外面)  
2. 同上(内面)

- 図版43 遺物 1. SK 2 出土瓦器 碗 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版44 遺物 1. SK 2 出土瓦器 皿・碗 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版45 遺物 1. SK 3 出土土師器 皿  
2. 第6層出土瓦器 皿・碗、土師器 皿、輸入磁器 碗
- 図版46 遺物 1. SK 3、石垣2内出土瓦器 碗・皿 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版47 遺物 1. 第4層出土瓦器 碗、輸入磁器 碗、国産陶器 碗 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版48 遺物 1. 第6層出土土師器 羽釜、須恵器 捏鉢  
2. 第6・8層出土土師器 皿
- 図版49 遺物 1. 第6・8層出土須恵器 杯身・捏鉢、瓦器 皿・碗  
2. 第7層出土土師器 羽釜・皿、瓦器 碗、輸入磁器 碗
- 図版50 遺物 1. 第8層出土須恵器 脚部・捏鉢、土師器 羽釜、瓦器 碗、輸入磁器 碗  
2. 第8・9層出土土師器 皿
- 図版51 遺物 1. 第8・9層出土瓦器 碗・皿 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版52 遺物 1. 埴輪 円筒・形象 (外面)  
2. 同上 (内面)
- 図版53 遺物 1. 土製品、石器 (表)  
2. 同上 (裏)
- 図版54 遺物 人骨 (再利用時)
- 図版55 遺物 人骨 (烧骨)
- 図版56 遺物 人骨 (烧骨)
- 図版57 遺物 人骨 (烧骨)

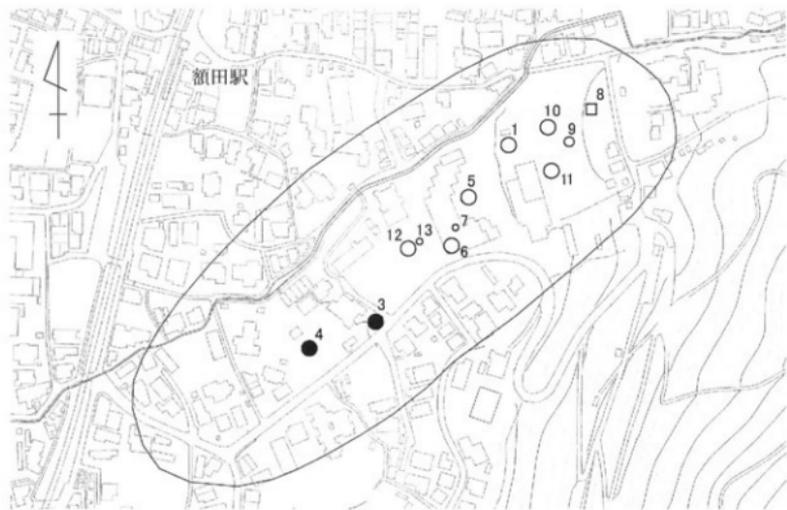
## I. 調査に至る経過

みかん山古墳群は、東大阪市東豊浦町から山手町に位置する群集墳である。額田谷の南の尾根端部から番匠川により形成された土石流段丘および扇状地上、標高120mから90mに古墳は分布している。これまで12基が確認されていたが、半壊を含め現存しているのは2基だけであった<sup>1</sup>。古墳が散在していることは古くから知られ<sup>2</sup>、平成6・7年=第1次<sup>3</sup>と平成9年(大阪府教育委員会)<sup>4</sup>には、開発工事および駐車場建設に伴う発掘調査が実施され、埋没していた古墳などが検出された。また、西方に消滅した古墳、南方の府営枚岡プール東側斜面付近から耳環が採集されたりしており<sup>5</sup>、周辺に未確認の古墳がさらに存していると考えられる。

平成20年3月9日、株式会社TGMから東豊浦町1113から1123にわたる地域において共同住宅建設の届出があった。当該地は第1次調査地の西に位置し、古墳などの遺構や遺物の存在が推定された。そのため、3月24日に6トレンチを設定して確認調査を実施した。南北両端では遺構・遺物とも出土しなかったが、古墳と思われる石群とビット・土坑を検出し、瓦器・土師器などを含む遺物包含層を確認した。この結果に基づき、代理者を通じて協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与える建物部分を対象に、第2次調査として発掘調査を実施することになった。

### 注

- 1 『わが街再発見 東大阪市の古墳』 東大阪市教育委員会 1996、改訂版 2001
- 2 a 『枚岡市史』第1巻 本編 枚岡市役所 1967、「古墳時代の枚岡」  
b 『枚岡市史』第3巻 史料編1 枚岡市役所 1966、「考古資料 古墳時代」
- 3 『みかん山古墳群第1次発掘調査報告書』 財団法人東大阪市文化財協会 2001
- 4 『みかん山古墳群』 大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2 大阪府教育委員会 1998
- 5 読売新聞昭和54年8月22日号など。



第1図 調査地および古墳・周辺調査地位置図 (1/2500)

## II. 位置と環境

調査地北には東西方向に流れる番匠川があり、額田谷が形成されている。この谷の南斜面に小古墳が点在し、群集しているのがみかん山古墳群である。

生駒山西麓には多くの小河川が流れ、それぞれが土流段丘、扇状地を形成している。そしてこの地域は旧石器時代から現在にいたる歴史が連続とつづいている。今回の調査でも古墳だけではなく、石鏃などの石器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器など、縄文時代から江戸時代にわたる遺物が出土している。

本古墳群近辺では、千手寺山遺跡、正興寺山遺跡などで旧石器時代後半のナイフ形石器が出土・採集されている。縄文時代には早期の神並遺跡、前期の鬼虎川遺跡、中期の善根寺遺跡、後期の縄手遺跡、晩期の日下遺跡・馬場川遺跡などと、晩期に至る集落が各所で営まれるようになる。

弥生時代になると、鬼虎川遺跡に複数の環壕、方形周溝墓群をもつ大集落＝拠点集落が形成されるとともに、植附遺跡・西ノ辻遺跡・瓜生堂遺跡など、扇状地から堆積平野にかけてこの時期の遺跡が点在し、後期には山畑遺跡など山腹に高地性集落も見られる。

古墳時代の集落も扇状地から平野部に形成されている。前期の大古墳は見られないが、ヒレ付円筒墳輪が出土している客坊山3号墳・えの木塚古墳がある。しかし、後期になると山腹から扇状地にかけて横穴式石室を有する小古墳が群集して形成され、墓尾古墳群、辻子谷古墳群、神並古墳群、みかん山古墳群、豊浦谷古墳群、出雲井古墳群、客坊山古墳群、五条山古墳群、山畑古墳群、花草山古墳群、五里山古墳群、六万寺古墳群、桜井古墳群、大賀世古墳群、浄土寺谷古墳群などである。また扇状地や平野部の段上古墳群、植附古墳群、巨摩1号墳、山賀古墳などの小型低方墳があるとともに、塚山古墳、イノラムキ古墳などのように単独で存する古墳も見られる。

横穴式石室を主体部とする古墳群は生駒山西麓に東西方向にのびる谷筋の尾根から扇状地にかけて形成されている。消滅または今回確認された2基の古墳のような未発見のものがあ、各古墳群の数



第2図 遺跡周辺図 (1/15000)

は定かではないが、数基の小規模なものから山畑古墳群のように70基を越えるものまでである。客坊山3号墳のように前期にさかのぼるものがあるものの、大半は6世紀から7世紀初期に構築されたものである。多くは径15m前後の円墳であるが、みかん山8号墳などの方墳(5世紀後半築造、木棺直葬)、神並5号墳(大塚塚古墳)・山畑52号墳(瓢箪山古墳)・山畑22号墳のような双円墳、山畑2号墳の上円下方墳なども見られる。古墳は破壊・埋没しているものが多く、墳丘・外部施設状況を窺えるは少ないが、五里山3号墳のように墳丘に数段の列石の有するもの、出雲井5・14号墳のように周濠を伴うことが確認されたものがある。また、これまで輪棺を伴う古墳は少ないとされてきたが(山畑13・36・51・69・70号墳、大賀世2・3号墳など)、みかん山5号墳をはじめ近年の調査で輪棺の出土古墳・または出土地の報告が増してきている。横穴式石室は両袖式、左右片袖式、無袖式と種々の形態があり、規模とも多彩である。それとともに追葬や平安時代以降の再利用状況も確認されている。また、みかん山7号墳・出雲井13号墳、山畑25号墳のような竪穴式小石室、石敷を伴った土器棺(花草山24号墳)の存在も知られるようになってきている。

飛鳥時代から奈良・平安時代になると集落・生産遺跡とともに、河内寺庵寺をはじめ寺院が各所に建立されている。鎌倉時代から室町時代も各所に集落、水田、畑が形成されていたが、水走遺跡のように平安時代末期以降に新たに開発されたところもある。また、戦乱期には若江城をはじめとする城が築城された。そして平野部を中心にその様相を一変させたのが江戸時代前半に行なわれた大和川の付け替え事業であった。

第1表 みかん山古墳群古墳一覧

号数	墳形	墳丘規模	外部施設	主体部	主体部 残存規模	埋葬状況	出土遺物	時期
1	不明	不明	不明	横穴式石室	不明	不明	不明	不明
2	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
3	不明	不明	不明	右片袖式 横穴式石室	玄室長 5.62m 玄室幅 1.92m 玄室高 2.8m 羨道幅 1.8m	不明	不明	不明
4	円墳	不明	不明	横穴式石室	玄室長 4.7m 玄室幅 2.4m 羨道長 3.9m 羨道幅 1.65m	2面 下面は敷石	須恵器・石棺 人骨 中世土器群	7世紀前半
5	円墳	直径約12m	周濠 埴輪	無袖式 横穴式石室	全長 6.3m 幅 1.3m	敷石 棺台 木棺(2棺)	須恵器・鉄釘・耳環 人骨・埴輪 平安～中世土器群	6世紀後半
6	不明	不明	不明	横穴式石室	南北長 3m 東西幅 1.2m	棺台 木棺	土師器・須恵器・鉄釘 小刀・耳環	6世紀後半
7	不明	不明	不明	竪穴式小石室	南北長 0.7m 東西幅 0.35m			不明
8	方墳	一辺約8m	周濠	木棺直葬?	不明	不明	須恵器・土師器	5世紀後半
9	円墳	直径約10m	周濠	木棺直葬?	不明	不明	須恵器・鉄器	5世紀後半
10	円墳	南北長 約17.5m 東西長 約15.5m	周濠 列石	右片袖式 横穴式石室	玄室長 3.8m 玄室幅 1.6m 羨道長 6.5m 羨道幅 1.6m	敷石 木棺	須恵器・土師器・鉄釘・ 耳環	6世紀後半
11	円墳	直径約16m	列石	右片袖式 横穴式石室	玄室長 3.1m 玄室幅 1.8m 羨道長 3.7m? 羨道幅 1m	敷石 木棺	須恵器・土師器・鉄釘・ 鉄鏃・鉄鏃・刀子	6世紀前半
12	円墳		周濠	無袖式 横穴式石室	全長 4.85m 奥室幅 1.47m	敷石 火葬 再利用埋葬	須恵器・土師器・馬具・ 鉄刀・耳環 土・埴輪 黒色土器・人骨	6世紀後半
13	不明	不明	不明	竪穴式小石室	全長 0.7m 幅 0.3m			不明

### Ⅲ. 調査の概要

#### 1. 調査の方法と経過

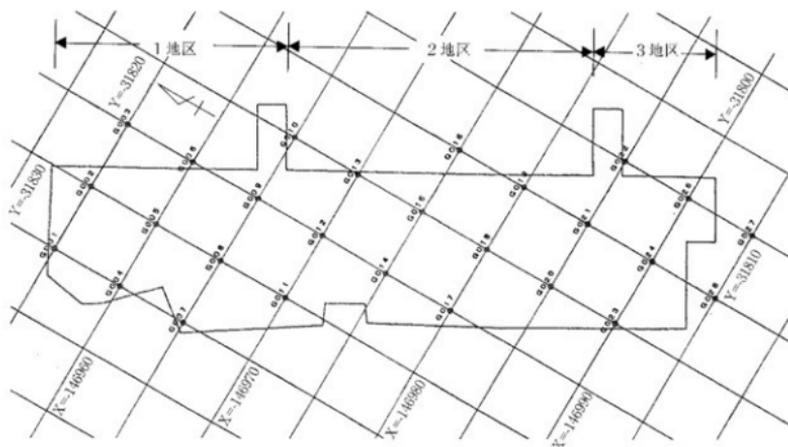
##### 調査の方法

共同住宅建設予定域468mを対称にして発掘調査を実施した。調査域西端の大半は2mを越す段差があり、石垣が形成され、桜、既存の水道・電気施設などが存していた。そのため石垣の崩壊などを考慮して控え(約0.3m)をとり、さらに調査地側は安全法面を保ちながら掘削していった。調査域は南北に細長く、調査時には遺構場所・遺物取り上げなどの確認の便宜上、東部2箇所の突出部(エレベーターピット場所)を利用して1・2・3地区、2地区を南北に区分した。調査は先に盛土・攪乱土、田籾上および床土などを機械掘削し(場外搬出)、以下調査底面まで層・遺構面ごとに人力により掘削して調査を行なった。調査中、12号墳横穴式石室内で多くの人骨を検出し、大阪市立大学大学院医学研究科の安部みき子氏に來訪を願った。12号墳は東西および南北方向の断ち割りを行なった。現地での調査は平成20年7月7日から8月19日まで実施した。調査に際し、主要遺構・断面および最終遺構面などについては写真測量を実施した。

整理等作業は、発掘調査にほぼ平行して出土遺物の洗浄・クリーニングとその登記作業をしていったが(出土遺物台帳作成)、調査終了後、同作業を本格的に行なうとともに注記、接合作業を実施した。とくに人骨についてはクリーニング・接合などを行なったのち、安部みき子氏に同定を依頼した。その後、遺物により遺構・層位の時期を確認しながら、報告書刊行に向けて必要な遺物をセレクトし、復元および実測図(拓影を含む)の作成を行なった。土器・石器・鉄器・埴輪などの実測図は主に層位・遺構ごとにレイアウトし、原稿執筆しながら割付し、トレースして遺物版下を作成した。層位図・遺構図は張り合わせ作業をはじめ図面の整理・検討を行ない、株式会社アコードが実施した写真測量図の校正も行なった。層位・遺構図はレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、写真測量図以外はトレースして遺構版下を作成した。上記の遺物(土器・石器・鉄器・人骨など)の写真撮影は、エイチ・エス写真技術株式会社へ委託して実施し、選択した遺構写真を含め、焼付けしたのち写真版下を作成した。遺構・遺物等の主要原稿・版下などの完成後、写真測量図をも集成し、日次・まとめ・報告書抄録等を加えて編集し、印刷所へ渡した。その後、遺物・図面・写真の登録作業を行なった。



第3図 調査トレンチ位置図 (1:2500)



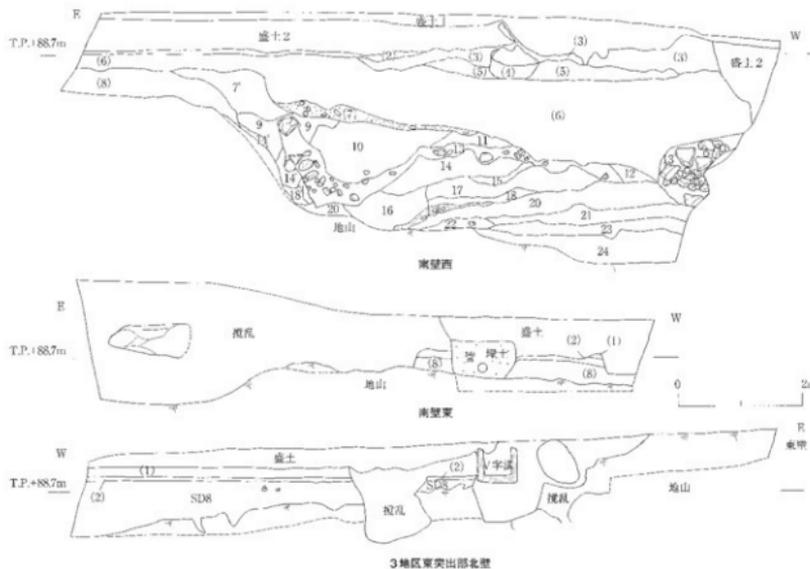
第4図 調査範囲地区分割

## 2. 層位(第5図)

調査地域は、地山の切り込みおよび盛土によって平坦面が形成されていて、西端はほぼ南北方向に走る石垣が構築されていた。盛土・攪乱土および耕作関係の土などを排除すると、東部はその直下で地山面が露出した。上述したように、北東部は既存していた建物によって大きく破損し、北西部も近現代の攪乱などにより盛土・攪乱直下が地山、北側は土石流の自然堆積であった。このことから、下記の基本層位が残存していたのは部分的であった。

〈基本層位〉-( )数字は基本層位で、以下の本文・挿図などにおいてもこれに準じる。-

- (1) 旧耕地
  - (2) 旧床土
  - (3) 灰オリーブ色砂質シルト 西整地埋土
  - (4) 暗灰黄色砂混じり砂質土 西整地下堆積土・埋土 瓦器の碗・皿、輸入磁器碗、国産陶器碗、須恵器甕、土師器の羽釜・皿、瓦質土器甕、陶器拵鉢などが出土。
  - (5) 灰オリーブ色砂質シルト 西整地下堆積土・埋土 須恵器鉢、瓦器碗、磁器皿・碗、埴輪などが出土。
  - (6) 黄灰色砂混じりシルト質土・にぶい黄褐色小礫・砂混じり土 整地層。土師器の羽釜・皿、須恵器、瓦器碗、磁器、須恵器杯・壺・甕・鉢・捏鉢、陶器、土鍾、弥生土器などが出土。第1遺構検出面。
  - (7) 黄褐色シルト質粘土混じり砂など 砂堆積層 土師器の羽釜・皿・碗・甕、瓦器碗、磁器、須恵器などが出土。
  - (8) にぶい黄褐色小礫・砂混じり土 須恵器の杯蓋・脚部・捏鉢、瓦器の碗・皿、土師器の皿・羽釜、磁器、黒色土器、石器などの遺物が多く出土。第1・2遺構検出面。
  - (9) 黄灰色砂混じりシルト質土、灰色シルト質粘土、暗緑灰色砂混じり粘土など。土師器皿、瓦器碗、黒色土器、須恵器甕・杯、埴輪などの遺物が出土。第3遺構検出面。
- 地山 黄灰色砂混じりシルト質土 第4遺構検出面。



3地区東突出部北壁

- |  |                                      |   |
|--|--------------------------------------|---|
| (1) 暗緑灰色 10G4/1 砂混じり粘土質シルト                     | 9 灰色 5Y6/1・にぶい黄褐色 10YR6/4 砂雜混じりシルト質土 | 16 灰色 7.5Y4/1 砂雜混じりシルト質土                                |
| (2) オリーブ灰色 10Y5/2・黄褐色 10YR5/6 砂雜混じりシルト質粘土      | 10 にぶい黄褐色 2.5Y6/4 砂混じりシルト質土 ややシルト多い  | 17 にぶい黄褐色 2.5Y6/3 砂雜混じりシルト質土 やや粘土質                      |
| (3) 灰色 10Y6/1・にぶい黄褐色 2.5 Y 6/4 砂雜混じり土          | 11 灰オリーブ色 5Y5/2 砂雜混じりシルト質土           | 18 黄褐色 2.5Y3/4 砂雜混じりシルト質土 ややシルト多い                       |
| (4) 灰色 5Y6/1 砂雜                                | 12 灰オリーブ色 7.5Y3/2 砂雜混じりシルト質土         | 19 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂雜土                                   |
| (5) 灰色 7.5Y6/1・にぶい黄褐色 10YR6/4 砂雜土              | 13 灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂雜混じりシルト質土 硬多い     | 20 暗灰黄色 2.5Y3/2 砂雜混じりシルト質土 ややシルト質多い                     |
| (6) 灰オリーブ色 5Y5/2 砂雜混じりシルト質土                    | 14 灰黄褐色 10YR5/2 砂雜混じりシルト質土           | 21 灰オリーブ色 5Y5/2 砂雜混じり砂質シルト                              |
| (7) 灰色 5Y6/1 砂雜                                | 15 灰黄色 2.5Y6/3 砂雜混じりシルト質土 やや砂多い      | 22 灰色 5Y4/1 砂雜・黄褐色 10YR5/6 砂雜混じりシルト                     |
| (8) 黄褐色 2.5Y4/1・褐色 7.5YR5/6 砂雜混じりシルト質土 ややシルト多い | 16 黄褐色 2.5Y6/3 砂雜混じりシルト質土 シルト質強い     | 23 灰色 5Y4/1 砂雜・黄褐色 10YR5/6 砂雜混じりシルト                     |
| (9) 灰色 2.5Y4/1・褐色 7.5YR5/6 砂雜混じりシルト質土          |                                      | 24 オリーブ灰色 10Y4/2 砂雜混じりシルト質土、明褐色 7.5YR5/6 シルト粒含む         |
| (10) 黄褐色 2.5Y4/3 シルト質粘土ブロック含む                  |                                      | 地山 明黄褐色 10YR6/6 砂雜混じりシルト質粘土、にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質粘土ブロック含む |

第5図 南壁・3地区東突出部北壁断面実測図

### 3. 遺構と遺物

検出した遺構には、ピット、土坑、溝、落ち込み、跡跡、古墳(墳丘・周濠・石室)があり、ピットはSP番号、土坑はSK番号、溝はSD番号で表示・表記する。

調査は、まず機械掘削によって、攪乱・確認調査トレンチを含む盛土、旧耕上および床土などを除去していった。調査地北部(1地区)は旧建物などで大きく破壊されており、北東角には建物の基礎が残存していた。それとともに、1地区の大半は十石流域で、礫層、砂混じりシルト層、砂層などに分かれ、北ないし西へ向かって落ち込んでいた。

遺構は、第6・8層遺構上面(第1遺構)、第8層上面(第2遺構)、第9層上面(第3遺構)および地山上面(第4遺構)において検出した。

記述にあたっては、古墳=12・13号墳を先に記し、第4遺構面から順次第1遺構面の遺構・遺物、そして第4層出土遺物、埴輪・土製品・石器の順で記していくこととする。本来、遺物番号は通し番号とすることにしているが、編集方針明示の遅滞から前後する形となり、遺物整理および執筆者に迷惑をかけることとなった。

遺物は、縄文時代～近世期のものが出土し、土器、埴輪、土製品、石器、金属製品、玉がある。以下、遺物の説明は遺構および各層位ごとに分けて記す。本文中に調整法を記しているが、口縁部と裾端部のヨコナテ調整は普遍的なのであえて記さない。

## 12号墳

### a. 検出状況

盛土・腐食土および1・2層などを機械掘削で除去し、第3層および第6・8層などが残存する状況(第1遺構面)で、すでにコ字状に石室の奥・側壁2段目(一部3段目)の頭部が現れており、石の抜き跡があった。

鎌倉時代以降の整地土・埋土面(第2・3遺構面)で明確な石室の輪郭を確認したが、この時点では墳丘盛土・墓坑はみられなかった。ただし、石室前面を大きく破壊していたSK2の北壁面で、東側壁の墓坑掘り方および墳丘の封土状況を確認することができた。墳丘右側=西側は棚田形成時に大きく破壊され、石室の石をも使用して段の石垣が築造されていた。

### b. 墳丘

#### <残存状況>

墳丘は主体部である横穴式石室の2段目まで削平されていた。西側は中世以降の棚田形成によって大きく破損し、棚田端の一部にあった石垣(石垣2)には横穴式石室の石も転用され、墳丘の盛土は石室際に残存するのみであった。南側はSK2および棚田によって石室前部とともに削り取られていた。北側は北に形成された整地段によって地山とともに東西方向に削り取られ、墳丘の一部が残存するのみであった。東側は調査地東端で地山が露出した状態になっていたが盛土=墳丘の一部は残存し、地山に掘り込まれた13号墳を検出した。その東には北北西-南南東方向にはしる第4遺構のSD8などが存していた。このように古墳の上部および周縁はほとんど旧状=古墳の原形をとどめておらず、残存状態は良くない。封土の残存最大高は1.3m。

#### <形成状況>

古墳は、西に傾斜する尾根から上石流段丘にわたる上に構築されていた。南北に地山を掘り込んで墓坑の左肩と成し(第8図東断面(6))左側壁を掘えているのに対し、西側壁側は石室構築前に墳丘下部(ほぼ西側壁1段目半分までの高さ。第8図西断面<1>~<20>)を盛り、それを掘り込んで墓坑の右肩と成し右側壁を据え、北側は南に緩やかに傾斜する地山面(第8図北断面M)を墓坑奥肩として奥壁を据えていた。そして、各壁の石を積みながら封土を盛り上げて墳丘を形成していったものと思われる。

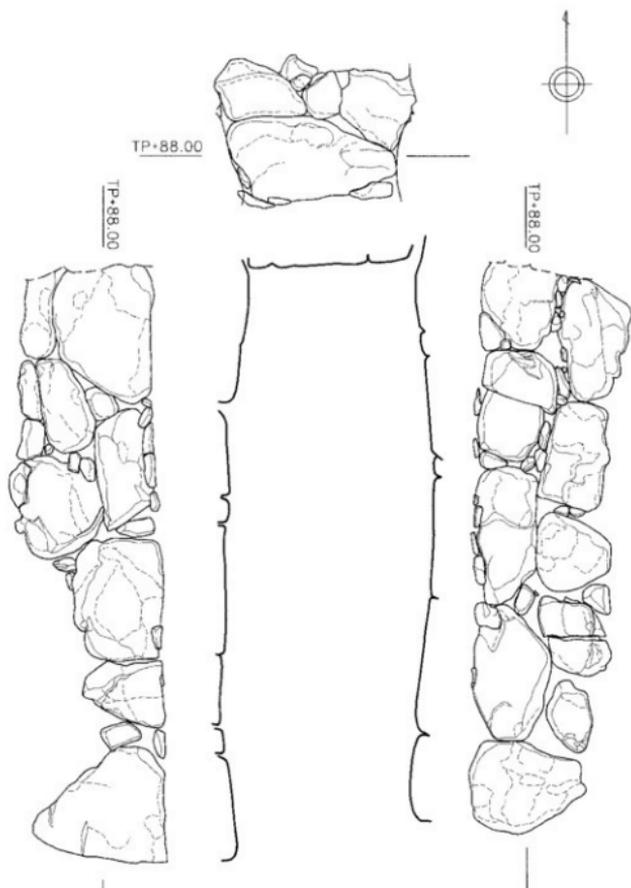
### c. 横穴式石室

#### 残存状況・規模など

検出状況は、奥壁2段、残存高1.2m、東西側壁とも2~1段5石分、残存高1.23~0.52mであった。奥壁幅1.47m、残存長4.85mを測る、南に開口する無袖式の横穴式石室である。

1段目の両側壁の最奥石はそれぞれ奥壁石によって一部が隠れていた。奥壁1段目は1石で底部西に根石、東には詰石、西側壁側にも詰石が存していた。2段目西側壁の最奥石は奥壁より入り込んでいたが、東側壁の角は奥壁角に接していた。このことから、1・2段目は西側壁を据えたのちに奥壁を置き、東側壁の順で据えられていったといえる。

奥壁の2段目は西石が先行する(西側壁2段目石面に接している)2石からなり、幅1.6mと床面幅より広がっていた。この2石上部の間隙部には2段目および3段目のための詰石3石が残存していた。東西側壁は、1ないし2段の5石分が残存していた。ともに奥壁側から4石目までのほとんどの石は横長(日地水平方向)に置き2段であるのに対し(西側壁3・4石目の2段目は欠損)、5石目は1石で縦長(日地垂直方向)に据えられており、墳丘前面がSK2によって切断されていたものの、5石目は開口最先端部の石と思われ、ほぼ全長が残存していたといえる。



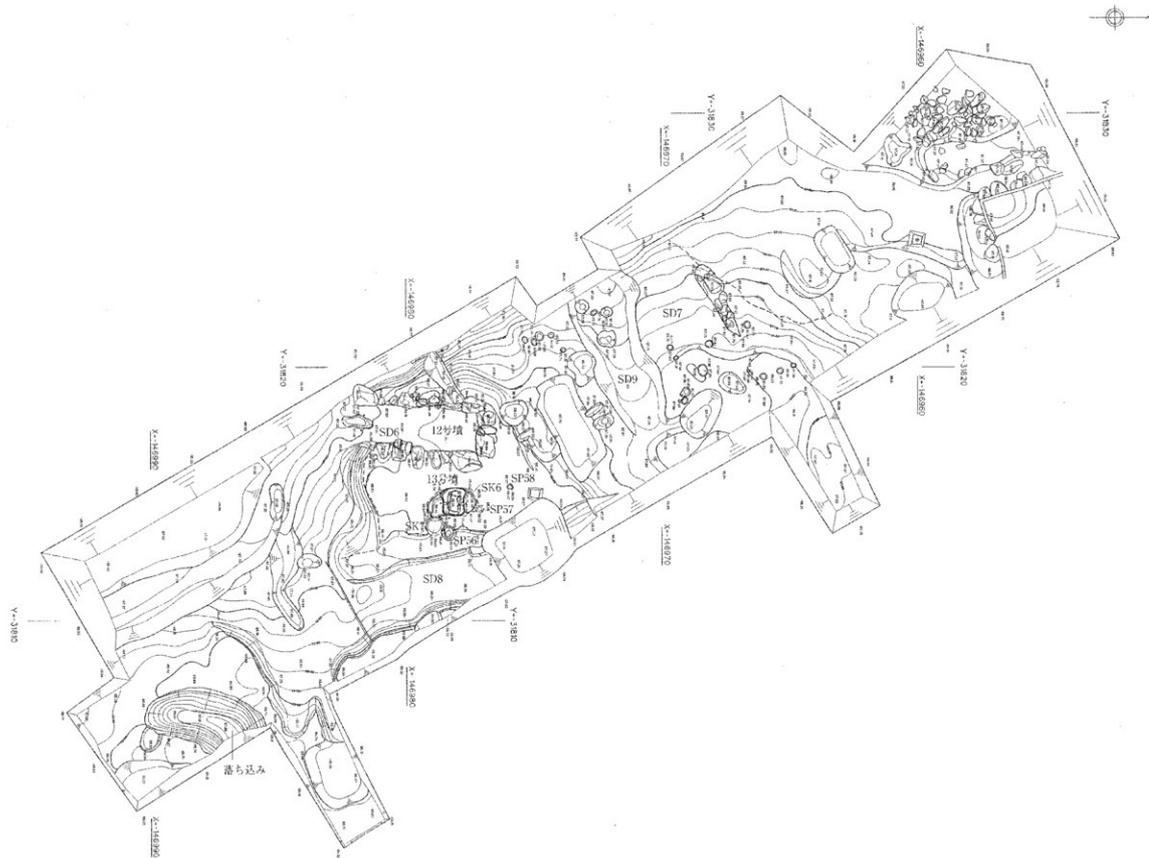
第6図 12号墳横穴式石室実測図 (1/40)

床面プランは、中央部付近幅1.7m、入口部1.45mで、奥壁幅が1.47mであったことから、中央部がやや広がるエンタシス状をなしていた。

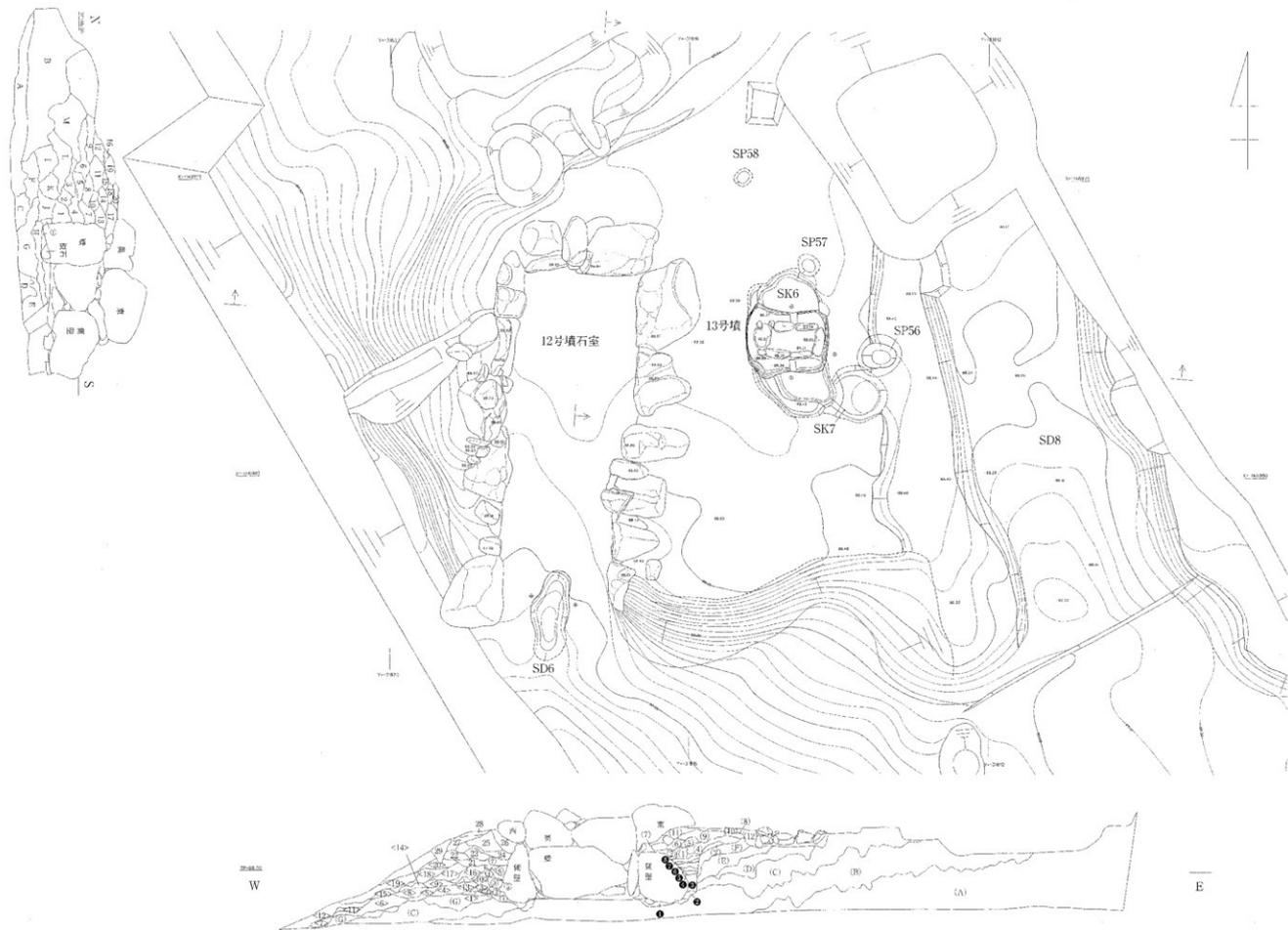
床の下面は、にぶい黄褐色シルト質粘土ブロック含む明黄褐色砂礫混じりシルト質粘土＝地山で、奥、東西側壁ともこの層を掘り窪めて第1石目を据えていた。

床の約2/3には敷石が敷設されていたが、床面との間に埋土層＝灰オリーブ色砂混じりシルト質土があり、敷石が抜かれた火葬時の被熱痕がこの埋土上面に見られた。このことから、古墳築造当初には敷石はなく、追葬時に敷設されたことが知れる。敷石は、10～50cm大の不定形の自然石が用いられており、小石などを間隙部に詰め、丁寧に敷設されていた。

入口中央には幅0.3～0.5m、長さ1.2m、深さ0.15mを測る長舌状のSD6が穿かれていた。



第7図 第4遺構平面実測図 (1/150)



第8图 12号墳平面・断ち割り断面実測図 (1/50)

東西断ちぎり断面

地山・土石流

- A 土に黄褐色 25Y6/4 砂礫混じり砂質シルト-地山
  - B 灰褐色 7.5YR4/2・土に黄褐色 10YR5/2 砂礫混じり砂質シルト やや粘土質
  - C 黄褐色 2.5Y5/4・灰黄色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土 シルト質強い
  - D 褐色 10YR6/1・褐色 7.5Y4/4 砂礫混じり粘土質シルト
  - E 土に黄褐色 10YR5/2・灰褐色 7.5YR5/2 砂礫混じり粘土質シルト
  - F 土に黄褐色 10YR5/3・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり粘土質シルト ややシルト質強い
  - G 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質粘土
- 西側上へ > は墓坑掘削前計測
- <1> 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト やや砂質
  - <2> 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト やや粘土質
  - <3> 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土
  - <4> 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <5> 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <6> 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じり砂質シルト やや粘土質
  - <7> 土に黄褐色 2.5Y6/4 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <8> 土に黄褐色 2.5Y6/4 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <9> 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じり砂質シルト
  - <10> 灰オリーブ色 5Y6/2 砂礫混じりシルト質土 ややシルト質
  - <11> 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土
  - <12> 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <13> 暗灰黄色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土 礫多い
  - <14> 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土 礫多い
  - <15> 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土 礫多い
  - <16> 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - <17> 土に黄褐色 2.5Y6/4 砂礫混じりシルト質土 やや小礫含む
  - <18> 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土
  - <19> 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土 ややシルト質
  - <20> 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土 ややシルト質
  - <21> 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土 やや砂質
  - 22 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土 やや砂多い
  - 23 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土
  - 24 灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土
  - 25 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土 小一丈礫含む
  - 26 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土 小礫やや多い
  - 27 土に黄褐色 7.5YR6/4 砂礫混じりシルト質土
  - 28 灰褐色 7.5YR5/2 砂礫混じりシルト質土 小礫多い
  - 29 土に黄褐色 10YR6/3 砂礫混じりシルト質土

石室西側壁面

- ① 土に黄褐色 7.5YR5/3 砂礫混じりシルト質粘土 やや礫多い
- ② 褐色 7.5YR4/3 砂礫混じりシルト質粘土
- ③ 灰褐色 7.5YR5/2 砂礫混じりシルト質粘土
- ④ 灰褐色 7.5YR6/2 砂礫混じりシルト質粘土 砂やや多い
- ⑤ 土に黄褐色 7.5YR6/3 砂礫混じりシルト質粘土
- ⑥ 灰黄褐色 10YR6/2 砂礫混じりシルト質粘土 砂やや多く含む
- ⑦ 灰褐色 7.5YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土 やや砂質

石室東側壁面

- ① 灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質粘土
- ② 灰褐色 7.5YR4/3 砂礫混じりシルト質粘土 やや礫多い
- ③ 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質粘土 やや粘土質
- ④ 土に黄褐色 10YR3/3 砂礫混じり粘土質シルト
- ⑤ 灰黄色 2.5Y5/1 砂礫混じり粘土質シルト やや砂多い
- ⑥ 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じりシルト質土
- ⑦ 黄褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト質土
- ⑧ 褐色 3Y4/1 砂礫混じりシルト質土

東柱上

- (1) 灰黄褐色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質土 やや砂多い
- (2) 褐色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土
- (3) 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土
- (4) 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土 やや砂質
- (5) 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土
- (6) 灰褐色 7.5YR5/2 砂礫混じり粘土質シルト
- (7) 土に黄褐色 2.5Y6/4 砂礫混じりシルト質土
- (8) 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じり砂質シルト
- (9) 土に黄褐色 (粗) 色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土 シルトやや強い
- (10) 黄褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト質粘土 ややシルト質強い
- (11) 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質

型穴式小石室掘り内陣上

- (12) オリーブ灰色 2.5GY5/1・土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じりシルト質土 (表込め)

南北断ちぎり断面

土石層

- A 黄褐色 10YR5/6 砂礫土
  - B 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質粘土 小・中礫やや多い
  - C 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり砂質シルト
  - D 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫土
  - E 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じり粘土 ややシルト
  - F 灰褐色 7.5YR4/3 砂礫混じりシルト質粘土 ややシルト質強い
  - G 褐色 10YR5/1 砂礫混じりシルト質粘土 小・中礫やや多い
  - H 灰褐色 7.5YR5/2 砂礫混じり粘土 小・中礫やや含む
  - I 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じり粘土質シルト
  - J 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じり砂質シルト 小礫やや多い
  - K 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり砂質シルト 小礫多い
  - L 土に黄褐色 7.5YR3/4 砂礫混じり粘土質シルト 砂やや多い
  - M 灰黄色 5Y5/1 砂礫混じり粘土質シルト やや粘土質強い
- 東側掘り込み内土 (表込あり)
- ① 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質粘土
- 計上
- 1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり粘土質シルト
  - 2 黄褐色 2.5Y5/3 粘土質シルト 砂少し含む
  - 3 灰オリーブ色 5Y5/3 砂礫混じり粘土質シルト
  - 4 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり砂質シルト
  - 5 黄褐色 10YR5/6 砂礫混じり砂質シルト 砂質強い
  - 6 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じりシルト質土
  - 7 土に黄褐色 7.5YR5/4 砂礫混じり粘土質シルト やや砂多い
  - 8 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり粘土質土
  - 9 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土
  - 10 灰黄色 5Y5/1 砂礫混じり粘土質シルト
  - 11 土に黄褐色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土
  - 12 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - 13 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じり粘土質シルト シルト質強い
  - 14 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり粘土質シルト
  - 15 土に黄褐色 7.5YR5/4 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - 16 土に黄褐色 7.5YR5/4 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - 17 黄褐色 10YR5/6 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - 18 土に黄褐色 10YR6/4 砂礫混じり粘土質シルト
  - 19 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり粘土質シルト
  - 20 土に黄褐色 10YR5/3 砂礫混じり粘土質シルト
- 中分層上
- 一 土に黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり粘土質シルト

### 埋土状況(第9図 図版13)

残存していた石室内の敷石上部約1.2mの埋土は、6層に大別できる。

最上部の第1層は暗灰黄色・にぶい黄褐色砂礫混じり上は、厚さ約20～30cmにわたり第8層相当土で、須恵器杯身(1～3)などととも瓦器・土師器の小・細片を包含していた。古墳上部は、すでにこの時期までには破壊されていたことを知れる。

第2層はにぶい黄褐色砂礫混じり粘質土。

第3層は褐色砂礫混じりシルト質土。

第4層は灰褐色・にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土、第2～4層から遺物は出土しなかった。

第5層(敷石上面土層)は、にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土で、やや粘土質の箇所があった。黒色土器(35)など少量の遺物を包含していたが、大小さまざまな礫とともに奥壁部および中央付近から多量の人骨を検出した(後述)。

第6層は、黄褐色砂礫混じりシルト質土で、敷石全面にわたっていたわけではないが、古墳時代の副葬品をほぼ覆っていた。

### 壁面状況

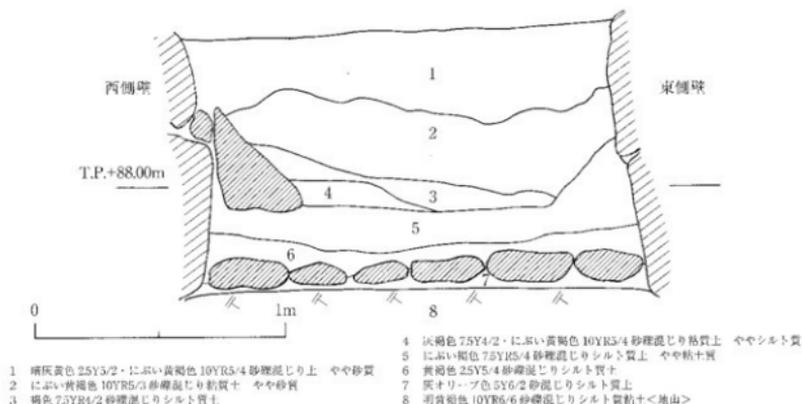
奥壁の1段目最下部を除く壁面中央および左面は、橙色(5YR7/6)、にぶい橙色(7.5YR7/4)ないし灰色(10Y6/1)・暗灰色(N3/)を呈した被熱および黒煙・煤(2段目左)跡、および剥離または亀裂が見られた。左側壁は奥から4石まで1段目最下部を除いた壁面が橙色(5YR7/6)ないしにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、右側壁も奥から3～4石目間の壁面は1段目最下部を除いて橙色(7.5YR7/6)からにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、被熱の跡が見られた(第50図参照)。

### 床面状況と遺物出土状況

#### 敷石状況など

敷石は、奥壁から両側壁3石目までの3.8mに見られ、4石目から入口にかけては敷設されていなかった。

敷石の2箇所、奥壁側の東北部および西側壁中央側の西南部に、被熱した石群および焼土箇所があり、敷石および露出した敷設下面は赤色(10R4/6)、明赤褐色(2.5YR5/6)、黒色(5Y2/1)などに変色



第9図 12号墳横穴式石室内埋土断面実測図





第11図 12号横穴式石室内遺物出土状況平面実測図 (1/20)

### 敷石上面遺物出土状況

(第11図 図版9・10)

敷石上面などから、人骨、須恵器、土師器、大刀、馬具、耳環、小玉が出土した。遺物は奥壁に近い北遺物群と敷石西端付近の南遺物群に大別できる。

北遺物群は奥壁側の上器群-須恵器の杯身(17・18)、杯蓋(5・6)、壺(19・24・25)器台(26・27)、高杯(29)、脚(31)、土師器杯(39)など、東側壁側の刀(324)と須恵器杯蓋(9)、馬具(323)からなる。奥壁土器群は散乱した状態で完形のもの少く、原位置を保っていなかった。刀・杯蓋・馬具は元位置のままと思われる。ただ、須恵器杯身(18)以外の遺物には被熱の跡は見られず、刀(324)の西から被熱してない長骨片(部位不明)が出土し、周辺には焼骨細片が散乱していた。これらを取り除いた下に被熱した石や焼上面があった。

南遺物群は、焼骨群と土器群などで、後者は破損などしているものの、敷石端部周辺にあって、ほぼ原位置を保っていた-須恵器の杯蓋(7・8・10~13)・壺(20~22)・提瓶(33・36)など、土師器の杯(38・40)・脚(42)、鉄製品など。これらの土器には被熱した痕跡はみられなかった。焼骨群の下から被熱により変色した敷石・焼土面を検出した。

両遺物群の遺物のほとんどに被熱跡は見られず、それぞれ火葬後に納められたり、副葬されたということになる。



#### d. 横穴式石室内出土遺物

上器(第13～15図1～4 図版22～26・36)

埋土より須恵器が出土した。

1～3は杯身である。体部が深い。立ち上がり部は長く内上方へ伸び、受部は外方に水平方向へ伸びる。2は端部が面を持ち沈線を巡らす。体部外面は底面中央部より約1/2～2/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。TK47型式に該当する。5世紀後半。

敷石上面上層(第5層)より土師器が出土した。

35は黒色上器である。体部内面が黒い、いわゆる内黒である。口縁部は外反する。体部外面は粗いヘラミガキ、内面は細かいヘラミガキ調整する。9世紀後半。

敷石上面より須恵器・土師器が出土した。

4～34・36は須恵器である。蓋杯・杯身・壺・器台・高杯・鉢・提瓶の器種がある。

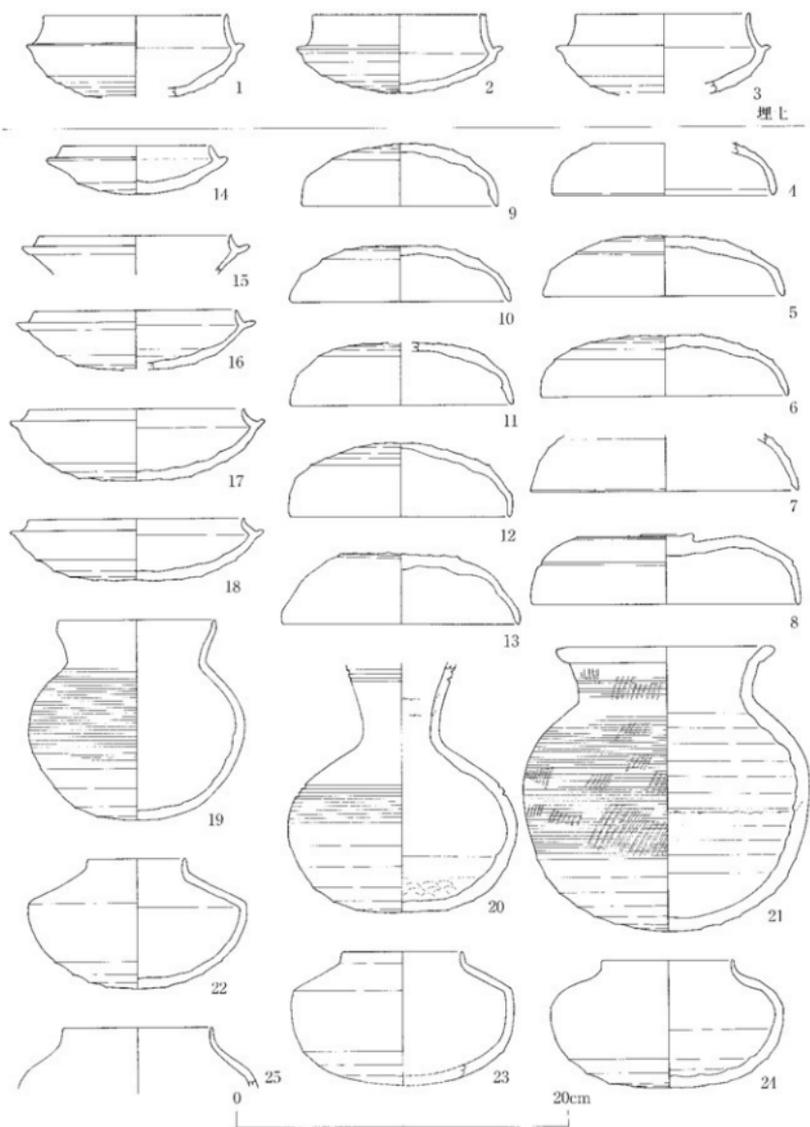
4～7・9～13は蓋杯である。天井部がやや平坦なものや丸みを持つものがある。口縁端部は面を持ちわずかに沈線を巡らすものもあるが、丸く終わるのが大半である。天井部外面は天井頂部より約1/2～1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。8は有蓋高杯の蓋である。凹面がある比較的大きなつまみをもつ。口縁部と天井部の境に稜が付く。天井部はカキメ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

14～18は杯身である。立ち上がり部が短く内傾して伸びた後外湾し、受部は外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。底部は丸みを帯びる。体部外面は底面中央部より約1/2の範囲を回転ヘラ削り調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。14は体部外面に暗オリーブ色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が残る。

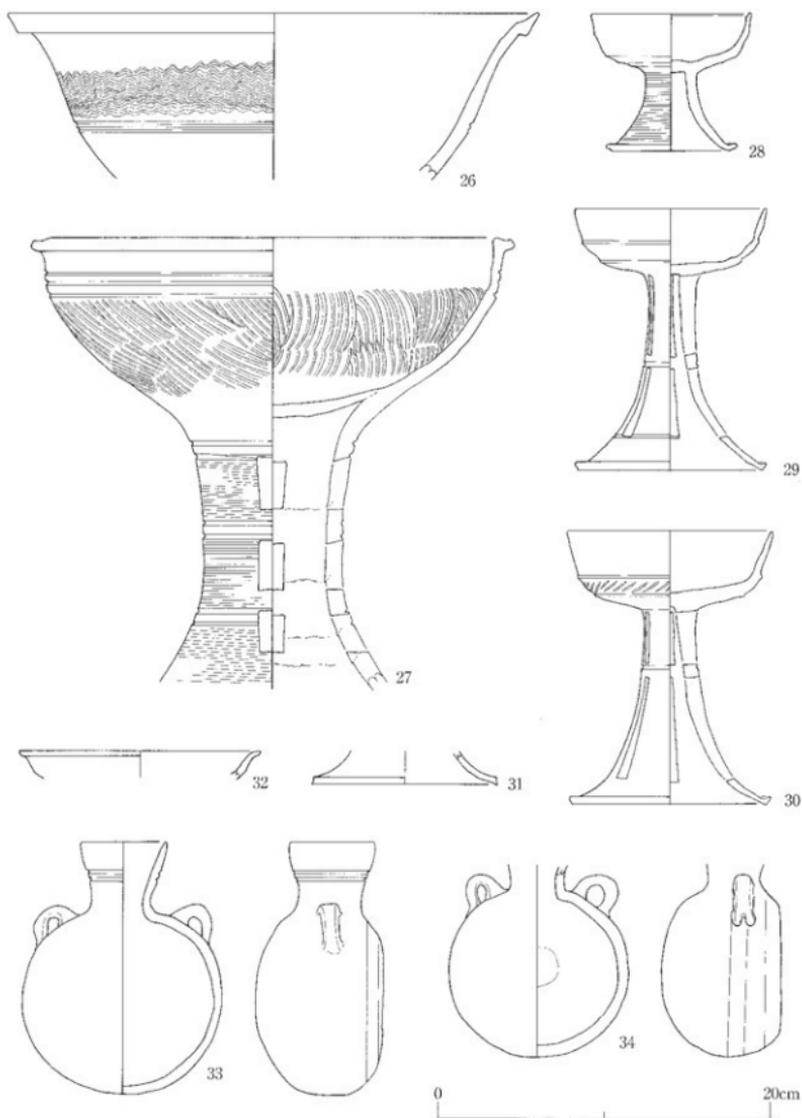
19～25は壺である。19・21は広口壺である。19は端部がやや内傾して直立する口縁部である。外面底部から体部下位にまで回転ヘラケズリ調整、中位から肩部にかけてカキメ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。21は球形に近い胴部を呈し、短い口縁部が丸みを持って外反する。外面底部から体部下位まで回転ヘラ削り調整、中位から頸部にかけて平行タタキ調整後ナデ消し、さらにカキメ調整する。内面は底部を不定方向のナデ調整、体部から口縁部は回転ナデ調整する。20は長頸壺である。外面は頸部と体部に2帯の凹線を施す。外面底部から中位まで回転ヘラケズリ調整し、肩部をカキメ調整する。体部内面底部の圧痕は手持ち時の指頭圧痕と思われる。その他内外面は回転ナデ調整する。22～25は短頸壺である。大きく肩の張った算盤玉形を呈する体部から短く上方へ伸びる口縁部をもつ。体部外面は底面中央部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

26・27は器台である。26は杯部が碗状を呈し、口縁部は外反する。杯部外面は2帯の凹線によって2段に区分され、その上方1段に櫛描波状文を施す。その他内外面は回転ナデ調整する。27は杯部が半球状を呈し、口縁端部は面を持つ。杯部外面は3帯の凹線によって2段に区分され、その下方1段に平行のタタキを施す。脚部は2帯の凹線文によって3段に区分され、各區画にカキメ調整と長方形のスカシ孔を4方向に穿つ。スカシ孔は3段が残存する。杯部内面は同心円の当て具痕が残る。

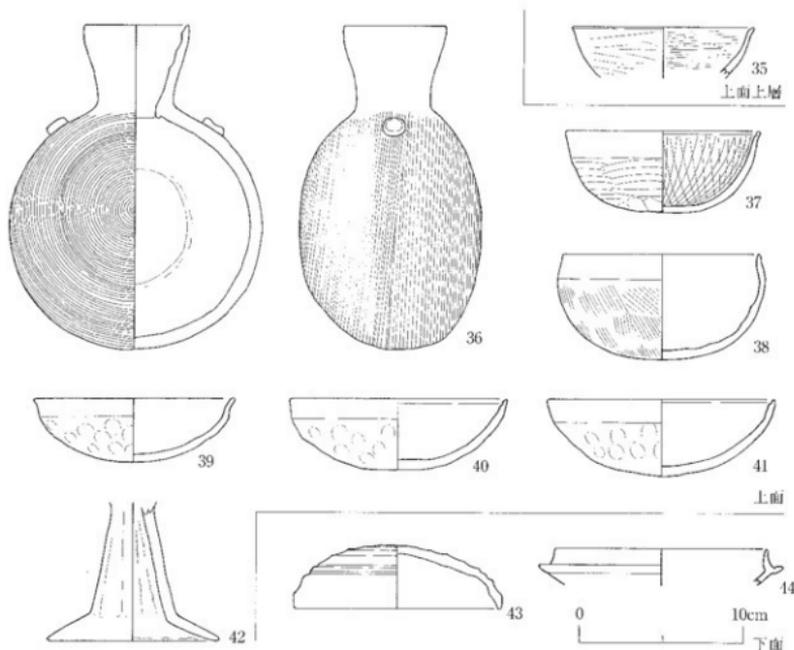
28～31は高杯である。28～30は無蓋高杯である。脚部は細長いものと短いものがある。28は脚部の短いもので、杯部は碗状を呈する。口縁端部は面を持つ。脚部外面はカキメ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。29・30は脚部の長いもので、杯部は碗状を呈する。口縁部と体部には2段の稜がつく。30は杯部外面に櫛描列点文を施す。脚部は2段の長方形のスカシ孔を3方向に施す。その他内外面は回転ナデ調整する。31は脚である。裾部が緩く立ち上がり裾端部は面を持つ。内外面は回



第13图 12号竖穴式石室内出土土器实测图(1)



第14图 12号横穴式石室内出土上器实测图(2)



第15図 12号墳横穴式石室内出土土器実測図(3)

転ナデ調整する。

32は鉢である。口縁部は外反する。内外面は回転ナデ調整する。

33・34・36は提瓶である。33・34は体部が片面だけ丸く膨らみ、肩部の2ヶ所に輪状の把手が付く。丸く膨らんだ面を体部前面とすると、体部前面は回転ナデ調整する。体部背面は回転ヘラケズリ調整する。体部内面は回転ナデ調整する。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整する。体部外面は暗オリーブ色のガラス質の小斑が付着し、自然釉が残る。33は完形である。口縁部はやや内傾して直立気味に開き、口縁端部は丸く終わる。頸部に2帯の凹線文を施す。34は体部背面の内面に長径2.4cm、短径1.2cmの円盤閉塞の痕跡が残る。36はほぼ完形である。口縁部はやや内傾して直立気味に開き、口縁端部は丸く終わる。体部前面と背面にカキメ調整を施す。体部内面は回転ナデ調整する。体部背面の内面には長径7cm、短径3.1cmの円盤閉塞の痕跡が残る。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整する。体部は両面とも丸く膨らみ、肩部の2ヶ所に短径1.3cm、長径1.4cmの扁平形浮文状の退化した把手が付く。26・27はTK209型式に該当する。6世紀末～7世紀初頭。その他はTK43型式に該当する。6世紀後末。

37～42は上師器である。杯・鉢・脚の器種がある。

37・39～41は「平城宮発掘調査報告X1 本文」(奈良国立文化財研究所1982)の分類における杯Cである。37は丸底風の小平底から湾曲して立ち上がる深めの器形を早する。口縁部は短く屈曲して

外反する。底部外面をハラケズリ調整、口縁部外面をハラミガキ調整する。体部内面は斜格子状の暗文を施す。7世紀前半。39～41は平底に近い丸底の底部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反するものと直線的に伸びるものがある。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面は強いヨコナデ調整、体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法は不明である。7世紀中頃～後半。

38は鉢A(奈良国立文化財研究所1982)である。丸い体部を持ち、内湾気味に開く口縁部が端部近くで内傾する。いわゆる鉄鉢型である。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はハケメ調整後、ナデ調整する。体部内面はユビオサエ調整後、ナデ調整する。7世紀前半～中頃。

42は高杯の脚部である。下部で大きく広がり、裾端部は丸く終わる。脚部外面は面取り後、ナデ調整する。脚部内面はユビオサエ調整する。柱状部内面は杯部と脚部の接合時にできたシボリ痕、裾部内面は布日痕が明瞭に残る。7世紀中頃。

敷石下面より須臾器が出土した。

43は蓋杯である。天井部から口縁部にかけて丸みを持つ。口縁端部は丸く終わる。天井部外面は天井頂部より約1/3の範囲を回転ハラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

44は杯身である。立ち上がり部が短く内傾し、口縁端部は丸く終わる。受部は外上方へ伸びる。内外面は回転ナデ調整する。TK43型式に該当する。6世紀末。

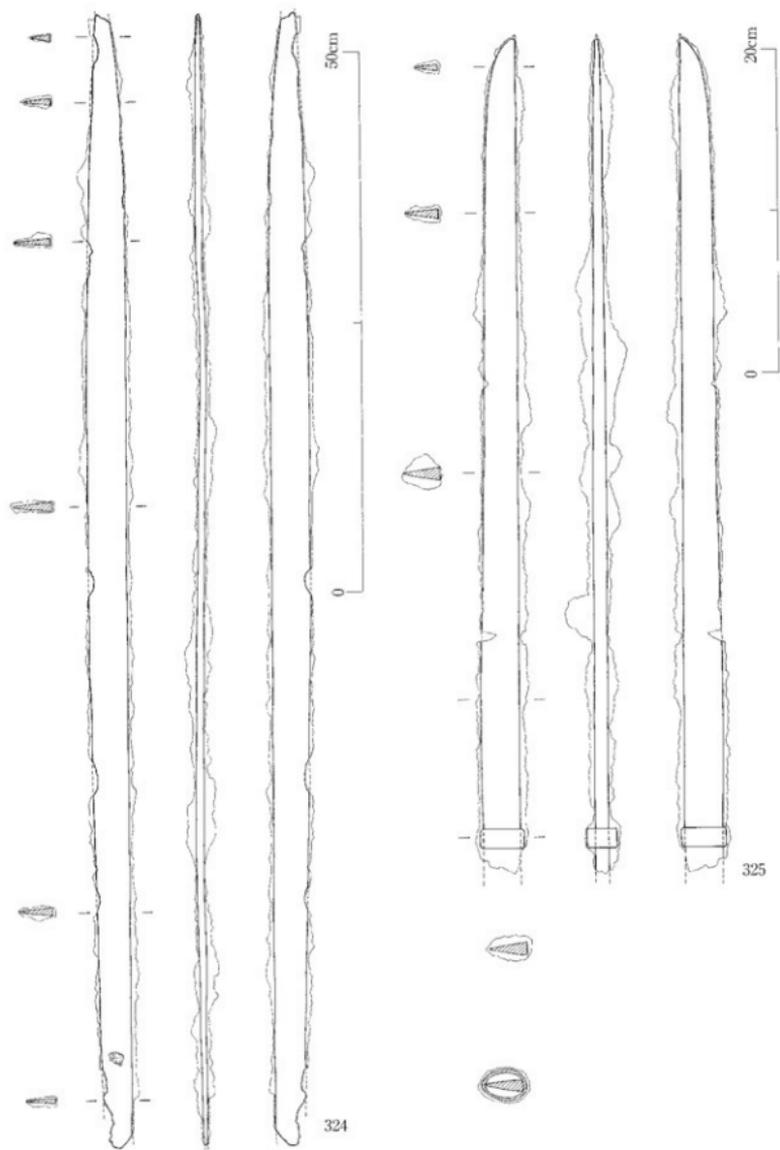
#### 金属製品(第16・19図320～323 図版34・35)

耳環・馬具・刀がある。

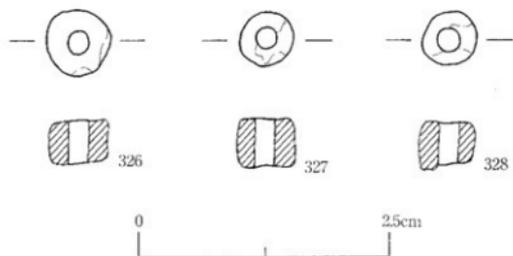
320は耳環である。中実の銅芯に塗金したものである。切れ目のある環状を呈し、環の合わせ目は0.2cmほど開く。断面形は楕円形を呈する。表面の塗金は剥落して緑錆が全体を覆っているが、部分的に塗金が残存する。塗金は検査の結果、銀・金・銅合金であることが判明した。外径3.15×2.75cm、断面径0.65～0.86cm、重さ20gを測る。横穴式石室内敷石の下位から出土した。

321～323は馬具である。321は瓠形環状鏡板の一部である。環の一部を絞っていわば「だるま型」に大小二つの環とし、小さいほうを固定的な立間にする。断面形が方形を呈する。最大残存長9.4cm、環身径0.7cmを測る。322は引手の一部である。柄が一本の鉄条からなる一本柄引手で、断面形が方形の棒状を呈する。一端に壺と呼ばれる円環がつき、一体化している。さらに柄と壺が「く」の字に屈曲する。残存長5.4cm、厚さ0.5cmを測る。323は環状鏡板付轡である。鏡板、銜、引手が残るが、折り重なった状態で錆着して一体となっている。鏡板は321と同じ瓠形環状鏡板である。銜は両端に小円環が付く鉄棒を2本連結した二連式である。断面形は方形である。引手は322と同じく、一本柄引手で断面形が方形の棒状を呈する。一端に壺と呼ばれる円環がつき、柄と壺が「く」の字に屈曲する。引手・銜の連結法は橋金具連結法で、鏡板と銜、引手との連結に橋金具と呼ばれる小遊環を用い、遊環に鏡板・引手・銜を同時に挿める。これは花谷浩氏の型式分類「瓠形素環鏡板付轡Ⅰ式」に該当する。鏡板は最大高9.4、最大幅8.0cm、環身径0.7cm、立間最大高3.6cm、最大幅3.7cmを測る。銜は長さ8.0cm、厚さ0.5cmを測る。円環直径2.5cm、厚さ0.8cmを測る。引手は長さ15.4cm、厚さ0.9cm、円環の長径2.7cm、厚さ0.9cmを測る。遊環は長径3.4cm、厚さ1.1cmを測る。これら全ての馬具は型式分類・法量が共通していることから、同一個体の可能性もある。岡安光彦氏の編年第Ⅱ段階に属する。6世紀後半～末。横穴式石室内敷石上面から出土した。

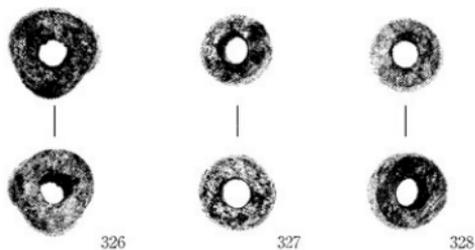
324・325は刀である。刃部は背で最も厚く、刃部に向かって両面より薄くする。半造りで、刃部の断面は二等辺三角形を呈する。核の形状は角棟である。324は切先および茎部を欠損する。刀身に刀



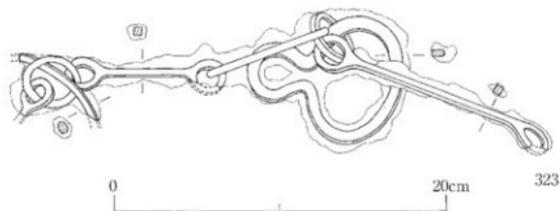
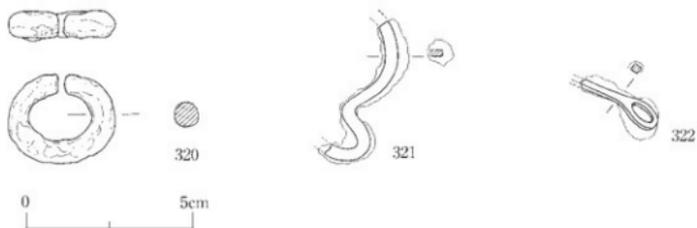
第16图 12号填槽穴式石室内出土铁刀实测图



第17图 12号墳横穴式石室内出土小玉実測図



第18图 12号墳横穴式石室内出土小玉写真



第19图 12号墳横穴式石室内出土耳環・馬具実測図

の上軸(背)に平行した木製棺の痕跡が一部残存する。残存長104.3cm、刃部幅0.35cm、残存厚0.7cmを測る。横穴式石室内敷石上面から出土した。325は基部を欠損する。刀身下部に鉄板を曲げた、長さ2.7cm、短径1.9cmを測る楕円形に近い鞘口金具が残存する。残存長51.4cm、刃部幅2.3cm、残存厚0.8cmを測る。被熱。横穴式石室内北東隅から出土した。

小玉(第17・18回326～328)

326～328は滑石製白玉である。326は直径0.6cm、厚さ0.4cm、327は直径0.5cm、厚さ0.4cm、328は直径0.5cm、厚さ0.4cmを測る。いずれも0.2cmの孔をあける。ほぼ中央にある最大径から、なだらかに平らな両端面に続く太鼓形を呈する。小口面は両側とも研磨を施す。横穴式石室内敷石上面から出土した人骨群を採掘土ごと取上げ後、洗浄した際に確認した。

#### e. 小結

12号墳は、尾根から土石流段丘上に築かれていた。

古墳は上部だけでなく周縁も破壊されていて、明確な墳形および規模は不明。上部・西は棚田形成、南はS K 2 掘削時の12・13世紀に破壊され、埋没した。

南に開口する無袖式の横穴式石室を主体部とし、奥壁2段、東西側壁とも2～1段5石分、残存の高さ1.23～0.52m、奥壁の幅1.47m、残存長4.85mを測った。

墓坑は、奥壁および西側壁側は地山を掘り込んでいたが、西側壁側は封土下部を盛ってから掘り込んであった。

石室底面は当初、地山上に埋土層=灰オリーブ色砂混じりシルト質土があった(1次埋葬)。

敷石は、奥から約2/3に敷かれていた。

奥壁と東側壁の奥と敷石、西側壁中央付近と敷石の2箇所に被熱跡および焼骨の散乱・集積が見られ、石室内で2回は火葬が行なわれた(2・3次埋葬)。

敷石の一部=火葬施行場所は、火葬時(通風のため)に抜き取られていた。

焼骨は大人2、子供1の3体分が確認された。

出土遺物のうち、刀(325)、須恵器(18・43)は被熱の影響がみられたが、大半の遺物には被熱跡は見られなかった。また、奥壁側の北遺跡群の下から被熱した石、焼土面を検出し、大半の遺物は火葬後に納められた。

出土した土器は大きく北遺物群と南遺物群の2群に分かれ、北遺物群は一部原位置を保っているものの大半は再利用時に追いやられていた。南遺物群は焼骨集骨後に置かれたもので、土器に時期差が見られ、複数次の副葬土器が含まれている。

9世紀後半に埋葬場所として再利用された。

再利用時の人骨は、奥に押し込まれた5体と、中央に1体の6体分が確認された。

13号墳(第20図 図版14)

小竪穴式石室である。12号墳東裾部に形成されていた。12号墳に付随したものかもしれないが、検出した面は12号墳封土下部および地山面であり、12号墳との明確な関係を知ることができなかったことから、別古墳=13号墳とした。

石室上部および北・南はSK6によってほぼ直行する形で攪拌され、石室の蓋石は1石を除きSK6内などに散乱していた。

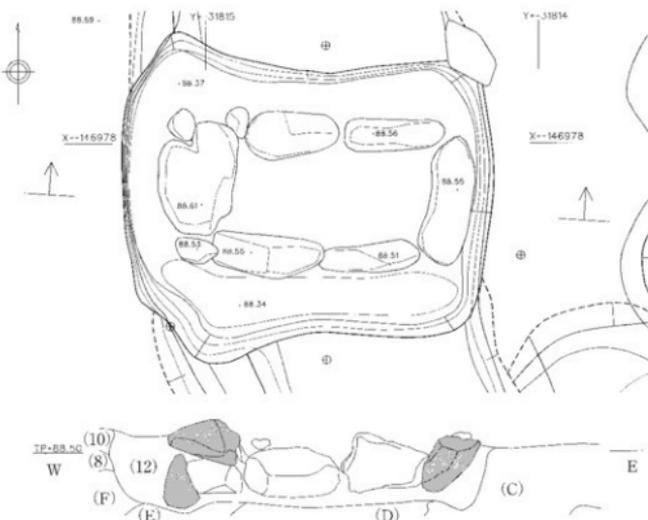
SK6は、南北2.0m、東西1.1m、深さ0.05～0.15mを測る隅丸の不定の長方形を呈し、西側に段を有していた。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)砂泥じり上で礫を含んでいたが、遺物は出土しなかった。用途・時期とも不明。

石室は、4面の石圍いと1石の蓋石を検出した。東西方向を長軸とし、東・西両小口1石と、北南両側壁3石の各1段からなる。

東西1.3m、南北0.9m、残存高0.18mの墓坑内にあり、内法は、東西長0.7m、南北幅0.3m、残存高0.15mを測った。東西小口および南北両側壁に25～40cm大の石を配し、各石は長辺を横たえ、やや平坦な面を内側にして、5～10cm大の石が詰められていた。西小口石上に平坦面を下にした1石の蓋石があった。

石材の重なり状態から、墓坑東面に沿って東小口石を置き、南北両側壁は東側から西側へほぼ同大の石、そして3石目に大きさの異なるやや小ぶりの石を据えて長さを調節し、西小口石を置いて構築されており、両側壁を扶むように両小口石が配されている。各石とも、内面は下方に内傾していた。

石室内は2層に分かれ、上層は黄褐色(2.5Y5/3)砂礫泥じりシルト質土、下層は灰オリブ色(5Y5/2)・暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫泥じりシルト質土で埋まっていた。墓坑埋土はオリブ灰色・にぶい黄褐色砂礫泥じりシルト質土。いずれからも遺物は出土しなかった。



第20図 13号墳竪穴式小石室平・断面実測図(1/15) - 層名はP13参照 -

#### 第4遺構(第7図 図版15)

地山(黄灰色砂混じりシルト質土)および12号墳封土上面において、2地区中央部で前述した12号墳の墳丘・横穴式石室・13号墳とともに上坑2基(SK6・7)、ピット3個(SP56~58)、溝3条(SD7・8・9)、落ち込み1基を検出した(SK6は前述)。

SK7は、0.6×0.65mの平面楕円形を呈し、深さ0.12mを測る。埋土は灰オリーブ色・褐色の砂礫混じり土で、遺物は出土していない。

SD7は、検出の長さ3.2m、幅0.7m、深さ0.11mを測る。礫が列状をなして埋もれていた。埋土は灰色・黄褐色砂礫混じりシルト質土で、須恵器小型瓦片が出土した。

SD8は、13号墳東部に南北方向に延び、南部は東西に拡幅し、北は攪乱により欠損し、ともに調査地外へ延びる。北側では西肩は2段に落ち、検出幅3.5m、深さ0.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土で、形象埴輪(309)、須恵器、土師器などが出土した。

SD9は、東西に舌状に延び、西は後世の棚田により切断されている。検出の長さ6.0m、幅2.7m、深さ0.24m。埋土はオリーブ灰色砂礫混じりシルト質土で、遺物は出土しなかった。

SP56~58は、径0.2m前後、深さ0.1m前後を測り、埋土は灰色系の砂礫混じりシルト質土であったが、遺物は出土しなかった。

落ち込みは、調査地外に延び、検出の平面形は舌状、断面鉢状を呈する。検出の長さ4.5m、南北幅2.28m、深さ0.9mを測る。埋土は3層に分かれ、上部は第8層で被われていた(第21図)。埋土内からは円筒埴輪(299)、須恵器などが出土した。

#### 第3遺構

##### a. 遺構(第22図 図版16~19)

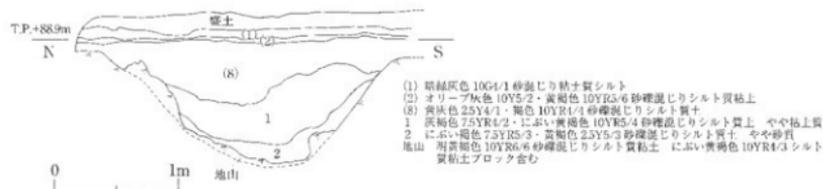
第9層上面および地山、第4遺構上面で検出した。

第9層は、1地区南端から2地区・3地区北端の東部に広がる黄灰色砂混じりシルト質土、灰色シルト質粘土、暗緑灰色砂混じり粘土などの整地土で、土師器皿(294)、瓦器碗(295・296)、円筒埴輪(306)とともに黒色土器、須恵器などの遺物が出土した。

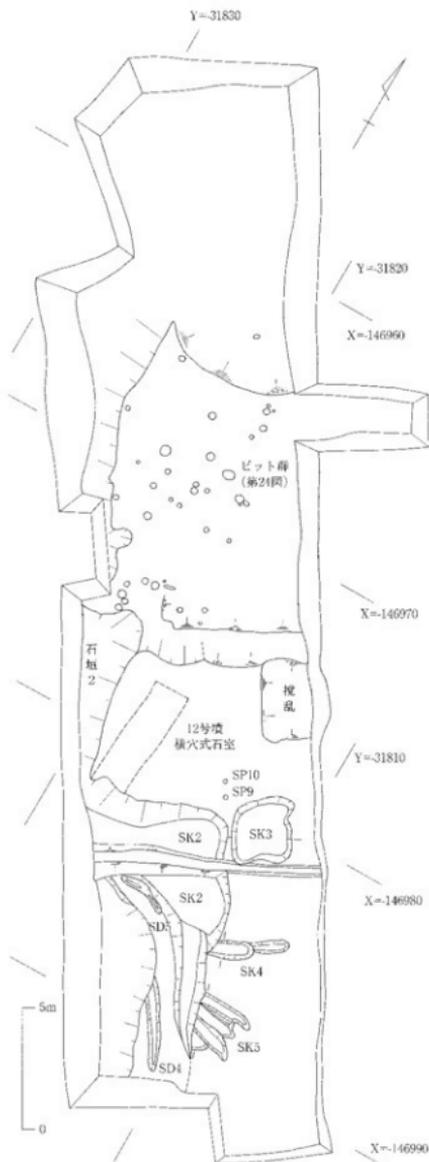
2地区中央における南北の段差を境にして、遺構状況は異なっていた。1地区は土石流による礫・砂・シルトが北へ傾斜して堆積していた。2地区北西は古墳を削り込んで石垣(石垣2)を築いて平坦面を形成し、2地区南および3地区でピット2個(SP9、SP10)、溝2条(SD4、SD5)、上坑4基(SK2、SK3、SK4、SK5)2地区北部の9層および地山上面においてピット38個(SP12~19、22・23・26、28~52、54・55)を検出した。

SP9、SP10は、後述するSK2、SK3間の北にあり、径0.2m前後、深さ0.05m前後。埋土はともに灰色砂混じり土。遺物は出土していない。

SD4、SD5は、第2遺構の西南棚田層の下で検出した溝で、上部耕作時の層で大破損した。耕作に伴う遺構で、幅0.1~0.15m、深さ0.05mを測る。遺物は出土していない。



第21図 落ち込み断面実測図(東壁・部分)

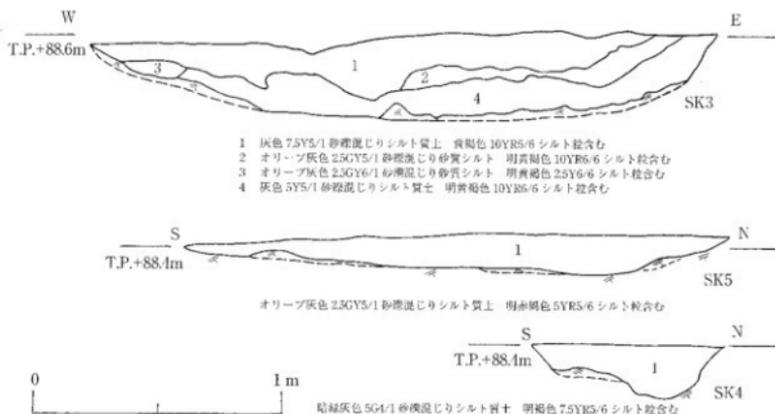


第22図 第3遺構平面実測図

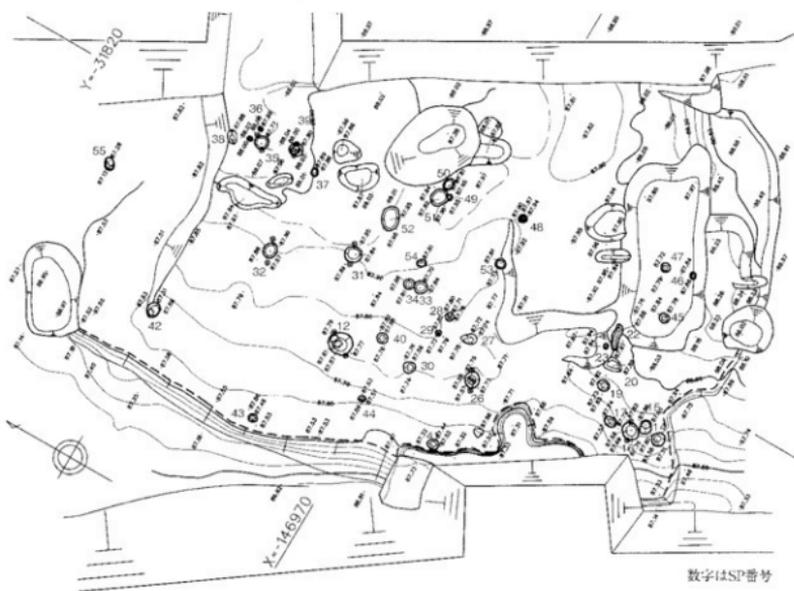
SK 2は、第8層を取り除いた段階で、前述した12号墳石室の前面から東部にかけて礫を多く包む礫土があった。この礫土は石室左側壁2段目前方部の間隙部にもおよんでおり、すでにこの時期には石室上部および墳丘上部は削平されていたものといえる。土坑の西および南は第2遺構時の標田形成で削られ、平面舌状を呈する。検出の南北幅6.5m、東西6.0m、深さ0.81mを測った。埋土は、上部は上記の礫土の灰褐色砂礫上、下部は暗黄褐色・オリープ黄色などの砂礫混じりシルト質土で、須恵器の杯蓋(45・46)、杯身(50～52)、高杯(53～58・60・61)、脚付壺(59・62)、壺(63～65)、器台(66～68)、捩鉢(118～128)、土師器の杯(69・70)、皿(71～108)、羽釜(110～117)、高杯・ミニチュア(109)、瓦器の椀(140～182)、皿(129～139)、中国製白磁碗(183)、埴輪(297・298・300・302・303)、土鍾(314・315)など多くの遺物が出土した。

SK 3は、東西2.5m、南北2.3m、深さ0.34mで、不整の浅鉢状を呈し、底面はほぼ平らであった。埋土は4層に分かれ、灰色砂礫混じりシルト質土、オリープ灰色砂礫混じり砂質シルト、オリープ灰色砂礫混じりシルト質土で各層とも地山の黄褐色ないし明黄褐色シルト粒を含んでいた。遺物は須恵器の甕(184)、土師器の皿(185～196)、瓦器の椀(197～204)、皿(205)、土鍾(316)などが出土した。

SK 4は、西が第2遺構時の標田形成で削られ、平面長舌状を呈する。検出長1.7m、幅0.75m、深さ0.2mを測る。埋土は暗緑灰色砂礫混じりシルト質土で、須恵器・土師器の小片が出土した。東には小・細礫を多く包含した浅く細長い溝状の窪みがあった。



第23図 第3遺構SK3・4・5断面実測図



第24図 第3遺構ピット群平面実測図 (1/100) -ゴチ数字SP-

SK5は、杖状に分かれる不整形の土坑で、西は第2遺構時の標田形成で削られていた。埋土はオリーブ灰色砂礫混じりシルト質土で、須恵器器台(206)、土師器、瓦器など少量の遺物が出土した。

SK2東端から北北西に延びる段1の当初の肩は、大きささまざまな礫で石垣を構築され、長さ約8mにわたって残存していた、検出高1.2mを測る=石垣2。石垣内の礫には破壊された12号墳の石室

の石と思われるものもあった。この石垣面には若干の凹凸があり、近世(江戸時代中ごろ)まで修築されながら活用されていた。石垣内からは瓦器(207)、土師器、磁器などが出土した。

2地区北部の9層および地山上面において検出したビット群-S P 12・14～17・19、22・23・26～55-(第21回)は、径10cm前後のものもあったが、大半は径30～20cmを測り、根石の残存するもの(S P 12・17・26・33・39・43・48・50)があり、掘立柱建物の柱穴群である。第2遺構時の整地などにより削平され、底部のみの浅いものもあって、建物状況を窺うことはできない。

## b. 出土遺物

### SK2出土遺物(第25～31図45～183 図版26～32・37～44)

須恵器・土師器・瓦器・輸入磁器がある。

45～68は須恵器である。蓋・杯・高杯・脚・壺・器台・捏鉢の器種がある。

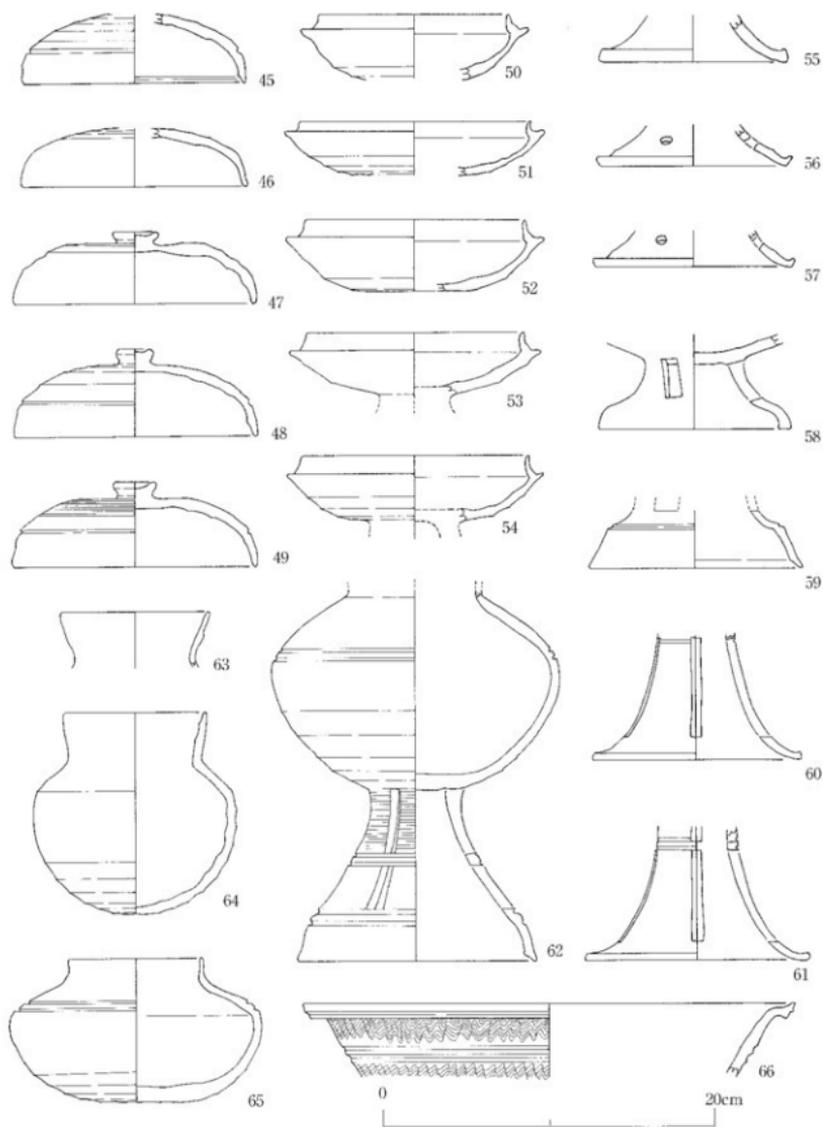
45・46は蓋杯である。45は口縁部と天井部の境に形骸化した稜がめぐり、口縁部内面に内傾する鈍い段を有する。天井部外面は天井頂部より約1/2の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。形態・調整法から、つまみ部は欠損しているが有蓋高杯の蓋とも考えられる。46は天井部から口縁部にかけて丸みを持つ。口縁部は丸く終わる。天井部外面は天井頂部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。47～49は有蓋高杯の蓋である。上部に窪んだつまみを持つ。口縁部と天井部の境に稜が付くものつかないものがある。天井部外面は天井頂部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。49は天井部外面の天井頂部より約1/3の範囲にカキメを施す。

50～52は杯身である。立ち上がり部が短く内傾し、口縁部は丸く終わる。受部は水平方向へ伸びる。体部外面は底面中央部より約1/2～1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

53～58・60・61は高杯である。53・54は有蓋高杯の杯部である。立ち上がり部が短く内傾し、口縁部は丸く終わる。受部は外上方へ伸びる。外面は底面中央部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整するものと、回転ナデ調整するものがある。その他内外面は回転ナデ調整する。55～58・60・61は脚部である。細長いものと短いものがある。55～58は脚の短いもので、55～57は裾部が緩く立ち上がり裾端部は面を持つ。裾部に小円孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。58は脚部に1段の長方形のスカシ孔を3方向に穿つ。内外面は回転ナデ調整する。60・61は脚の長いもので、脚部は1～2帯の凹線文によって2段に区分される。全区画に長方形のスカシ孔を4方向に穿つ。スカシ孔は1～2段が残存する。内外面は回転ナデ調整する。

59・62は脚付壺である。59は脚部である。外反して下方へ伸び、脚部裾で緩やかに内湾する。脚端部は強いナデにより面をなす。脚部は内外面ともに回転ナデ調整する。脚裾部に1条の凹線文を施し、上方に方形のスカシを穿つ。体部内面は回転ナデ調整する。62は体部が肩の張る球状を呈する。脚部は外反して下方へ伸び、脚部裾で緩やかに内湾する。脚端部は強いナデにより面をなす。脚部は内外面ともに回転ナデ調整した後、脚部中に2条、脚裾部に2条の計4条の凹線文によって3段に区分する。その上方2段に長方形のスカシ孔を3方向に穿つ。上方1段はカキメ調整する。体部外面上半は回転ナデ調整後、2帯の凹線文を施す。下半は回転ヘラケズリ調整する。体部内面は回転ナデ調整する。

63～65は壺である。63・64は広口壺である。端部がやや内傾して直立する口縁部である。体部外面は底面中央部より約1/3の範囲を回転ヘラ削り調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。65は



第25图 SK 2出土土器实测图(1)

短頸壺である。大きく肩の張った算盤玉形を早する体部から短く上方へのびる口縁部をもつ。肩部に2帯の凹線文を施す。体部外面は底面中央部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

66～68は器台である。66は杯部である。椀状を呈する。口縁部は外反する。外面は2帯の凹線文によって2段に区分され、それぞれの区画に櫛描波状文を施す。内面は回転ナデ調整する。67・68は脚部である。67は裾部で僅かに湾曲し、端部は面をなす。形状は不明であるがスカシ孔を穿つ。外面は2帯の凸帯、その下方に櫛描波状文を施す。内外面は回転ナデ調整する。68は裾部が「ハ」の字に開き、端部は面をなす。外面は2帯の凸帯を施す。形状は不明であるがスカシ孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。45はTK10～MT85型式に該当する。6世紀中頃～後半。58はTK47型式に該当する。5世紀後半。その他は全てTK43型式に該当する。6世紀末。

118～128は捏鉢である。東播系である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部内外面は回転ナデ調整する。121は体部内外面にユビオサエによる指頭圧痕が残る。127・128は底部である。内外面は回転ナデ調整する。外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。底部は未調整である。127は底部中央に長径約0.7cmの孔を穿つ。12世紀末～13世紀初頭。

69～117は土師器である。杯・皿・羽釜・高杯の器種がある。

69・70は杯C(奈良国立文化財研究所1982)である。69は平底に近い丸底の底部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は直線的に伸びる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面は強いヨコナデ調整、体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法は不明である。7世紀中頃～後半。70は口縁部が若干外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は粗いヘラミガキ調整する。体部内面は放射状の暗文を施す。7世紀中頃。

71～108は上師皿である。口縁部を強くヨコナデして段をなすものと、内湾気味に立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わる。72・77・86・88・93・94・95・98・104は口縁端部を面取りする。体部内外面はナデ調整する。底部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

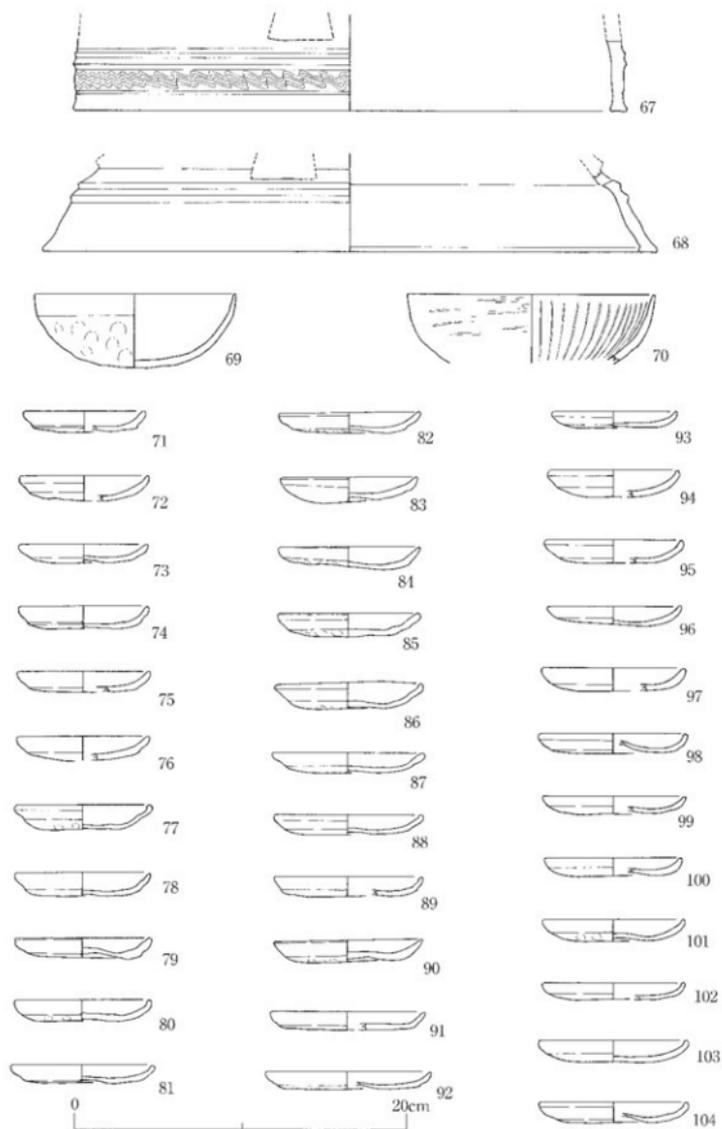
109はミニチュアの高杯である。杯部は椀状を呈する。内外面はナデ調整する。杯部と脚部の外面接合部はユビオサエによる指頭圧痕が残る。7世紀中頃。

110～117は羽釜である。110～116は口縁部が深く内傾して立ち上がり「く」の字状に外反する。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。体部外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整する。体部内外面ともにユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。114は体部内面をハケメ調整する。12世紀後半～13世紀前半。117は口縁部が若干内湾しながら立ち上がる。口縁端部は外上方へつまみ出すように折り返し丸くおさめる。体部外面はヘラケズリ調整する。体部内面は板状工具によるナデ調整する。13世紀後半～14世紀前半。

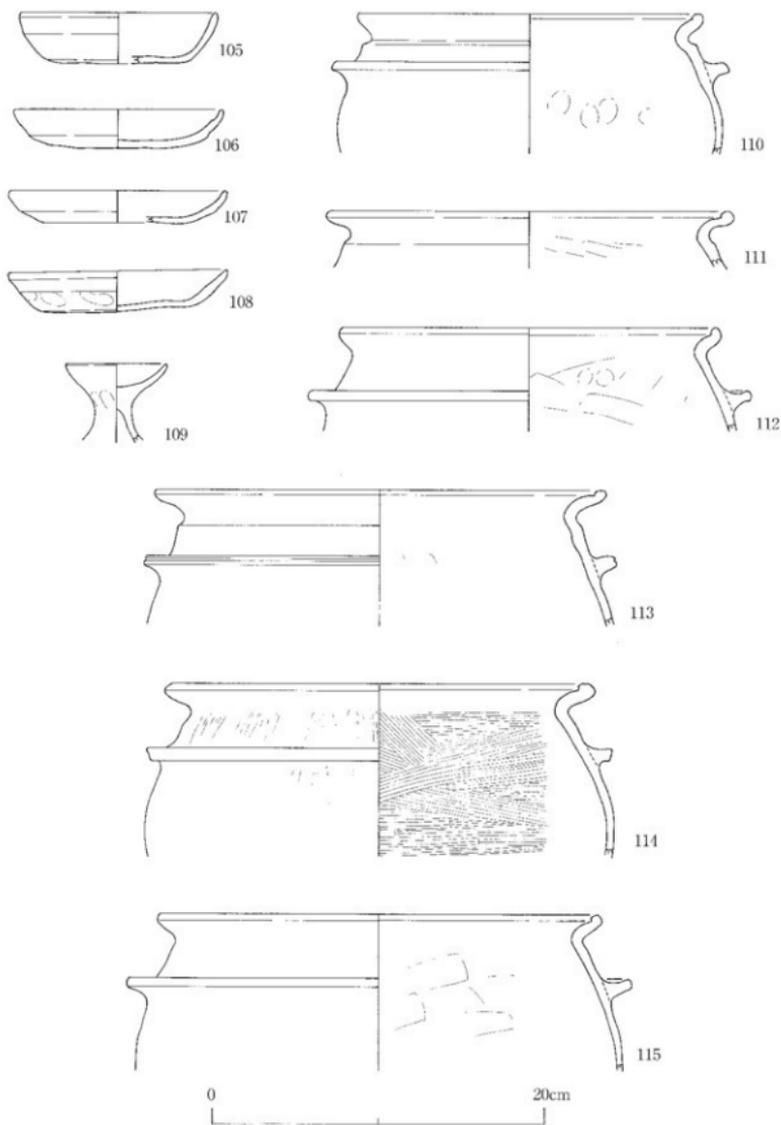
129～182は瓦器である。椀と皿の器種がある。

129～139は皿である。丸底に近い平底、または平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部が外反するものと外上方へ伸びるものがある。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法が不明なものもあるが、見込みに平行線状やジグザグ状の暗文を施すものがある。

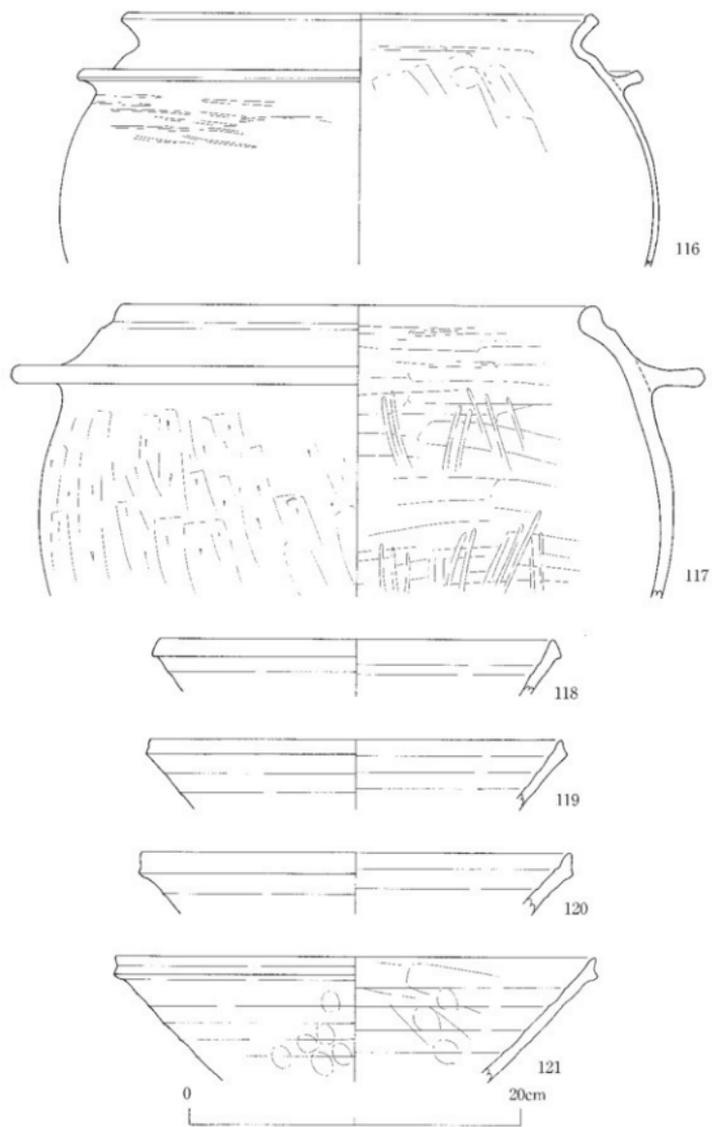
140～182は椀である。140～168は人和型である。体部が浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面には成形時の痕跡が残っているものもあり凹凸が激しく全体に凹んだものが多い。



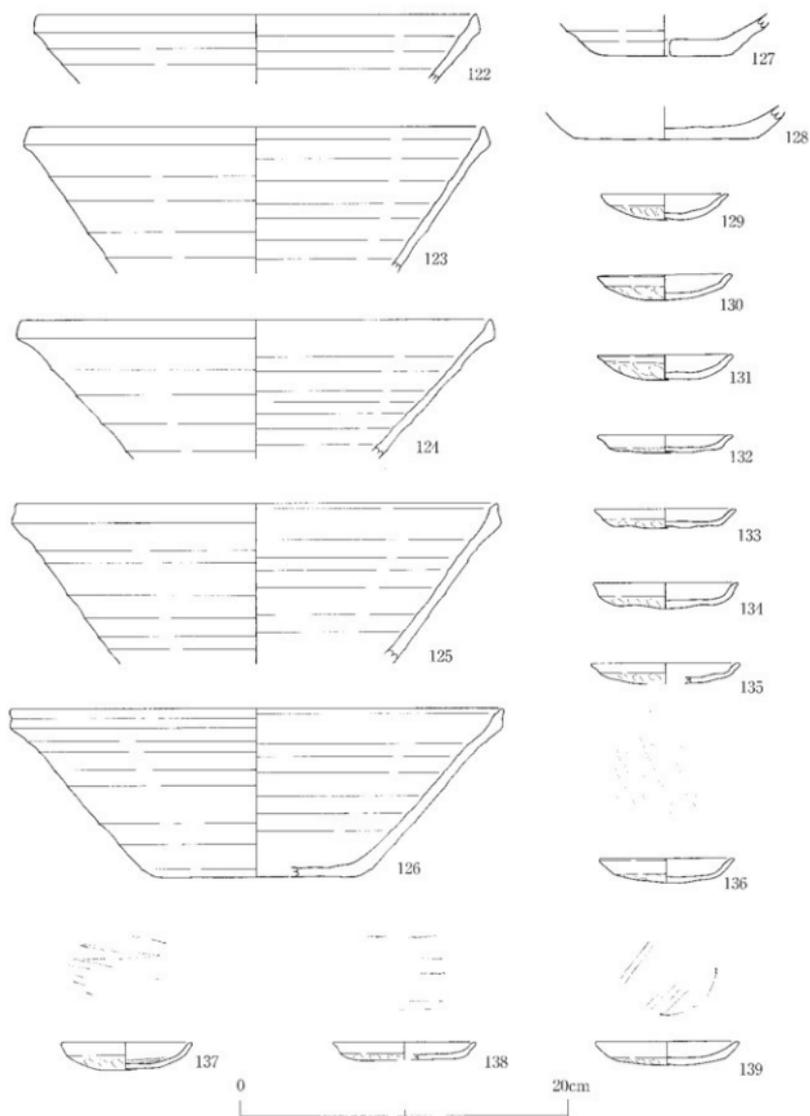
第26図 SK2出土土器実測図(2)



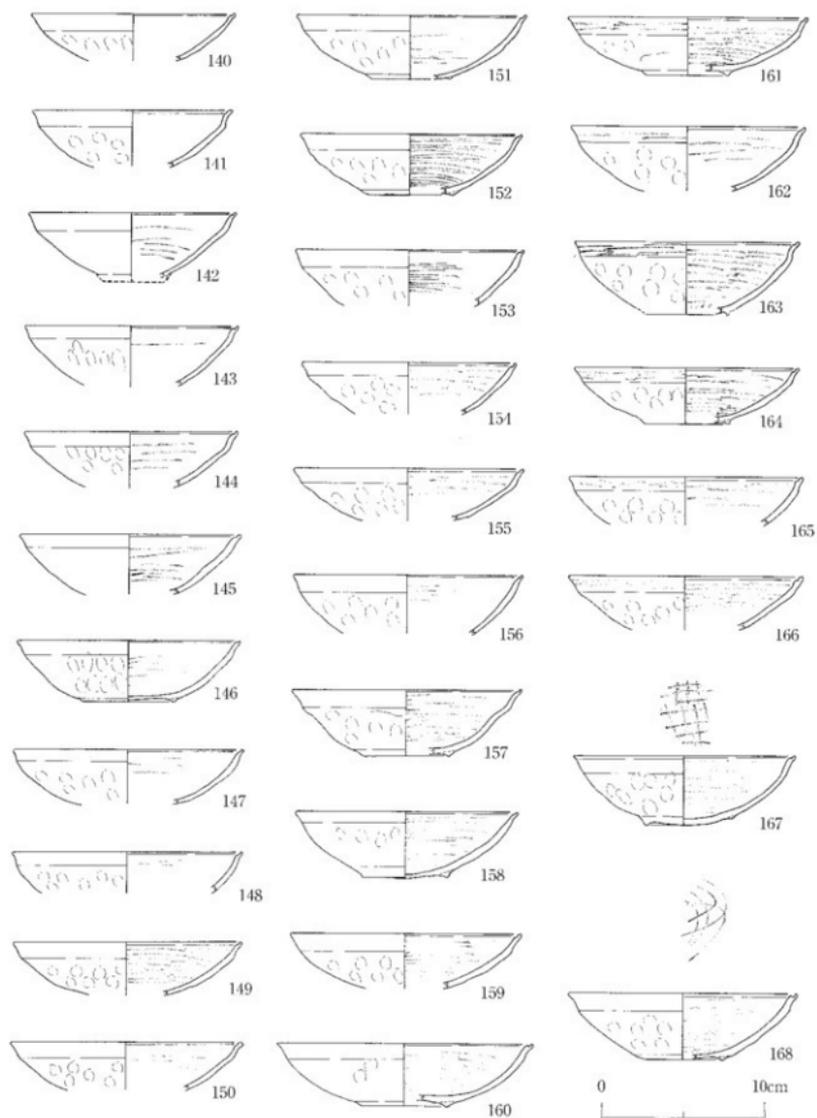
第27图 SK2出土上器实测图(3)



第28图 SK 2出土土器实测图(4)



第29图 SK2出土土器实测图(5)



第30图 SK 2出土土器实图(6)

底部には断面形が三角形や扁平な紐状態の退化した高台を貼り付ける。外面は口縁部のみ粗いヘラミガキ調整し、体部はユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。体部内面は密なヘラミガキ調整する。見込み部に167は斜格子状、168は連結輪状の暗文を施す。川越俊一氏の編年Ⅲ段階C～D型式に属する。13世紀前中頃～後半。140～160は形状や調整法が上記と同じであるが、体部外面のヘラミガキ調整と見込み部の暗文が消失する。Ⅲ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。169～182は和泉型である。178～182は体部が浅く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面には成形時の痕跡が残っているものもあり凹凸が激しく全体に凹んだ

ものが多い。底部には断面形が三角形や扁平な紐状態の退化した高台を貼り付ける。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。体部内面は風化が著しく調整法が不明なものもあるが、粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状、連結輪状、渦巻き状の暗文を施すものもある。尾上実氏の編年Ⅲ～3期に属する。13世紀初前半。169～177は形状や調整法が上記と同じであるが、見込み部の暗文が消失する。Ⅳ-1～2期に属する。13世紀中頃～後半。

183は中国製白磁碗である。高台は外面を直に、内面を斜めに削り出す。体部外面下半はヘラケズリ調整する。体部内面と高台付近まで施釉する。釉色は黄白色を呈する。釉全体に貫入がみられる。横田賢次郎・森田勉氏の型式分類白磁碗Ⅱ-1類に属する。11世紀後半～12世紀前半。

### SK3出土土器(第31・32図184～205 図版32・40・45・46)

須恵器・土師器・瓦器がある。

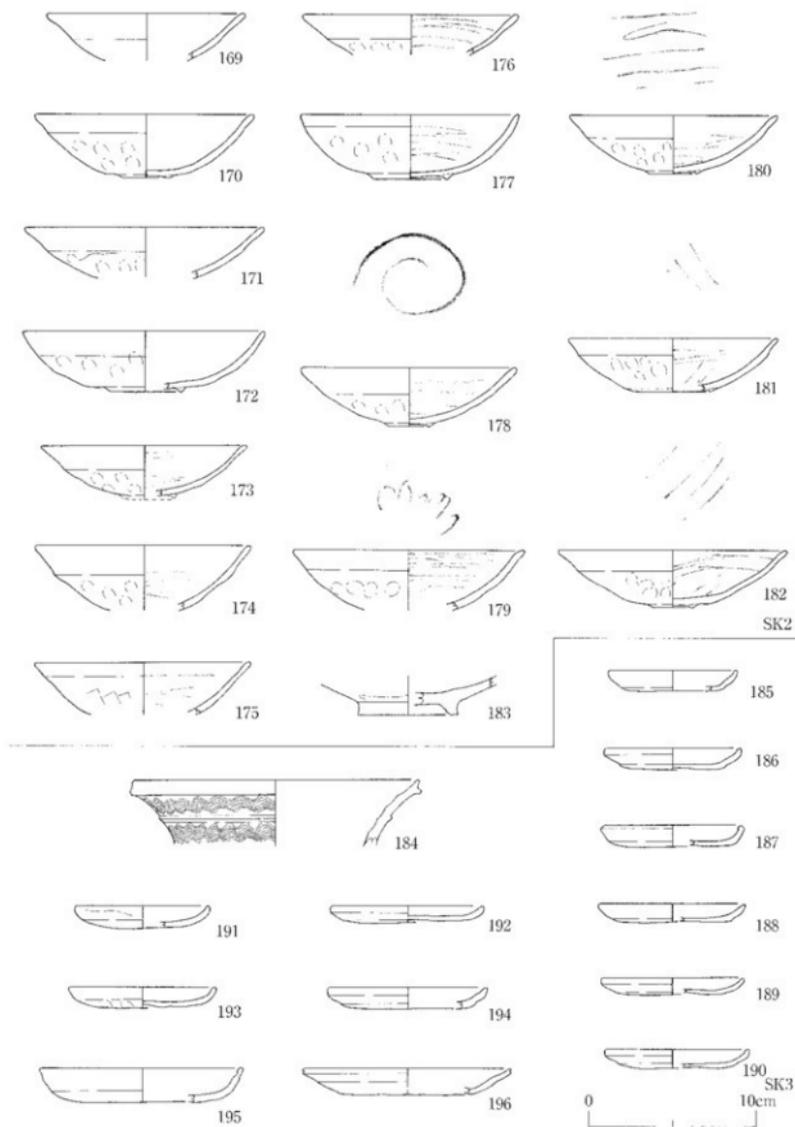
184は須恵器甕である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は上下に拡張する。外面は1帯の凸帯によって2段に区分され、それぞれの区画に1単位8条の櫛波状文を施す。内面は回転ナデ調整する。

185～196は土師皿である。口縁部を強くヨコナデして段をなすものと、内湾気味に立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わる。186・187・190・194・196は口縁端部を面取りする。体部内外面はナデ調整する。外面底部はユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

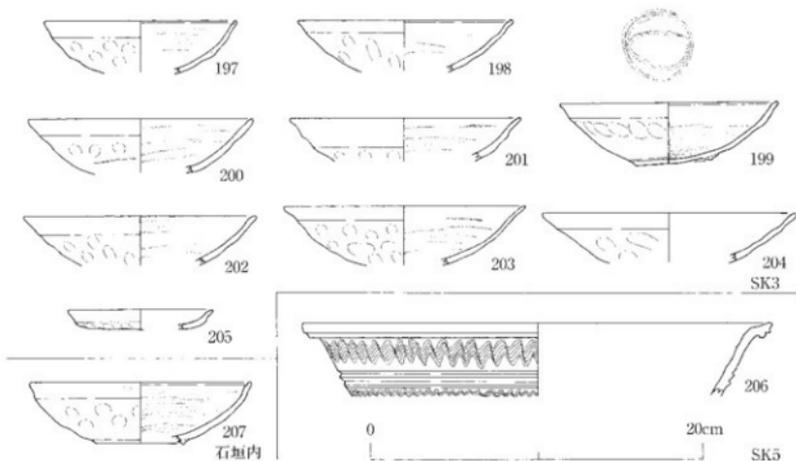
197～205は瓦器である。椀と皿の器種がある。

197～204は椀である。197～199は大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。底部には断面形が三角形の退化した高台を貼り付ける。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は粗いヘラミガキ調整する。199は見込み部に螺旋状の暗文を施す。川越俊一氏の編年Ⅲ段階C型式に属する。13世紀中頃。その他はⅢ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。200～204は和泉型である。体部が浅く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し口縁端部が丸く終わる。外面体部には成形時の痕跡が残っており凹凸が激しく全体に凹んだものが多い。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。体部内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部の暗文は消失する。尾上実氏の編年Ⅳ-1期に属する。13世紀中頃。

205は皿である。平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。内面は風化が著しく調整法が不明である。



第31图 SK2·3出土土器实测图



第32図 SK3・5、石垣2内出土土器実測図

**SK5出土土器**(第32図206 図版40)

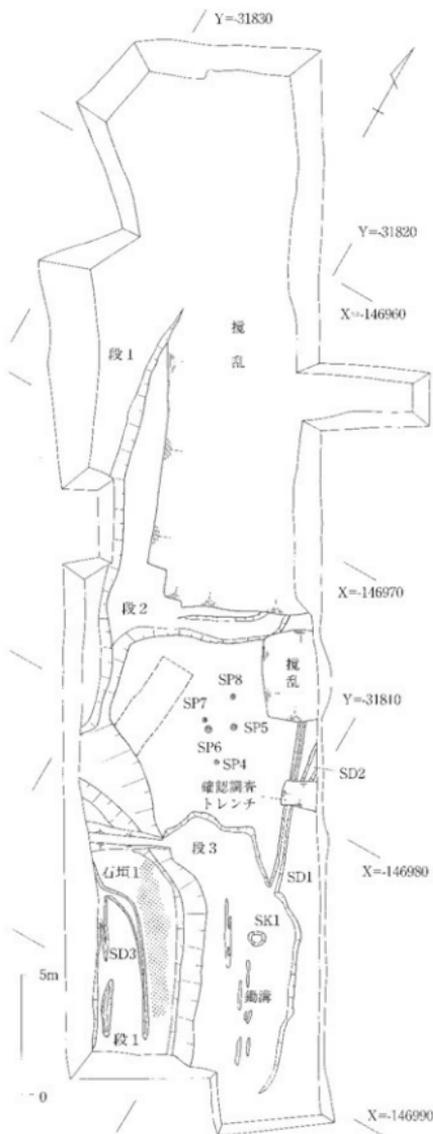
206は須恵器器台である。杯部は碗状を呈する。口縁部は外反する。外面は2帯の凸帯によって2段に区分され、それぞれの区画に御描波状文を施す。内面は回転ナデ調整する。TK43型式に該当する。6世紀末。

**石垣2内出土**(第32図207 図版46)

207は瓦器碗である。大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。底部には断面形が三角形の退化した高台を貼り付ける。口縁部外面に粗いヘラミガキを施す。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は密なヘラミガキ調整する。川越俊一氏の編年Ⅲ段階C型式に属する。13世紀中頃。

**c. 小結**

この時期、北部2地区北を中心に掘立柱建物が造られるとともに、2地区中央部は石室の欄壁石をも用いて西に石垣(石垣2)を構築し、平坦面が形成されており、すでに古墳=12号墳上部は破壊されていたものと思われる。



第33図 第2遺構平面実測図

## 第2遺構

### a. 遺構(第33図 図版20)

第8層上面で検出した。

第8層は整地土で、須恵器の杯蓋(259)、脚部(260)、捏鉢(275～277)、土師器の皿(261～273)、羽釜(274)、瓦器の椀(278～290)、皿(291・292)、中国青磁(293)、土鍾(317)、不定形刃器(318)、石匙(319)、円筒埴輪(301・304・307)、形象埴輪(313)など多くの遺物を包含してした。

1地区および2地区の北は現代の擾乱により、2地区中央で東西方向、北西方向の溝口の層のみが残存していた。8層のは2地区の中央から3地区の東部に見られ、この上面で溝2条(SD1・2)、ピット6個(SP4～9)、落ち込み状の段(断3)内に土坑1基(SK1)と鋤溝群、標田(段1南)および石垣(石垣1)、耕作溝(SD3)を検出した。

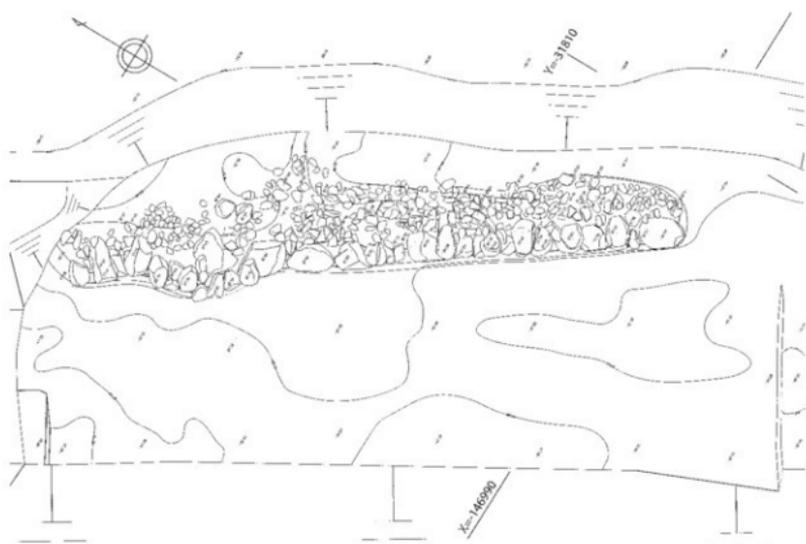
SD1は、2地区中央東端から段3につながる。検出長7.4m、幅0.25m、深さ0.08mを測り、埋土は暗灰黄色砂礫泥じり土で、須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

SD2は、SD1の東にあり、検出長1.2m、幅0.38m、深さ0.05mを測ったが、遺物は出土していない。

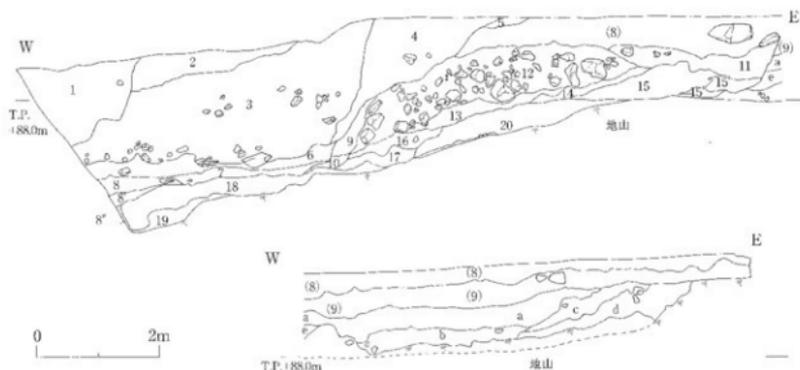
ピット群(SP4～8)は、径0.08～0.15m、深さ0.03～0.06mと小さい。埋土も異なり、SP4から土師器皿、瓦器が出土したが、各ピットの間隔は不明である。

2地区南から3地区の北で南北12m(西は調査地外)、東西3.7m(西は段1で欠損)、深さ0.12mの段3があった。6層で埋没していた。

SK1は0.6×0.65m、深さ0.12mを測るほぼ円筒形の土坑。埋土は黄褐色シルト質砂を含む緑灰色砂礫泥じりシルト質土で、須恵器、土師器、瓦器の小片が出土した。鋤溝は細くて浅く、埋土は灰黄色シルト質砂で、遺物は出土していない。



第34図 第2遺構石垣1 平面実測図 (1/50)

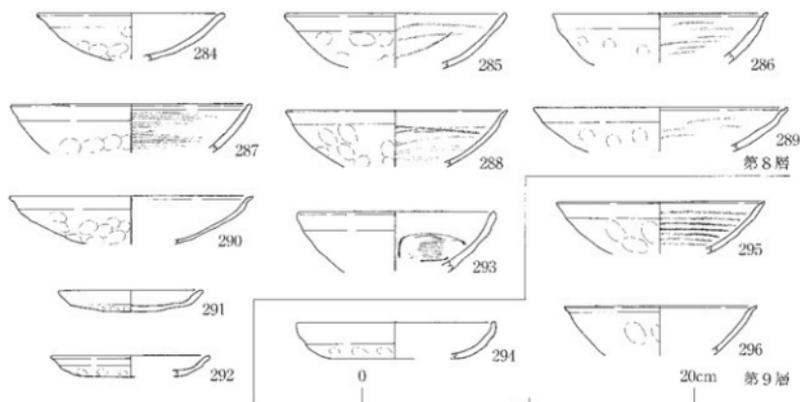


- 1 灰色 10Y6/1 砂礫混じり砂質土 砂礫少し混じる
- 2 灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂質シルト
- 3 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂混じり砂質土 礫やや多い
- 4 灰オリーブ色 5Y5/2 砂質シルト 礫少し混じる
- 5 灰灰色 2.5Y6/1 砂混じりシルト質土 やや粘土質
- 6 灰黄色 2.5Y6/2 砂・シルト
- 7 灰色 5Y3/1 砂質シルト
- 8 灰オリーブ色 5Y6/2 シルト質砂 ややシルト多い
- 8' 黄灰色 2.5Y5/1 シルト質土 やや粘土質
- 8'' 黄灰色 5Y5/1 砂混じりシルト質土 礫多い
- 9 灰色 10Y6/1 砂混じりシルト質土 ややシルト質多い
- 10 灰色 7.5Y6/1 砂混じりシルト質土

- <11~20は、SK 2>
- 11 におい・暗色 2.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土
  - 12 灰黄褐色 10YR5/2 粘質土 礫多く含む
  - 13 灰黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト やや砂多い
  - 14 におい・黄色 2.5Y6/3 砂礫混じりシルト質土 やや砂多い
  - 15 オリーブ黄色 5Y6/3 砂礫混じりシルト質土 やや礫多い
  - 15' 灰オリーブ色 5Y5/2 砂礫混じり土 礫多い
  - 15'' 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂混じりシルト質土
  - 16 におい・黄褐色 2.0YR6/3 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質
  - 17 におい・暗色 7.5YR6/4 砂礫混じり粘土質シルト
  - 18 黄灰色 2.5Y5/1 砂混じりシルト やや砂質
  - 19 におい・黄褐色 10YR5/4・灰黄褐色 10YR5/2 シルト質粘土 ややシルト質
  - 20 におい・黄褐色 10YR6/4 砂礫混じりシルト質粘土 やや礫多い

- (8) 黄灰色 2.5Y5/1・褐色 10YR4/4 砂礫混じりシルト質土
  - (9) 灰色 3Y4/1 砂礫混じりシルト質土 やや粘土質 におい・赤褐色 5YR4/1 シルト粒を含む
- S D 8
- a 黄灰色 2.5Y5/1 シルト質土
  - b 灰色 5Y5/1 砂礫混じりシルト質粘土
  - c 灰色 10Y5/1 砂質 シルト質土混じる
  - d 灰オリーブ色 5Y5/3 砂礫 シルト質粘土混じる
  - e 灰オリーブ色 7.5Y4/2 砂礫混じりシルト質粘土
- 地山 明黄褐色 10YR6/6 砂礫混じりシルト質粘土 におい・黄褐色 10YR4/3 シルト質粘土・ブロック含む

第35図 2地区東西アゼ断面実測図



第36図 第8・9層出土土器実測図

2地区中央から3地区の西側は、東に掘り込んで、大きく弓なり状に深い段をなしていた(段1の南)。下面の東部には、東壁面にはほぼ平行するように西面を揃えた、長さ7mにわたる1～2段の石垣が構築されてあった=石垣1(第34図)。15～50cm大の石が使用されており、東側は頭大からこぶし大の石を用いて丁寧に裏詰めがなされていた。石垣の西は灰色砂質シルトであったが、この層の下、黄灰色砂泥じりシルト面で耕作時の溝=SD3を検出した。

SD3は、幅0.15～0.5m、深さ3～7cmを測る溝群である。埋上は灰色砂泥じりシルト質土で、須恵器の壺・杯・土師器皿、瓦器などが出土した。

8層上面遺構の埋没時、2地区北～西北部にかけては砂の堆積があった=7層。7層からは、土師器の羽釜(251)、皿(252・253)、瓦器碗(254～257)、中国製青磁碗(258)などが出土した。

## b. 出土遺物

### 第8・9層出土遺物

第8層(第36・37図259～293 図版33・50・51)

須恵器、土師器、瓦器、輸入磁器がある。

259・260・275～277は須恵器である。杯・脚・捩鉢の器種がある。

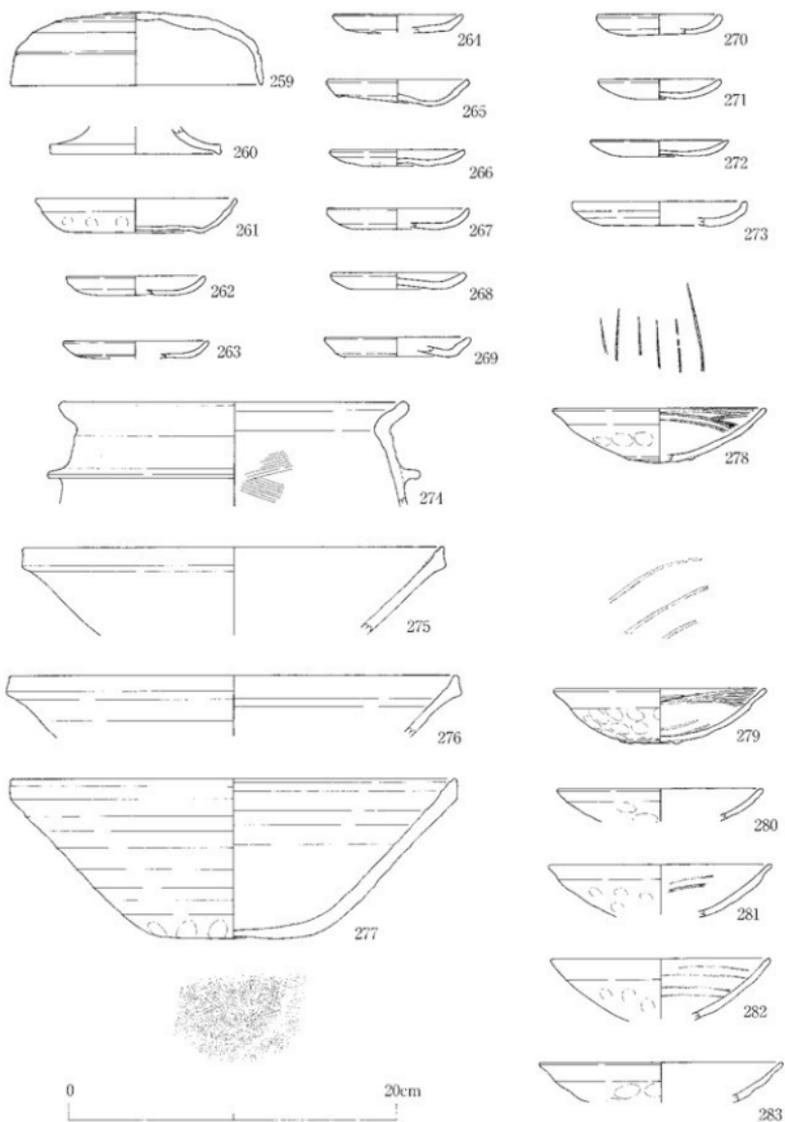
259は蓋杯である。天井部から口縁部にかけて丸みを持つ。口縁端部は丸く終わる。天井頂部より約1/3の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。TK10型式。6世紀中頃。

260は脚である。裾部が緩く立ち上がり裾端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

275～277は捩鉢である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部内外面は回転ナデ調整する。277は体部外面にユビオサエによる指頭圧痕が残る。底部は未調整で、回転糸切り痕が残る。12世紀末～13世紀初頭。

261～274は土師器である。皿と羽釜の器種がある。

261～273は皿である。体部が開いて立ち上がり、底部と体部の屈曲が明瞭で体部上半が強いヨコナデにより屈曲するものと、口縁端部をつまみ上げ気味に直立させるものがある。口縁端部は丸く終



第37图 第8层出土土器实图

わる。265・273は口縁端部を面取りする。体部下半はユビオサエによる指頭圧痕が顕著で、凹んでいるものが多い。体部内外面はナデ調整する。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

274は羽釜である。口縁部が深く内傾して立ち上がり「く」の字状に外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。体部外面は煤が付着する。12世紀後半～13世紀前半。

278～292は瓦器である。椀と皿の器種がある。

278～290は椀である。278～285は和泉型である。体部が浅く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し口縁端部が丸く終わる。体部外面には成形時の痕跡が残っており凹凸が激しく全体に凹んだものが多い。底部には断面形が三角形や扁平な紐状態の退化した高台を貼り付ける。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指圧痕が残る。体部内面はヘラミガキ調整する。278・279は見込み部に平行線の暗文を施す。その他は形状や調整法が上記と同じであるが、見込み部の暗文が消失する。278・279は尾上実氏の編年Ⅲ-2期に属する。12世紀末～13世紀初頭。その他はⅣ-2期に属する。13世紀中頃～後半。286～290は大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化により調整法が不明なものもあるが、ヘラミガキ調整する。川越俊一氏の編年Ⅲ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。

291・292は皿である。平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。291は口縁部が外上方へ伸びる。292は口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法が不明である。

293は中国製青磁碗である。体部は内傾して外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。口縁端部はやや鋭い。体部内面上位は沈線を入れる。体部内面は櫛状およびへら状の工具により文様を施す。釉色は緑灰色を呈する。横田賢次郎・森田勉氏の型式分類同安系青磁碗Ⅰ類に属する。12世紀中頃～13世紀初頭。

#### 第9層(第36図294～296 図版50・51)

土師器、瓦器がある。

294は土師皿である。体部が開いて立ち上がり、底部と体部の屈曲が明瞭で体部上半が強いヨコナデにより屈曲する。口縁端部は丸く終わる。体部下半はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内外面はナデ調整する。褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

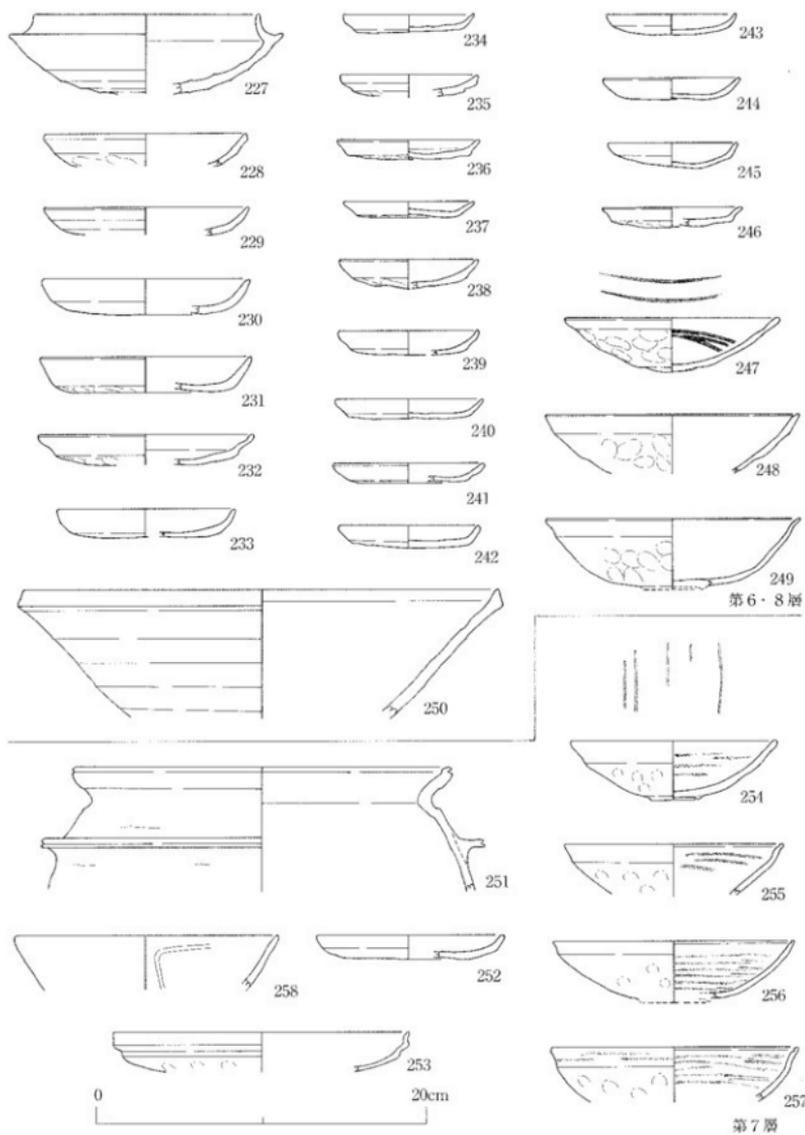
295・296は瓦器椀である。大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は粗いヘラミガキ調整する。川越俊一氏の編年Ⅲ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。

#### 第7層(第38図251～258 図版33・49)

土師器、瓦器、輸入磁器がある。

251～253は土師器である。羽釜と皿の器種がある。

251は羽釜である。口縁部が深く内傾して立ち上がり「く」の字状に外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部と鋳部端部に凹みを施す。外面はナデ調整、内面は風化が著しく調整法は不明である。内外面ともにユビオサエによる指頭圧痕が残る。12世紀後半～13世紀前半。



第38图 第6・8、7層出土上器実測图

252・253は土師皿である。252は体部が開いて立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面は1回ヨコナデ調整する。253は体部の屈曲が明瞭で2段に屈曲し、1段目の屈曲がほぼ直立する。口縁端部は尖り気味である。体部外面は2回ヨコナデ調整する。体部下半はユビオサエによる指頭圧痕が残る。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

254～257は瓦器碗である。254は和泉型である。体部が浅く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し口縁端部が丸く終わる。底部には断面形が三角形の退化した高台を貼り付ける。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法は不明であるが、見込み部に平行線状の暗文を施す。尾上実氏の編年Ⅲ-3期に属する。13世紀前半。255～257は大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面は257が口縁部に粗いヘラミガキを施すが、その他はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面はヘラミガキ調整する。257は川越俊一氏の編年Ⅲ段階C型式に属する。13世紀中頃。その他はⅢ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。

258は中国製青磁碗である。体部は開いて立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部内面は2つの沈線で区画を施す。釉の色調はオリブ黄色を呈する。横田賢次郎・森田勉氏の型式分類龍泉窯系青磁碗I類に属する。12世紀中頃～13世紀初頭。

#### 第6・8層(第38図227～250 図版32・33・48・49)

須恵器、土師器、瓦器がある。

須恵器は杯と捏鉢の器種がある。

227は杯身である。立ち上がり部は内傾して伸びた後外湾し、受部は外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。底部は丸みを帯びる。体部外面は全体の約1/2の範囲を回転ヘラケズリ調整する。その他内外面は回転ナデ調整する。

250は捏鉢である。東播系である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部内外面は回転ナデ調整する。12世紀末～13世紀初頭。

228～245は土師皿である。口縁部を強くヨコナデして段をなすものと内湾気味に立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わる。228・235は口縁端部を面取りする。体部内外面はナデ調整する。外面底部はユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

瓦器は碗と皿の器種がある。

246は瓦器皿である。平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は風化が著しく調整法が不明である。

247～249は瓦器碗である。247は和泉型である。体部が浅い皿状を呈し、口縁部は外反し口縁端部が丸く終わる。高台がほぼ消失する。体部内外面は粘上耕巻上げ痕が残る。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。尾上実氏の編年Ⅳ-1期に属する。13世紀中頃。248・249は大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。249は欠損しているが高台がつく。川越俊一氏の編年Ⅲ段階E型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。

第6層(第40図213～226 図版32・48)

土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器がある。

土師器は羽釜と皿の器種がある。

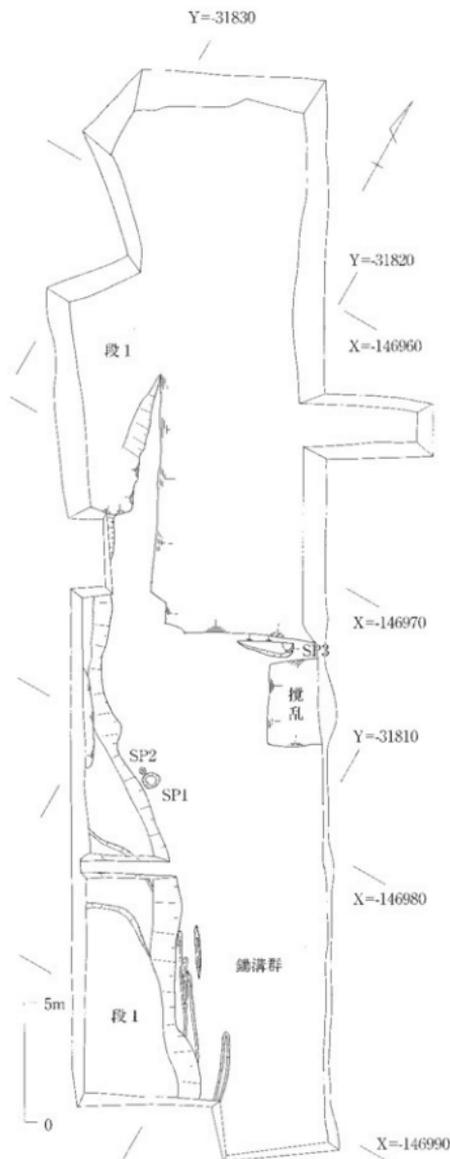
218・219は土師器羽釜である。口縁部が深く内傾して立ち上がり「く」の字状に外反する。口縁端部は丸くおさめるものと面を持つものがある。体部外面は風化が著しく調整法は不明である。体部内面はハケメ調整する。体部内外面ともにユビオサエによる指頭圧痕が残る。

213～217は土師皿である。口縁部を強くヨコナデして段をなすものと、内湾気味に立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わる。215・216は口縁端部を面取りする。体部内外面はナデ調整する。外面底部はユビオサエによる指頭圧痕が残るものが多い。全て褐色系である。12世紀末～13世紀初頭。

220・221は東播系須恵器捏鉢である。220は体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部内外面は回転ナデ調整する。221は底部である。内外面は回転ナデ調整する。12世紀末～13世紀初頭。

222～225は瓦器碗である。222～224は和泉型である223～224は体部が浅く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕が残る。体部内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部の暗文が消失する。223は体部外面に粘土紐巻上げ痕が残る。13世紀中頃～後半。222は体部が浅い皿状を呈し、高台が消失する。内面のヘラミガキ調整は粗である。尾上実氏の編年Ⅳ～Ⅲ期に属する13世紀末～14世紀初頭。225は大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデが顕著で、そのために口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面はヘラミガキが完全に消失し、ユビオサエによる指頭圧痕と粘土紐巻上げ痕が残る。体部内面はヘラミガキ調整する。底部には断面形が三角形の退化した高台を貼り付ける。川越俊一氏の編年Ⅲ段階Ⅱ型式に属する。13世紀末～14世紀初頭。

226は中国製青磁碗である。高台は削り出しが深く、逆台形を呈する。内面見込みと体部との境に段を有する。体部内面と外面体部下半まで施釉する。釉色は緑灰色を呈する。横田賢次郎・森山勉氏の型式分類同安窯系青磁碗Ⅰ類に属する。12世紀中頃～13世紀初頭。



第39図 第1遺構面平面実測図

## 第1遺構

### a. 遺構(第39図 図版21)

第6・8層上面で検出した。

上述したように1地区および2地区北東部は現代の建物跡および上右流であった。2地区北西部および2地区南東部では第8層が残存していたが、2地区中央から3地区東部には12号墳横穴式石室2段目の一部と第8層、SK2上部の礫上面、3地区中央で落ち=段3上部の第6層が見られた。

第6層は整地土で土師器の羽釜(218・219)、皿(213～217)、東播系須恵器捏鉢(220・221)、瓦器椀(222～225)、青磁碗(226)とともに陶磁器片が出土した。

また、遺構検出作業時における第6・8層の精査時には、須恵器の杯身(227)、東播系捏鉢(250)、土師器皿(228～245)、瓦器の皿(246)、椀(247～249)などが出土した。

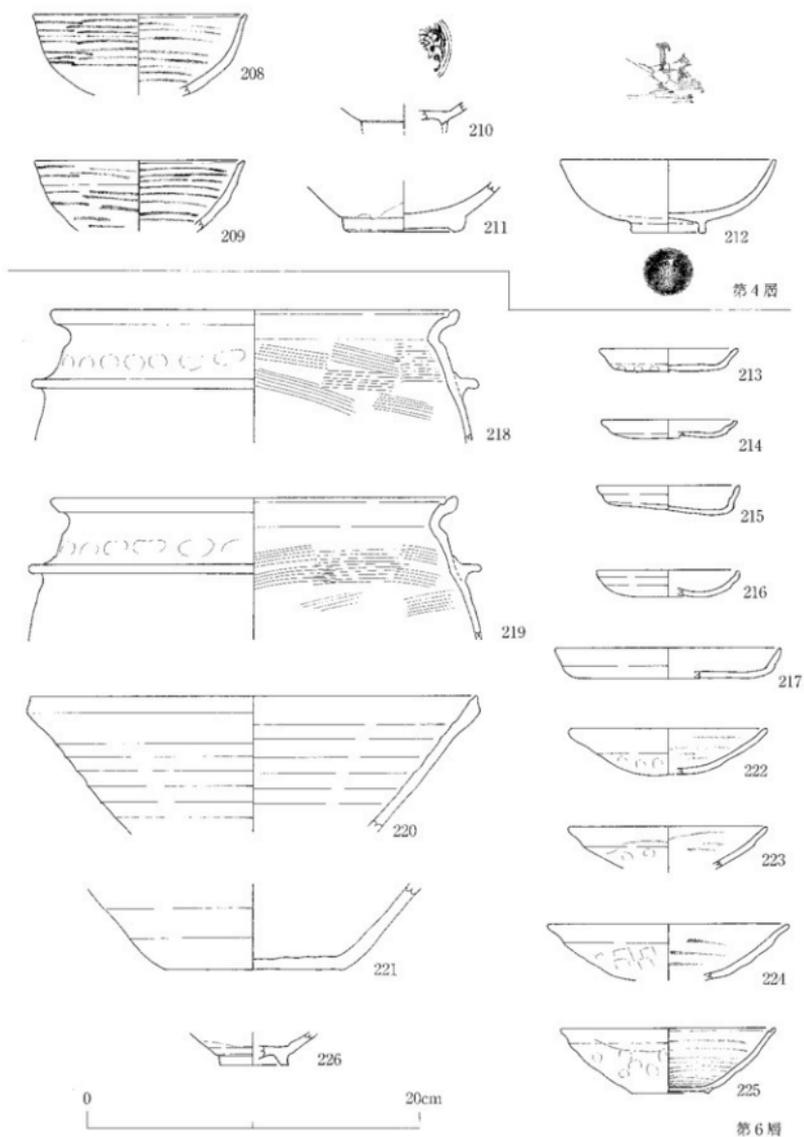
これらの上面で、北西部は土石流など、西は標田の段(段1)があって、3地区6層上面で南東-北西方向の耕作に伴う掘溝群(埋土は灰黄褐色砂泥じりシルト質土)、2地区南でピット3個(SP1～3)、を検出した。

調査地の西に、ほぼ南北に延びる段1の肩があった。検出長30mを測り、2地区中央(12号墳石室右側壁端付近)を境に南北に分かれる。南側はSK2最上部の礫土と6層を掘り込んで南と西に落ち込み、埋土と自然堆積層(3～5層)で埋没していた。北側は8層を肩に西へ落ち、1～7層の上ないし相当層で埋もれていた。

SP1は、下部で検出した12号墳左側壁3段目の石の抜け跡。

SP3は大半が欠損し、東部のみ残存し、SP2とも用途は不明。

江戸時代以降の遺構などである。



第40图 第4·6层出土土器实测图

#### b. 出土遺物 第4層(第40図208～212 図版47)

瓦器碗・輸入磁器・国産陶器がある。

208・209は瓦器碗である。大和型である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し口縁端部が丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部内外面はヘラミガキ調整する。川越俊一氏の編年Ⅲ段階A型式に属する。12世紀前半。

210・211は輸入磁器碗である。

210は中国製青花碗である。見込み部分が緩やかに盛り上がる椀頭心タイプである。見込み部は二重圓線内に団花状の唐草文を描く。また、欠損してわからないが高台内に若干の呉須がみられることから、吉祥句が描かれていたと思われる。小野正敏氏の型式分類乗付碗E群に属する。16世紀後半。211は中国製白磁碗である。高台は幅広で、削出しが浅いため底部の器壁は厚い。体部内面と高台付近まで施釉する。釉色は灰白色を呈する。横田賢次郎・森田勉氏の型式分類白磁碗Ⅳ-1類に属する。11世紀後半～12世紀前半。

212は京焼風陶器碗である。高台部は断面形が角型である。高台内を平滑に仕上げ、その中央部に浅い円刻を施し、さらに円刻の下部に印銘を施す。精製された緻密な胎土で、見込み部には錆絵で樓閣山水文を描く。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。17世紀後半。

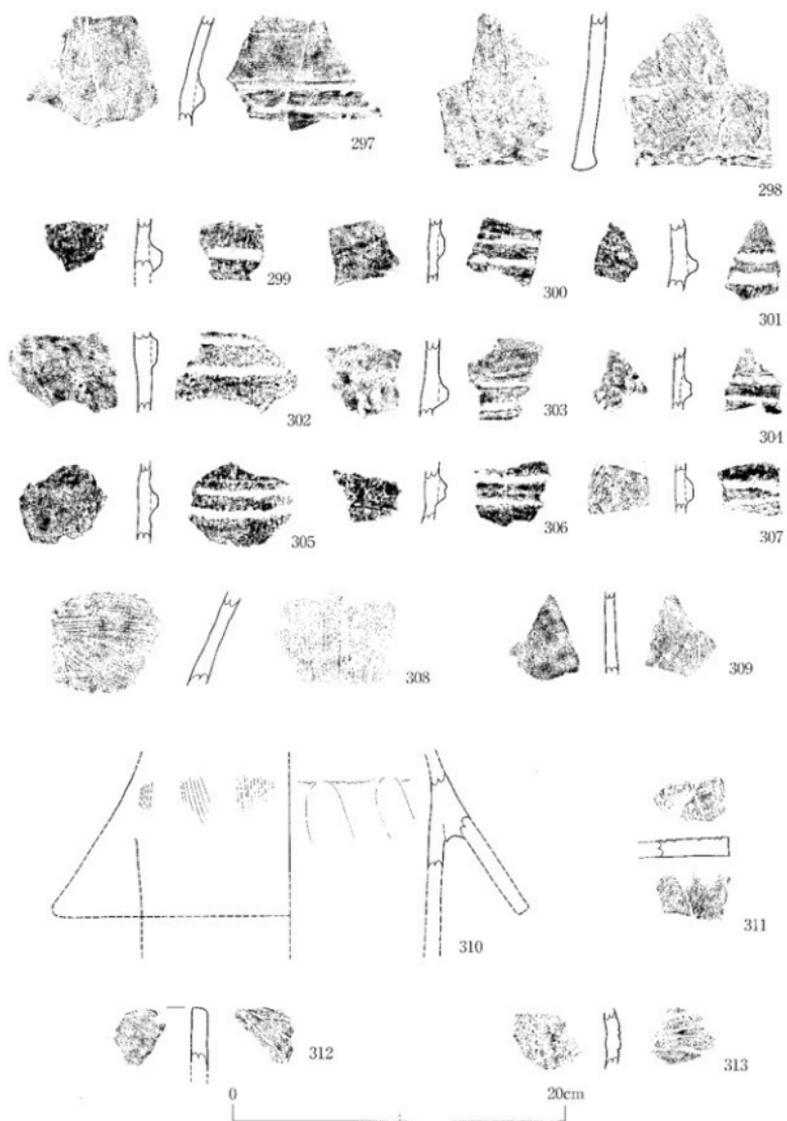
#### その他の遺物

##### 埴輪(第41図297～313 図版52)

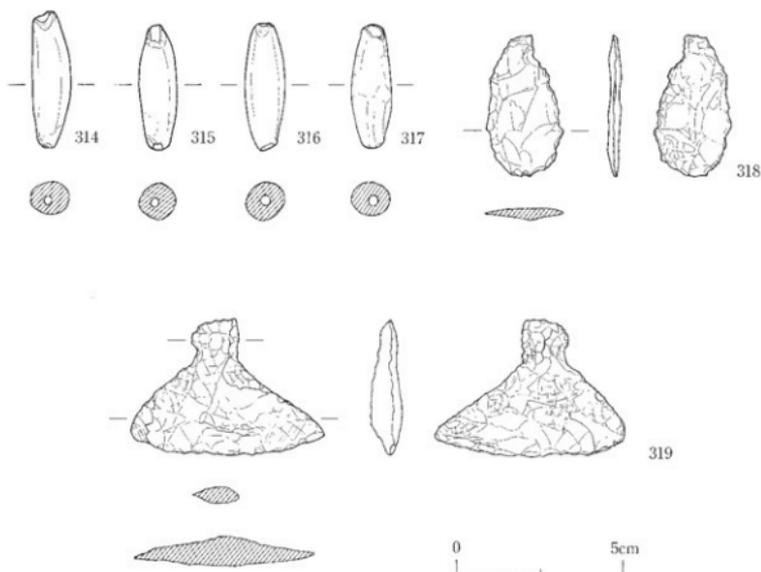
円筒埴輪と形象埴輪がある。全て焼成は土師質で無黒斑である。

297～307は円筒埴輪である。297・299～307は体部である。297・299・301・303～305・307の突帯は高く突出し、断面形は台形である。体部外面は297・303はタテハケ調整した後、B種コホケ調整する。304はナナメハケ調整する。その他は風化が著しく調整法は不明である。体部内面は風化が著しく調整法は不明なものが多いが、粗いナデ調整するものもある。色調は橙色を呈する。306の突帯は比較的高く突出し、断面形はM字状である。体部外面は風化が著しく調整法は不明であるが、体部内面はユビオサエによる指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。300・302の突帯は低く突出し、断面形は台形である。298は基底部である。底部は丸味のある面を持ち、外反気味に立ち上がる。体部外面はナナメハケ調整する。体部内面は粗いナデ調整する。色調は橙色を呈する。297・303は川西宏幸氏の編年Ⅳ期に該当する。5世紀後半。その他も古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。297・298・300・302・303はSK2、299は落ち込み、301・304・307は第8層、305は第5層、306は第9層から出土した。

308～313は形象埴輪である。308・309・311～313は板状を呈する破片である。器形・部位の特定はできない。308は内外面ともに粗いハケメ調整する。厚さは0.9cmを測る。胎土はやや粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。色調はぶい橙色を呈する。309・311～313は片面にヘラ描き文様を施す。直線文、梯子状、鏡杉文状の線刻が残る。盾形埴輪の可能性もある。内面はハケメ調整する。312のみ風化が著しく調整法は不明であるが、ユビオサエによる指頭圧痕が若干残る。厚さは0.7～1cmを測る。胎土はやや粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。色調は橙色を呈する。調整・色調・胎土が共通していることから、同一個体の可能性もある。310は家形埴輪である。屋根と壁が接する部分である。外面はハケメ調整する。内面は強いナデ調整し、粘土紐接合痕が残る。胎土は粗く、0.1～0.3cmの長石を多く含む。色調は浅黄橙色を呈する。古墳時代のものであるが詳細な時期は不明である。308・310・311はSK2、309はSD8、312は第9層、313は第8層から出土した。



第41图 植物实测图



第42図 土製品・石器実測図

**土製品**(第42図314～317 図版53)

314～317は土錘である。全て管状である。一端を欠損しているものもあるが、ほぼ完形である。残存長3.8～4.2cm、幅1.1～1.2cmを測る。色調は明赤褐色を呈し、胎土に長石・クサリ礫を多く含む。314・315はSK 2、316はSK 3、317は第8層から出土した。

**石器**(第42図318・319 図版53)

不定形刃器と石匙がある。

318は不定形刃器である。縁辺を押圧剥離で仕上げる。調整加工が粗く、明確な先端部の作り出し等も認められないことから、石礫未製品の可能性もある。残存長4.3cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmを測る。第8層から出土した。

319は石匙である。頂部に両側辺を抉るように打ち欠いたつまみ状の突起を持つ。底辺には凸状の刃部を持つ。横に広がる横形である。縁辺を両面押圧剥離で仕上げる。長さ5.8cm、幅4.2cm、厚さ0.9cmを測る。このタイプは縄文時代前期に多くみられる。第8層から出土した。

**【遺物参考文献】**

岡安光彦1984「いわゆる素環の髹について－環状鏡板付髹の型式学的分析と編年－」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX－古墳文化研究会－

岡安光彦1985「環状鏡板付髹の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX－古墳文化研究会－

- 大橋康二1989『肥前磁器』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏1982「15～16世紀の柴付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』
- 川西宏幸1978「岡崎埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 小林俊寛1992『概説』『古代の土器1 都域の土器集成』古代の土器研究会
- 田辺昭三1981『須志器大成』
- 奈良国立文化財研究所1982『平城宮発掘調査報告XⅠ 本文』
- 花谷浩1989「素環鏡板付帯の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 中世土器研究会2004『概説 中世の土器・陶磁器』
- 横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

## IV. 自然科学

### 1. みかん山12号墳から出土した人骨

大阪府立大学大学院医学研究科  
安部 みき子 山本 与敬

東大阪府東豊浦町から手手町に位置するみかん山古墳群のうち、6世紀後半のものである12号墳の石室内から多数の人骨が出土した。これらの人骨は埋葬時期が異なる上層と下層の2層から、いずれも複数個体出土している。出土骨の保存状態は非常に悪く、頭骨は脳頭蓋のみ判別でき、長骨では骨端が残存しているものは見られなかった。

上層は石室内上層の第5層、下層は敷石上面にあたる。

#### [出土状況]

上層の人骨は石室の中央部と奥壁の2か所から出土しており、奥壁のものをA群、中央部のものをB群とした。A群は、複数個体の頭骨や長骨が重積し肋骨や椎骨がほとんど遺存していないことにより、追葬に際し古い遺体を玄室の奥に集めたと考えられる。一方、B群は右の大腿骨と脛骨、左寛骨と大腿骨の一部がほぼ原位置をとどめた状態で出土している。他の部位は遺存していなかったが出土状況から、B群は同一個体と推測され、頭位は南と思われる。

下層の人骨の出土地点も石室の奥壁部と中央部の2か所で、特に中央部には多数の焼骨がみられたため、上層と同様、追葬時に集骨したと考えられる。一方、奥壁部は焼骨の細片のみが遺存しており、これらの骨がどこに属するかは不明である。焼骨には、高温で焼かれたことによる著しい変形や収縮がみられるものもあり、さらに、変形が大きいものなかには複数回火を受けた可能性のあるものもみられた。部位の同定ができた骨の大半は長骨であったが、頭骨片も少数みられた。焼骨は著しい変形のため性の判定や骨計測は出来なかった。

#### [各層の特徴]

各層における人骨の出土状況を第43・44図に示した。

##### 1 上層出土の人骨

同定できた部位は頭骨、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨である。脛骨に関しては左右、部位の特定ができなかったものが多かった。したがって、上層の最小個体数は、A群の最小個体数は左右ともに大腿骨の5であり、B群の1と合わせて6となる(第2表)。

今回計測のできた骨は脛骨の4点のみで、計測部位は骨幹の栄養孔位での前後径と横径のみであった。しかし、この部位は脛骨の扁平度を示す脛示数の算出点であり、他の時代との比較を行った。本遺跡の脛示数は資23と資26が扁平度の強い平脛であり、資24と資25が中脛であり、扁平度が見られない正脛はなかった(第3表)。各時代の平脛の出現率は縄文時代人45~50%、古墳時代人15~20%、中近世人20~25%、現代日本人5~10%であり(馬場 1998)、本遺跡は平脛が50%となるため、出現率は縄文時代に近い。しかし、本位制の計測個体数が少ないため、資料数を増加したうえで検討したい。

##### 2 下層出土の人骨

下層から出土した人骨は火葬時の収縮を考慮に入れたうえでも、大きさが明確に異なる骨が混在し

ており、この差異は成人と幼児と考えられる。部位の同定ができた成人骨は右側頭骨、下顎骨、環椎、頸椎(椎体)、胸椎、腰椎、左上腕骨、右尺骨、右桡骨、左桡骨、中手骨、左右大腿骨、右脛骨であった。このうち右側頭骨は外耳孔から乳様突起周辺にかけての部位が重複して出土していることから個体数は2である。一方、幼児は上顎骨、下顎骨、左大腿骨が同定でき、重複する部位がみられなかったため個体数は1である。したがって、下層の人骨の最小個体数は3であった。

また、幼児骨の上顎骨と下顎骨には乳切歯が萌出しており、その歯槽内には永久歯の歯冠が見られたことより、6～7歳と推定された。

#### [まとめ]

今回調査した古墳は、火葬されていない人骨を含む上層と火葬された人骨を含む下層の時期に分けられる。上層の人骨の最小個体数が6であることは追葬が盛んに行われたことを示している。追葬の風習は同じ東大阪市に位置する大藪古墳(小林他 1953)にもみられ、この地域の葬制がわかかわせる。一方、下層は、石室内の2箇所に焼けた跡があることより、火葬は玄室内で行われたと考えられている。被葬者は成人だけではなく6～7歳の幼児も含まれており、年齢に対する制約はなかったと思われる。東大阪周辺の古墳では石室内での火葬の例はみられないが、堺市の陶器千塚古墳群には古墳内で火葬し追葬も行われている例を森(1956)が報告している。また、この風習は須恵器の生産にかかわりのある渡来系の人々との関係が指摘されている。この特異な埋葬様式は、当時の社会構造や生活風習を知る貴重な資料である。

#### [参考文献]

1. 東大阪市教育委員会(1996) 『わが街再発見 東大阪市の古墳』
2. Gustav Fischer(1998) Anthropologie:Handbuch der vergleichenden Biologie des Menschen: 422-423, New York
3. 馬場悠男編(1998) 考古学と人類学, 同成社
4. 人類学講座編集委員会編(1981) 人類学講座, 第5巻 日本人I 雄山閣出版
5. 小林行雄 植崎彰・(1953) 金山古墳および大藪古墳の調査
6. 森浩一(1956) 大阪府泉北郡陶器千塚『日本考古学年報9』

第2表 上層A群の出現頻度表

部位	上腕骨		尺骨		桡骨		大腿骨		脛骨	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
同定数	4	3	1	1	1	5	5	2	2	2

第3表 脛骨の計測値ならびに標示数

遺物番号	左右	前後径	横径	標示数	区分
資 23	左	38.67	23.72	61.34	平脛
資 24	右	33.37	22.41	67.16	中脛
資 25	右	33.72	22.45	66.58	中脛
資 26	不明	31.70	19.91	62.81	平脛

計測単位: mm

第4表 資料番号の対比表

上層

遺物番号	標本番号	左右	部位	写真面
資 82		不明	頭骨片	
資 83		不明	頭骨片	
資 84		不明	頭骨片	
資 85		不明	頭骨片	
資 1		右	側頭骨	外面
資 2		右	側頭骨	上面
資 86		左	上顎骨	
資 87		左	下顎骨	
資 3	A2-2	右	上腕骨	
資 4	A2-9	右	上腕骨	
資 5	A2-11	左	上腕骨	
資 6	A2-12	左	上腕骨	
資 7	C-20	右	上腕骨	
資 8	C-21	左	上腕骨	
資 9	C-34	右	上腕骨	
資 10	A1-31	右	橈骨	
資 11	A1-32	右	尺骨	
資 12	A1-33	左	尺骨	
資 13	A1-19	左	大腿骨	
資 14	A2-3	左	大腿骨	
資 15	A2-4	左	大腿骨	
資 16	A2-5	右	大腿骨	
資 17	A2-6	右	大腿骨	
資 18	A2-14	左	大腿骨	
資 19	A1-15	右	大腿骨	
資 20	A1-16	右	大腿骨	
資 21	A1-17	左?	大腿骨	
資 22	A1-18	右	大腿骨	
資 23	A2-7	左	脛骨	
資 24	A2-5	右	脛骨	
資 25	A2-10	右	脛骨	
資 26	A1-22	不明	脛骨	
資 75	A2-1	不明	大腿骨	
資 76	A1-35	不明	腓骨	
資 77	A1-36	不明	腓骨	

下層

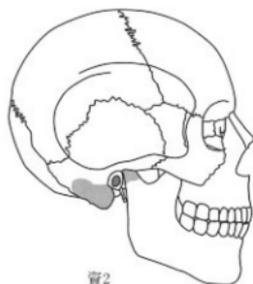
遺物番号	標本	左右	部位
資 27	燒骨	不明	上顎骨
資 78	燒骨	不明	頭骨片
資 79	燒骨	不明	頭骨片
資 80	燒骨	不明	頭骨片
資 81	燒骨	不明	頭骨片
資 28	燒骨		下顎骨
資 29	燒骨		下顎骨
資 30-a	燒骨	左	上顎骨(幼児)
資 30-b	燒骨	左	下顎骨(幼児)
資 31	燒骨		環椎
資 32	燒骨	右	肩甲骨(鳥口突起基 部)
資 33	燒骨	左	肩甲骨(鳥口突起)
資 34	燒骨	左	肩甲骨(外側縁)
資 35	燒骨		坐骨(結節)
資 36	燒骨	右	上腕骨(骨頭)
資 37	燒骨	右	上腕骨(骨幹)
資 38	燒骨	右	上腕骨(遠位端)
資 39	燒骨	右	尺骨(近位端)
資 40	燒骨	右	尺骨(遠位部)
資 41	燒骨	右	橈骨(近位端)
資 42	燒骨	右	第4中手骨
資 43	燒骨	左	上腕骨(骨頭)
資 44	燒骨	左	上腕骨(骨幹近位端)
資 45	燒骨	左	橈骨(遠位端)
資 46	燒骨	左	第2中手骨
資 47	燒骨	左	第3中手骨
資 48	燒骨	右	大腿骨(骨頭)
資 49	燒骨	右	大腿骨(骨幹遠位端)
資 50	燒骨	右	脛骨(骨幹)
資 51	燒骨	左	大腿骨(骨頭)
資 52	燒骨	左	大腿骨(骨幹)
資 53	燒骨	左	距骨
資 54	燒骨	右	尺骨(骨幹)
資 55	燒骨	左	橈骨(骨幹)
資 56a・b	燒骨	左	大腿骨(骨幹、幼児)
資 57	燒骨	不明	齒
資 58	燒骨	不明	齒
資 59	燒骨	不明	齒
資 60	燒骨	不明	齒
資 61	燒骨	不明	齒
資 62	燒骨	不明	齒
資 63	燒骨	不明	齒
資 64	燒骨	不明	齒
資 65	燒骨	不明	齒
資 66	燒骨	不明	齒
資 67	燒骨	不明	齒
資 68	燒骨	不明	齒
資 69	燒骨	不明	齒
資 70	燒骨	不明	齒
資 71	燒骨	不明	齒
資 72	燒骨	不明	齒
資 73	燒骨		腰椎(椎体)
資 74	燒骨	不明	上腕骨(骨頭、幼児)

(資27、57～73、75～84は、第43・44図に記載なし)

頭骨



資1



資2

上腕骨



資3



資4



資5



資6



資7



資8



資9

橈骨



資10

尺骨



資11



資12

大腿骨



資13



資14



資15



資16



資17



資18



資19



資20



資21



資22

脛骨



資23



資24

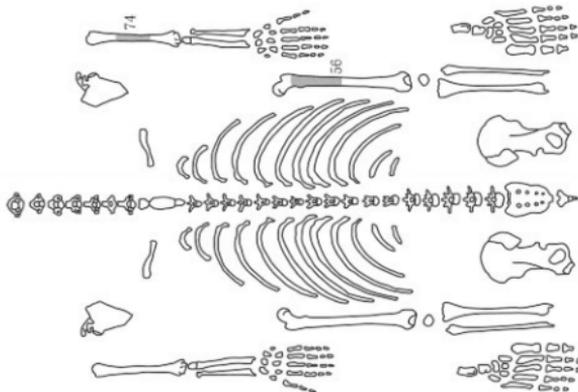
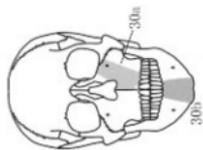


資25

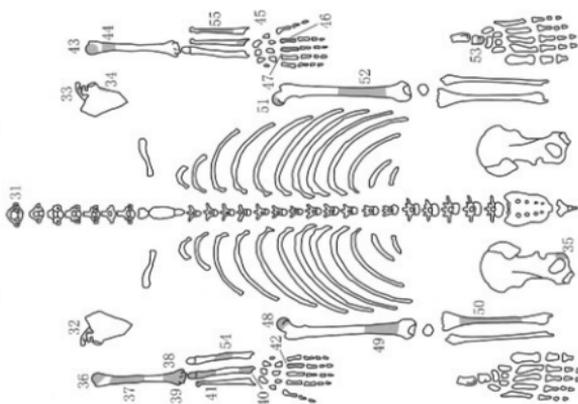
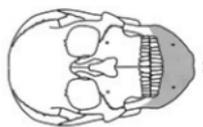


資26

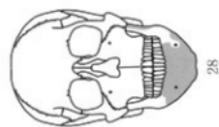
第43圖 上層の人骨 (再利用時)



幼児



成人



第44図 下層の人骨（規骨）— 数字は資番号—

## 2. みかん山12号墳出土鉄刀の自然科学的調査

株式会社 日戴テクノロジーサーチ

調査・解析担当 伊藤 薫、山下 真理子

### 1. いきさつ

みかん山12号墳は、大阪市東豊浦町から山手町にまたがる群集墳、みかん山古墳群の1基で、古墳時代後半の築造とされる。その石室内から鉄刀2振(大刀、小刀)と耳環が出土した。石室内は平安時代の埋土と被熱した敷石も検出し、築造後、石室内で火葬の行われたことが想定された。本報告は、遺物の外観的特徴ならびに一部を採取して自然科学的調査から、鉄刀および耳環の材質ならびに石室内の環境について検討を行ったものである。

「3. 遺構・遺物」での、刀(324)を大刀、刀(325)を小刀、として記述する。

## 2. 調査項目および方法

### 1) 外観観察

肉眼ならびに実体顕微鏡により、鉄刀2振りと耳環の形状・大きさ・表面状況を観察・記録した。

使用装置	デジタルカメラ	Finepix F401型(富士写真フィルム工業製)
	実体顕微鏡	SZ61X型(オリンパス光学工業製)

### 2) 断面マクロ・ミクロ組織観察

鉄刀2振りともに錆化が著しく、殆ど金属質が残存していない。したがって、調査対象箇所は周囲の環境に汚染されていない黒錆層について調査試料を採取することにした。具体的には、磁石に磁着する箇所(中央部)数箇所の中から、折損部分の幅方向中央部を切り取った。切り取った錆片は、断面が観察面になるように樹脂埋め込みし組織を固定後、鏡面になるまで研磨して組織を現出し、光学顕微鏡にて観察・記録した。

使用装置 金属顕微鏡 BX51M型(オリンパス光学工業製)

### 3) 錆層の成分分析と非金属介在物の組成

組織観察用に使用した埋め込み試料を用いて、黒錆層の平均組成ならびに非金属介在物の組成をX線マイクロアナライザー(以後、EPMAと称す)にて分析した。

使用装置	X線マイクロアナライザー(EPMA)
	JXA-8100型(日本電子製)

### 4) 耳環メッキ層の定性分析

腐食して青緑色を呈する表面の間隙には、僅かに淡黄色光沢をした箇所が存在する。この箇所について、エネルギー分散型X線装置を用いて定性分析を行った。

使用装置 エネルギー分散型X線装置 EMAX7720型(ホリパ製)

## 3. 調査結果と考察

### 1) 大刀の調査結果

第45図に大刀の外観と中央部断面組織を、また、第47図と第5.6表にはEPMAによる成分分析結果を示した。全長1043mm、最大幅33mm、最大厚さ7mmを測る。数100mm長さに5片に折損している。表面は黄褐色の錆で覆われており錆化は著しい。

大刀の幅方向中央部から採取した試料断面は、錆が層状に形成され金属質は残存していない。錆化が著しく、この錆層から元の金属組織や製法を把握することは困難であった。

第5表の成分分析結果から、黒錆層には合金元素である、ニッケル(Ni)が0.26%、コバルト(Co)が0.25%検出された。また、明灰色微細結晶粒子中には、ニッケルやコバルトが4%程度の高濃度で含有していることや硫黄(S)も10数%含有していることが特徴的であった。恐らく、この微細結晶粒子は錆化する過程で地金に含まれていた合金元素が濃化したものと考えられる。通常、遺物が埋葬されている土砂中には、ニッケルやコバルトが0.01%以上含有されていることはまずない。また、本遺物に異種金属の付着はみられなかったことは確認しているので、これらの合金元素のニッケルやコバルトは錆化前の地金に含まれていたものと判断される。砂鉄中にはこのような合金元素は含まれないか極僅かであることから、地金素材は鉄鉱石系原料由来と考えられた。

一方、断面中央部には暗灰色の楕円形をした結晶が連なっている。これが非金属介在物で、製造中に排除できなかったスラグである。この非金属介在物の組成を第+表に示した。燐(P)、硫黄(S)を若干含むウスタイト(FeO)でマトリックスは非晶質硫酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。この非金属介在物の形状から、加熱・鍛打はあまり多くなかったものと推測された。

## 2) 小刀の調査結果

第46図に小刀の外観と中央部断面組織を、また、第48図と第56表にはEPMAによる成分分析結果を示した。全長514mm、最大幅23mm、最大厚さ8mmを測る。数100mm長さに3片に折損している。表面は黄褐色の錆で覆われており、前記の大刀と同様に錆化が著しい。

また、表面の一部には他の赤錆領域とは異なり、青黒色を呈する領域が存在する。その観察結果の一例を第46図中に示した。表面が滑らかな箇所や微細球形粒子群として存在し、これらの特徴から本遺物は被熱により表面錆の一部が溶融したものと考えられた。

小刀の幅方向中央部から採取した断面は、一部に空洞を伴うもので先の大刀よりは更に錆化が進んでいる状態である。したがって、金属質は残存しておらず、元の金属組織や製法を把握することは困難であった。

黒錆層からは、銅(Cu)が0.25%およびコバルト(Co)が0.30%検出された。また、黒錆層中の明灰色微細結晶粒子からは、銅(Cu)・ニッケル(Ni)・コバルト(Co)が10数%以上も含まれることが判った。明らかに、金属鉄中に存在したこれらの元素が錆化過程で濃化したものと考えられる。前記の大刀と同様に、砂鉄ではなく鉄鉱石系原料で造られた地金で、大刀とは異なり銅(Cu)を含む地金といえることから、同じ鉄鉱石系でも再遺物の地金素材は異なるものといえる。

一方、比較的緻密な箇所の黒錆層中には、細長く伸びた非金属が存在する。ウスタイト(FeO)主体で、チタン化合物は存在しない。非金属介在物は少なく細長く伸ばされていることから、本遺物の小刀は大刀とは異なり、比較的丁寧な加熱・鍛打が繰り返されたものと考えられる。

第5表 鉄刀(黒錆層)の成分分析結果(単位:重量%)

試料	T・Fe	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Ti
大刀1	59.6	...	0.11	0.25	...	0.26	0.25	...
大刀2	35.1	...	...	45.7	...	4.61	4.27	...
大刀3	43.6	...	...	35.9	...	1.66	0.96	...
小刀6	65.1	...	0.05	0.13	0.25	...	0.30	...
小刀7	14.1	...	...	28.2	14.5	14.5	28.3	...
小刀8	24.8	...	...	21.0	8.57	2.01	22.1	...
鉄錠 <sup>1)</sup>	メタル	0.001	0.006	0.009	0.210	0.010	<0.005	<0.001
直刀 <sup>2)</sup>	63.03	...	0.084	...	0.54	...	...	0.006
刀剣 <sup>3)</sup>	61.4	...	...	...	0.06	0.12	0.15	...
玉鋼 <sup>4)</sup>	メタル	...	0.013	0.007	...	...	...	0.004

注1: 大刀・小刀の数値は、図1, 2のSEM写真中に記載。

注2: 大刀1・小刀6は、黒錆層の平均組成。大刀2・3および小刀7・8は黒錆層中の明灰色微結晶粒了。

注3: 鉄錠・直刀・刀剣は鉄鉱石系地金、玉鋼は砂鉄系地金。

第6表 非金属介在物の組成(単位:重量%)

試料	T・Fe	Si	Al	Ca	Mg	P	S	K	鉱物相
大刀4	70.8	0.60	0.24	0.26	...	0.18	0.11	0.10	ウスタイト
大刀5	30.7	22.7	2.84	1.99	0.34	1.34	0.12	0.60	スラグ
小刀9	70.9	0.39	...	...	...	...	0.23	...	ウスタイト

注1: 分析箇所は、図1, 2の写真中に示した。

### 3) 耳環表面メッキ層の成分分析結果

第49図に耳環の外観を示す。27.5～31.5mmφ・太さ6.5～8.6mmφ・重さ20.0grを測る。一部に砂を巻き込んだ緑青色の錆で覆われているが、その間隙は淡黄色を呈する領域が数箇所存在する。この部分(メッキ層)の定性分析から、銀(Ag)55%、金(Au)27%、銅(Cu)14%の割合を有するものであった。この組成領域をもつものは、現在でも「装飾品」や「ロウ材」として使われているものである<sup>5)</sup>。

## 4. まとめ

みかん山12号古墳から出土した鉄刀2振および耳環の材質調査を行った。その結果は以下の通りである。

- 1) 2振の鉄刀はいずれも錆化が著しく、元の金属組織や製法を把握するには至らなかったが、両刀ともニッケル(Ni)、コバルト(Co)を含む地金材質であった。また、非金属介在物中にはチタン化合物も存在しなかった。砂鉄にはこれらの合金元素は存在しないか極僅かであり、地金は鉄鉱石由来と考えられた。特に、小刀は銅(Cu)の濃化質がみられ、含銅磁鉄鉱由来の地金と考えられた。

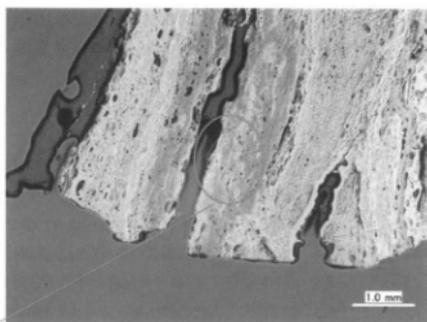
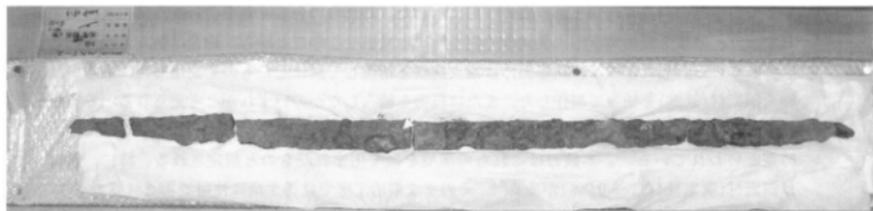
さて、2振の鉄刀生産地はどこであったのであろうか。この時代に相当する古墳から出土した

鉄鋌や刀剣類の調査報告例を第5表の下欄に示した。これらの合金元素を含む鉄器は相当量出土しており、砂鉄を使用する国内製鉄はその当時には見出せないことから、地金は輸入したものとされている。したがって、鉄器製作は輸入鉄鋌を精錬して鋼にしたものを使用した、あるいは輸入鋼素材(鉄鋌)を使って製作した、または現物を輸入したかのいずれかと考えられる。6世紀後半には、精錬工房が近畿・山陽・九州で急速に増加、近畿が鉄器生産の中心としてなっていく時期といわれている<sup>6,7)</sup>。本鉄刀はこれらの環境を経て生まれたものと想定される。特に、鉄鋌は鋼素材(炭素量:0.3~0.7%)が多く<sup>4)</sup>、そのまま鍛冶工房で鉄器生産に使用できた材質であり、本鉄刀はこの素材を用いた可能性も考えられた。

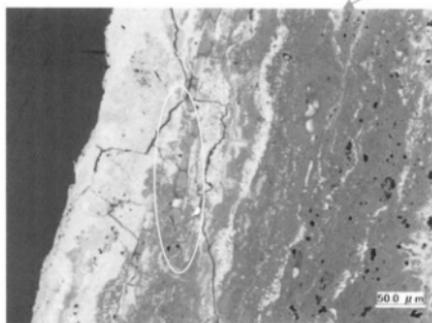
- 2) 小刀の表面には、被熱の影響とみられる青黒色の溶融領域が点在した。出上した石室内の敷石が変質していることや炭化物の存在から、同石室内で「火」を使用した可能性が高いと考えられた。
- 3) 耳環メッキ材質は、銀・金・銅の合金であった。これは、現在でいえば装飾品やロウ材に使用されている成分系であった。

#### 引用文献

- 1) 橿原考古学研究所紀要「考古学論叢」第12冊(1987)
- 2) 島根県岡田山1号墳出土(6世紀後半)
- 3) 橿原考古学研究所紀要「考古学論叢」第9冊(1983)
- 4) 矢野武彦「たたら製品の品質(2)」金属材料 Vol9,10
- 5) 田中貴金属工業(株)「貴金属の科学:応用編」
- 6) 花田勝広「古代の鉄生産と渡来人」藤山園
- 7) 佐々木稔「鉄の時代史」雄山閣



拡大

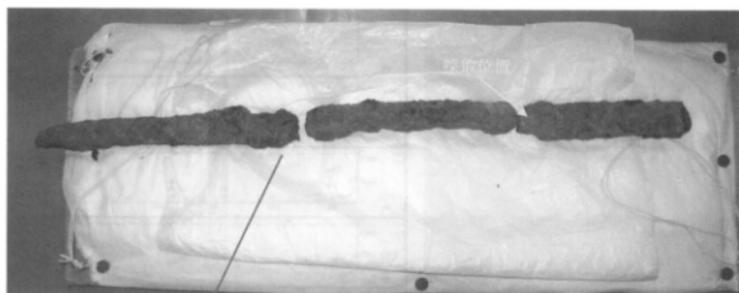


丸印内灰色結晶；非金属介在物

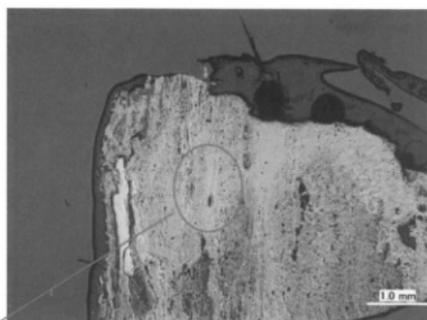
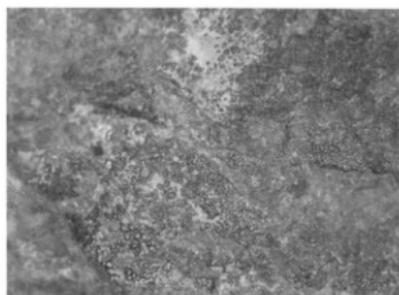


丸印内白色微結晶粒子；Ni, Co高濃度

第45図 大刀の外観と断面組織



表面状況



拡大

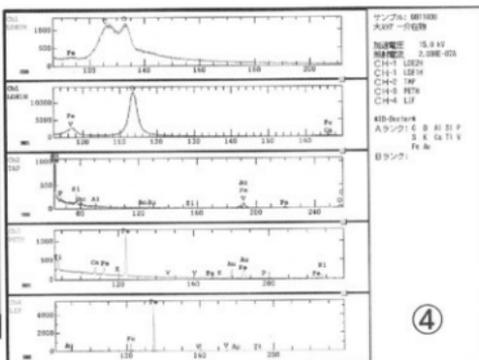
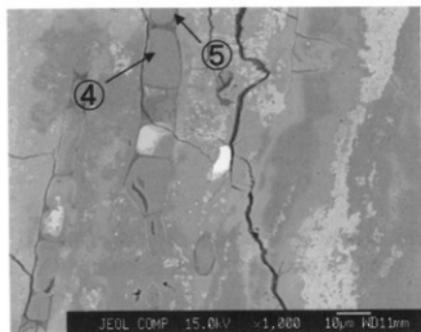
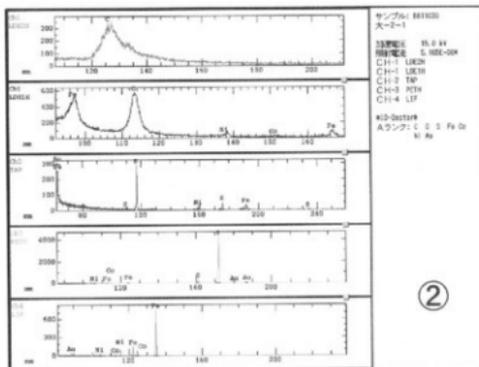
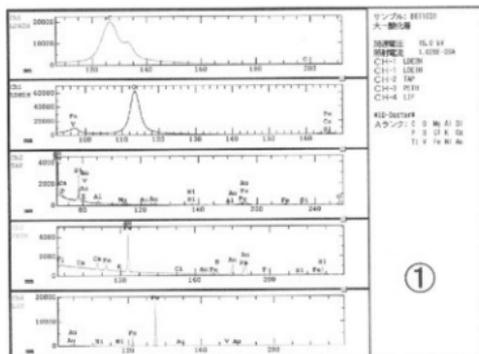
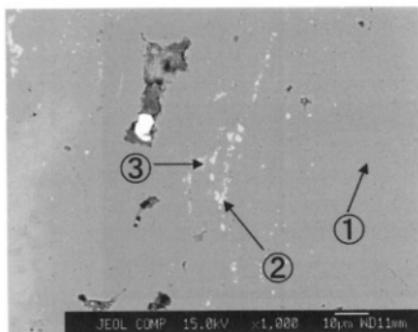


丸印内灰色結晶；非金属介在物

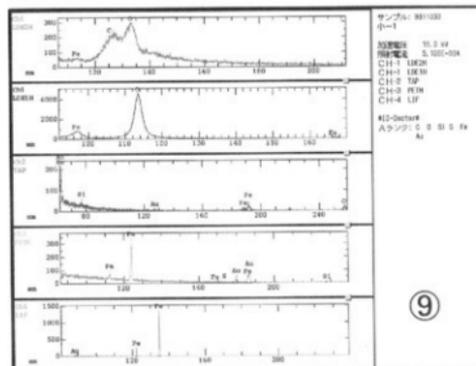
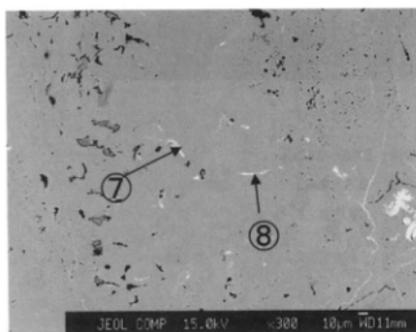
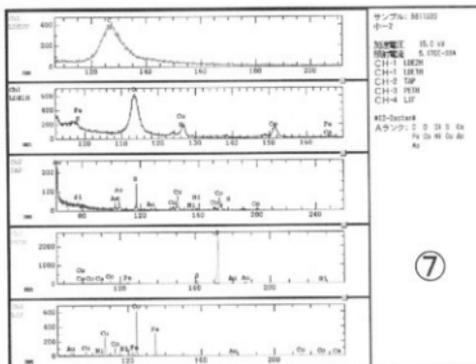
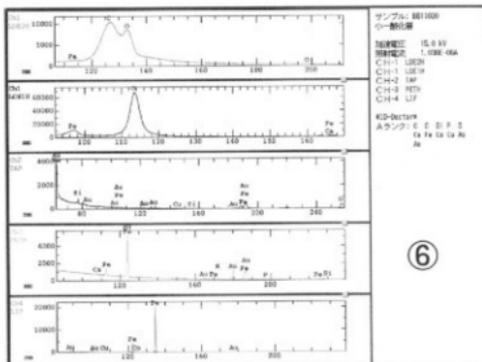
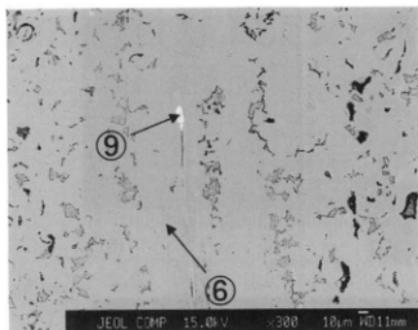


丸印内白色微結晶粒子；Cu, Ni, Co高濃度

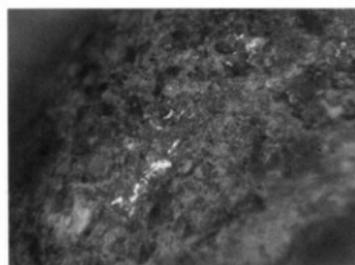
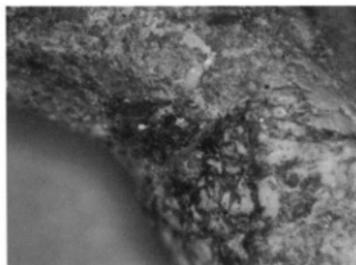
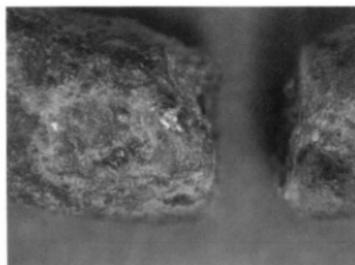
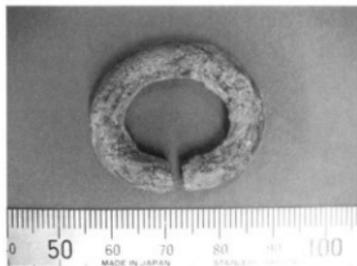
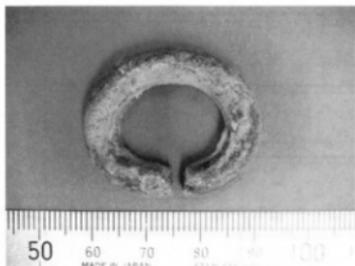
第46図 小刀の外観と表面・断面組織



第47図 大-黒刀、黒錆層及び非介在物のEPMA分析結果



第48図 小刀、黒鉛層及び非介在物のEPMA分析結果



金色部：銀-金-銅合金

遺跡名；MYK-2 地区名；2区中部  
層位名；石室 遺構名；敷石の下位

外径：27.5～31.5φ  
太さ：6.5～8.6φ  
重さ：20.0gr

第49図 耳環の外観

## V. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代から江戸時代に至る整地、耕作跡、柱穴、土坑・溝と古墳(12・13号墳)などの遺構、縄文時代から江戸時代にわたる遺物を検出した。以下、時代をおって既述し、とくに古墳=12号墳の存在意義を記してまとめとする。

古墳群を構成する古墳について、既刊されている2冊の発掘調査報告書(『みかん山古墳群』<sup>1)</sup>・『みかん山古墳群第1次発掘調査報告書』<sup>2)</sup>および『東大阪市の古墳』<sup>3)</sup>では、その数や位置が異なり、不明確なところがあるので、統一しておきたい。『東大阪市の古墳』は、12号墳として枇杷塚を記しているが、枇杷塚は番匠川の北岸に存し、その北西にあったとされる古墳(13号墳)とともに別群であり、今回の調査で新たに検出した2基の古墳が12号墳、13号墳となる。2号墳については全く不明であるが、3書とも記していることからそのまましておく(位置図にはない)。このことから、現段階において本古墳群は、番匠川の南岸、旧大阪府宮牧岡山荘から近鉄奈良線東部までの範囲で、13基の古墳で構成されているということになる(第1図・第1表参照)。

### 時代的変遷の概要

1. 石器などの打製石器およびサヌカイト、弥生土器が出土しており、周辺に縄文時代・弥生時代関連の遺構の存在が想起される。
2. 5世紀後半の須恵器および埴輪(円筒・形象)が出土し、この時期の古墳(8・9号墳)、埴輪を有する古墳(5号墳)が確認されていることから、近辺にその存在がうかがえる。
3. 6世紀後半以降に12号墳および13号墳が築造され、12号墳には造営がなされた=後述。
4. 12号墳は、平安時代中葉に石室が埋葬施設として再利用された=後述。
5. 鎌倉時代に開発・整地されて掘立柱建物などが造られる。この時期、古墳は上部などが削平されて埋没した。とくに、12世紀末から14世紀初頭にかけての遺物が多い。
6. 室町時代以降近代に至るまで棚田として利用されていた。

### 12号墳

#### 断ち割り断面から見た横穴式石室の形成方法

<断ち割り断面状況>(第8図参照)

- a. 東西両側壁外側は、西へゆるやかに傾斜する地山=東側と、側壁石1段目上部近くまでの封土=西側(西はT.P.88.15m、東はT.P.88.20m)から掘り込まれた墓坑があり、1段目石は地山を掘り窪め、根石などを用いて据え、裏込めに石・土を入れている。1段目上部・2段目からは石外面に沿って封土が積み上げられている。
- b. これに対し、奥壁側は1段目石掘え置き以前に封土を盛った形跡はなく、地山を掘り窪めて根石などを用いて1石目を据え、石外面に沿って封土=墳丘が積み上げられており、裏込めは見られない。
- c. 奥壁側(北)は、古墳形成前の本来の地山面が高く(約T.P.88.10m)、この高さはほぼ墓坑の形成高にあたり、奥壁側の地山までの封土高はほぼ両側壁の裏込めの高さに相当している。

<形成方法の検討>-1段目の形成状況から-

- ① 古墳形成地の旧地形は、東および東南から西へ張り出していた地山・土石流層が、西へだけでなく(西斜面)、北から南へも傾斜して(南斜面)。
- ② 石室構築範囲は、ほぼ北=奥壁側地山面(南斜面側)の高さまで封土を盛り上げ(奥壁側側を埋めないようにしながら)、やや西に傾斜させて形成し、

- ③ 墓坑部を再度掘りながら、西側壁の奥1石目を据え(底面地山を掘り窪め、石・土で裏込めなどとして固定)、
- ④ そのうち西側壁面に直角に接して奥壁を据え(底面地山を掘り窪め)、その外=北側は封土を盛っていき、
- ⑤ そして最後に奥壁挟むようにして東側壁の奥1石目をも据えた(底面地山を掘り窪め、石・土で裏込めなどとして固定)ものと考えられる。

その後、

1段目の西側壁は、順次入口方向に向かって目地を水平にした石を据えていき、5石目(最南端の石)は立てて(目地を垂直にして)据える。東側壁は、同様に順次入口方向に向かって据え、5石目は西側壁の端に合わせて立てて据え、4石目との間隙部にやや大き目の石を詰める。2段目は、西側壁の奥の石を据えてから奥壁の2石を置き、その左角に合わせるようにして東側壁の奥石を配し、西側壁とも1段目最南端の立石間を埋めるように奥壁側から順次置いている。

石室は、いわゆる天王山式<sup>5</sup>に相当する。

### 石室内の埋葬状況の展開と意味

#### <埋葬状況の概要>

横穴式石室内における埋葬は大きく分けて、築造時の古墳時代後期のものと、再利用時の平安時代中期のものがある。古墳時代の埋葬は構築当初のものと敷石上面のものと、再利用時も数次におよぶ埋葬が行なわれた。

石室底面は、地山面上に灰オリープ色砂泥じりシルト質土層があり、奥壁から約3.8m間で検出された敷石はその上に敷かれていた。敷石下ないし間から須恵器杯(43・44)・土師器片などが出土し、この層が古墳・石室構築時の床面と考えられる。当初の埋葬状況は不明であるが、敷石はその後に敷設されたものである。

敷石検出面において、2箇所の土器群、2振の刀、須恵器杯蓋、馬具、人骨などと焼骨群(3体分)・焼骨細片散乱箇所を検出し(第11図)、2箇所の被熱箇所を確認した。

敷石・古墳時代の遺物群の埋没後、平安時代中期に埋葬施設として再利用され、5体分の人骨が奥壁部に集積し、中央付近に大腿骨などの骨があり、6体の埋葬を確認した。

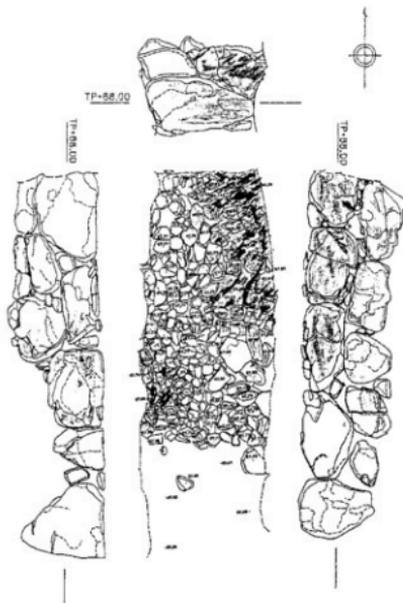
#### <石室内の火葬状況と時期>

##### 1. 敷石上の遺物出土状態および周辺状況

###### a. 北遺物群周辺

- ・奥壁側の土器群は、破損・散乱し、大半は2次的に移動していた。周辺・下部の土内に焼骨の細片が混じっていた。
- ・刀(325)は右側壁に接し入口側に傾斜して立って出土する(原位置)とともに被熱していた。
- ・刀(324)は原位置を保ち、敷石面との間に焼骨細片の混じった土があり、被熱した跡は見られず、西に被熱していない長骨片(部位不明)があった。馬具(323)と須恵器杯蓋(9)も原位置を保ち、被熱した形跡はなかった。
- ・焼骨は細片のみで、まともな骨はまったくなかった。
- ・上記の土器群・刀・杯蓋・馬具および焼骨細片の包含上を取り除いた下から、敷石および床面に被熱による焼け、焼け焦げ跡が見られた。奥壁および東側壁にも被熱の跡が見られ、右面に亀裂・剥離しているところもあった。敷石の北東部は3箇所に石がなかった。

###### b. 南遺物群周辺



第50図 12号墳石室被熱箇所図 (1/60)

- ・ほぼ原位置を保った遺物群(土器類・鉄製品)と焼骨群である。
- ・遺物群には被熱した形跡はなかった。
- ・焼骨片群は大人2、小児1の3体分があった。
- ・焼骨群の下の敷石は被熱しているとともに、中央部に石はなく赤く焼け、その横の西側壁は被熱跡とともに剥離した部分が見られた(後述)。
- c. 土器類は6世紀後末から7世紀中頃のものであった。
- d. 敷石上面、敷石外、焼骨群上に放置された石があった(第50図)。

2. 火葬・埋葬など  
敷石面は、石のない箇所とともに北遺物群下・奥壁側東北部と、南遺物群の焼骨群下・中央西部の2箇所被熱による変色が見られた。奥壁は西端側を除く全面、とくに東側に被熱・煙による変色、東側壁は奥壁側から4石目半ば付近までの広い範囲に被熱による変色があり(下部に変色していない部分があった)、西側壁は焼骨群に面した3石目を

中心にやや狭い範囲に被熱による変色と石面の剥離が見られた。

敷石上面や敷石外などに放置された石(被熱していない)は、当初は全面に敷設されていた敷石が、火葬に際し通風のため棺の下部を空ける必要があり、そのときに取り除かれた石と考えられる。南遺物群の束にある1石と南遺物群下から出土した石は、南火葬地=焼骨群の下にあった敷石の石で、焼骨群上またはその周辺から出土した石は、北火葬地の石と考えられる。

北遺物群は、後述する一部の遺物-刀(325)など-以外のものに被熱の跡がなく、人骨を含む遺物および焼骨細片包含土の除去下から被熱した石・土(焼土・焦土面)が見られた。このことから大半の遺物は火葬後のものであることが知れる。南遺物群も、焼骨群は火葬したままの状態ではなく、大人2、小児1の3体分が乱雑に集積されており(集積した上に石を載せてあった)、土器群も被熱の跡が見られなかった。このこともこの遺物群も火葬後に置かれたものであることを物語っている。

以上のことから、北火葬地・南火葬地2箇所の火葬、焼骨群の集骨、埋葬が行なわれ、その後には土器類が奥へ追いやられたことが窺える。

#### ① 北火葬地での火葬

奥壁側東北部で、敷石3箇所の石を抜き取り、その上に木棺を置き、刀(325)を奥壁側東側壁に接して木棺に立てかけ、須恵器杯身(18)・蓋などを副葬して火葬。被熱範囲から被葬者は大人(2体か?)。

#### ② 南火葬地での火葬(明確な副葬品なし)

中央西部で、敷石1箇所の2石を抜き取り、その上に木棺を置いて火葬。被熱範囲は狭く、被葬者は小児か。

### ③ 北火葬箇所での埋葬

北火葬地の焼骨を南火葬地の焼骨とともに南火葬地上に集骨し、上に石を置き、その南に副葬品(須恵器・土師器・鉄器)を副え、

北火葬箇所に、刀(324)、馬具(323)、須恵器杯蓋(9)＝原位置を保って出土＝などを副葬した被葬者(焼けていない長骨片)を納めた。

#### ④ 北土器群は、のちに奥に追いやられた、このおり埋葬人骨の大半は破損＝平安時代中期以前。

以上のことから、火葬は7世紀前半以降ではないことを示している。すなわち、横穴式石室内での火葬は古墳時代後期後半、6世後末から7世紀中頃までに2度、時期を異にして行なわれたことになり、火葬状況から北火葬地が先行して行なわれたと思われる。

#### <集骨の状況と時期>

一般に横穴式石室には、築造時の埋葬・追葬＝古墳時代後期以後、再利用、盗掘などの形跡が多くみられる。本古墳も、平安時代中期に埋葬場所として再利用された。

- ・人骨は、奥壁部に集中する集骨と中央部の2箇所でも出土した。
- ・中央部のものは、右の大腿骨と脛骨、寛骨と関節、左大脳骨の一部で原位置を保っていた。
- ・奥壁の集骨は、中央に大礫があり、左右にそれぞれ2ないし3個の頭骨があって、周辺に長骨(脚・腕の骨)などが乱雑に重なるようにして出土し、北東隅には肋骨群があった。
- ・大腿骨など同一部位の確認から、中央部1体と奥集骨部5体の6体であった。
- ・多くの礫が散乱していた。
- ・この上層内から黒色土器(35)が出土した。

以上のことから、奥壁の集骨(5体)が不自然な状態で集積していたことは、中央部で検出した被葬者を葬る際に、骨化または骨化しかけたものを奥へ押し込めたものと考えられる。この時期、すでに石室は開口し、閉塞石は崩されて石室内外に放置された。これらの行為は、平安時代中葉である。

今回12号墳の横穴式石室内において、敷石上面における焼骨と集骨(3体)、火葬後の埋葬、平安時代中葉の再利用時の集骨・埋葬(6体)と、9体以上の被葬者を確認した。横穴式石室内での火葬が6世紀後末から7世紀初頭のことであり、場所といい時期といい極めて特異な事例といえる。

また、横穴式石室内から多数の埋葬人骨が出土した古墳としては、本市東石切町に所在する大藪古墳がよく知られている<sup>6</sup>。玄室奥に2基の石棺があり、1基に5体分(頭骨など)、他の1基には男女2体、羨道部に4体と、11体が確認されており、すべてが1次埋葬および追葬で古墳時代後期のものといわれている。11体の人骨内には黒黒(黒色彩色歯)のあるもの、古墳時代以外の遺物の存在が示唆されていることなど、今回の12号墳の状況を考慮して再考してみる必要があると考えられる。このことは、大藪古墳だけでなく、多数の人骨が検出されている横穴式石室の在り方についてもいえよう。

#### 注

1. 『みかん山古墳群』 大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2 大阪府教育委員会 1998年
2. 『みかん山古墳群第1次発掘調査報告書』 財団法人東大阪市文化財協会 2001年
3. 『わが街再発見 東大阪市の古墳』 東大阪市教育委員会 1996、改訂版 2001年
4. 右島和夫・土生田純之・菅永欽・吉井秀夫『古墳構築の復元的研究』 雄山閣 2003年
5. 白石太郎『古墳の知識1』 東京美術 1985年
6. 『金山古墳および大藪古墳の調査』 大阪府文化財調査報告書第2編 大阪府教育委員会 1953年



1. 調査地周辺航空写真（1942年）



2. 調査地遠望航空写真（1985年ごろ）



1. 調査前状況（南より）



2. 南断面東側（北より）



3. 南断面西側（北より）



1. 東突出部北断面 (南より)



2. 中央東西畔断面 (南より)



3.1 地区 (南より)



1. 第12号墳全景（南東より）



2. 第12号墳横穴式石室および竪穴式小石室（上より）



3. 第12号墳断ち割り断面（南より）



1. 第12号墳断ち割り断面西(南より)



2. 第12号墳断ち割り断面中(南より)



3. 第12号墳断ち割り断面東(南より)



1. 第12号墳横穴式石室全景（上より）



2. 第12号墳横穴式石室全景（南より）



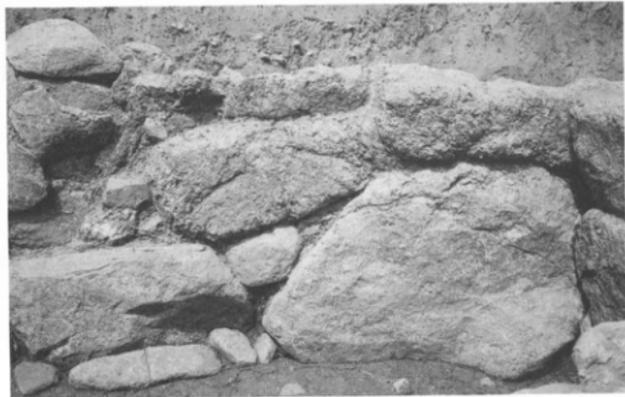
3. 第12号墳横穴式石室奥壁（南より）



遺構 1. 第12号墳横穴式石室東壁(西より)



2. 第12号墳横穴式石室東壁奥(西より)



3. 第12号墳横穴式石室西壁奥(東より)



1. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況（上より）



2. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況（南より）



3. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況南部（上より）



1. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況北東部奥(上より)



2. 第12号墳横穴式石室内敷石検出状況北東部(上より)



3. 第12号墳横穴式石室内敷石上遺物検出状況(上より)



1. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況(南より)



2. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況北部(西上より)



3. 第12号墳横穴式石室内敷石上面遺物出土状況南部(東上より)



1. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群検出状況(南より)



2. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群奥壁部検出状況(南より)



3. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群奥壁部検出状況(北より)



1. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群東奥壁部検出状況（北より）



2. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群西奥壁部検出状況（北より）



3. 第12号墳横穴式石室内再利用人骨群中央検出状況（南より）



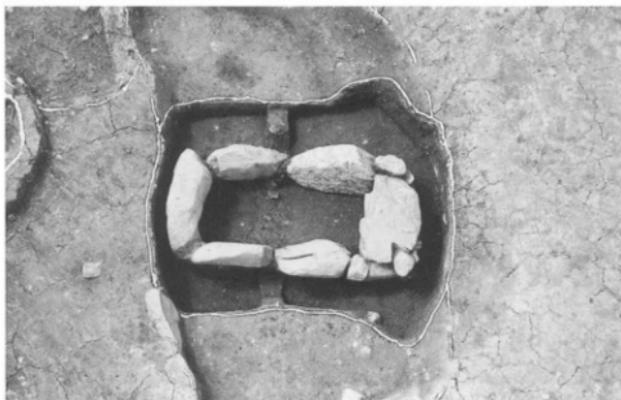
1. 第12号墳横穴式石室検出状況(南より)



2. 第12号墳横穴式石室内畔断面上(南より)



3. 第12号墳横穴式石室内畔断而下(南より)



1. 第13号墳壑穴式小石室完掘状況(上より)



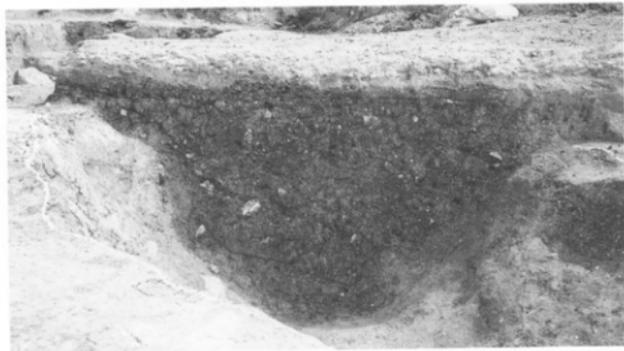
2. 第13号墳壑穴式小石室畔断面(西より)



3. 第13号墳壑穴式小石室断ち割り断面(南より)



1. 第4遺構完掘状況（南より）



2. 第4遺構・落ち込み断面（西より）



3. 第4遺構・SK6畔断面（西より）



1. 第3遺構検出状況（南より）



2. 第3遺構完掘状況（南より）



3. 第3遺構・段2北埋土内遺物出土状況（西より）



1. 第3遺構・SK2検出状況(西より)



2. 第3遺構・SK2埋土内遺物出土状況(南西より)



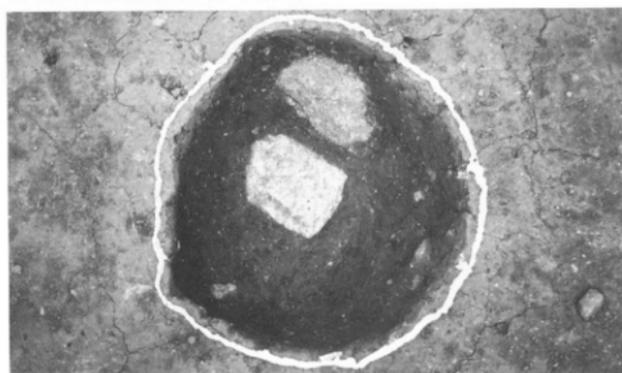
3. 第3遺構・SK3畔断面(南より)



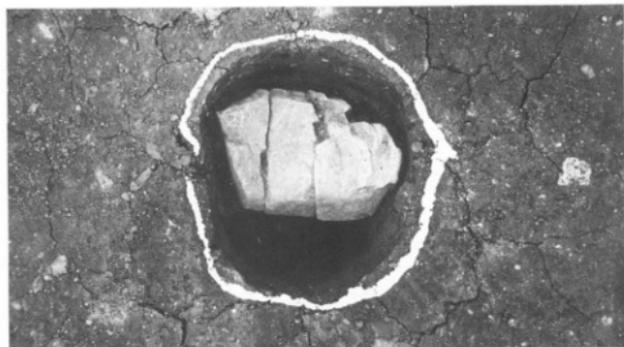
1. 第3遺構北部完掘状況（北より）



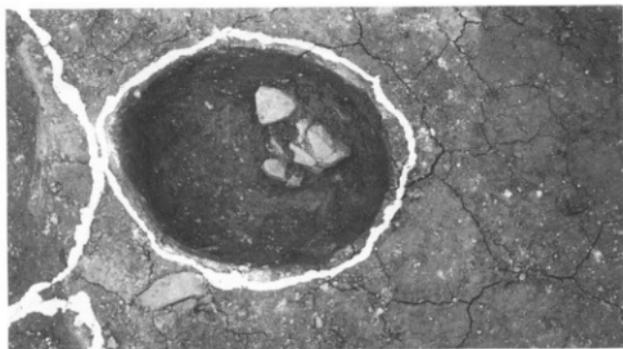
2. 第3遺構北部完掘状況一部（北西より）



3. 第3遺構 S P 12 完掘状況（東より）



1. 第3遺構SP 39 完掘状況 (東より)



2. 第3遺構SP 50 完掘状況 (東より)



3. 第3遺構SP 26 完掘状況 (東より)



1. 第2遺構・段2南石垣（南より）



2. 第2遺構完掘状況（南より）



3. 第2遺構・段2南完掘状況（南より）



1. 第1遺構検出状況(南より)



2. 第1遺構完掘状況(南より)



3. 段2埋土内須恵器出土状況(西より)



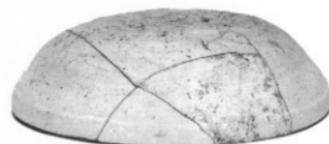
5



12



6



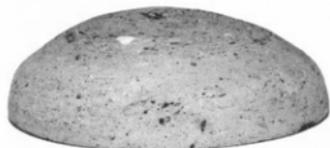
13



8



3



9



14



10



16



11



17



18



20



19



21



22



23



24

12号墳横穴式石室内出土須恵器 杯身・広口壺・長頸壺・短頸壺



29



30



28



27



38



41



36



36'



33



33'



40



39

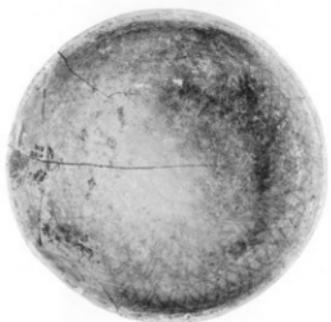
12号墳横穴式石室内出土須恵器 提瓶、土師器 杯



34



34'



37



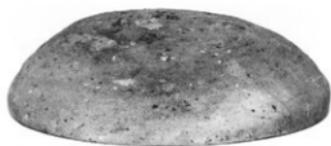
48



49



37



43



42

12号墳横穴式石室内、SK 2 出土須恵器 提瓶・蓋杯・有蓋高杯蓋、土師器 杯・高杯



47



54



52



62



64



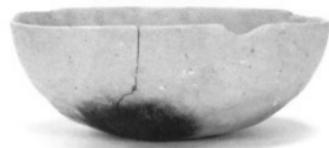
58



65



126



69

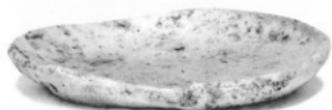
SK 2 出土須恵器 有蓋高杯蓋・杯身・高杯・台付壺・広口壺・短頸壺・捏鉢・土師器 杯



79



85



82



86



83



90



84



96



105



106



109



108



117



110



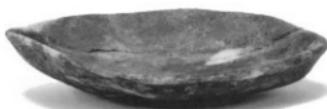
114



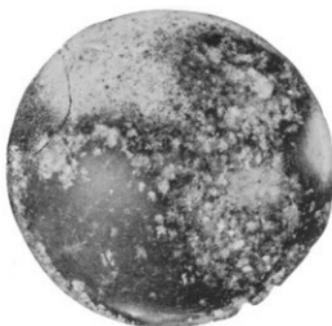
129



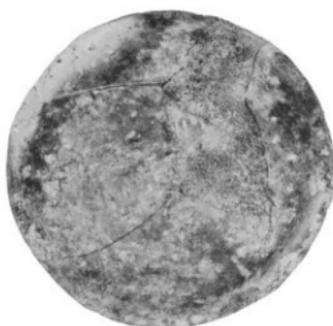
130'



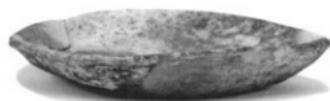
130



131'



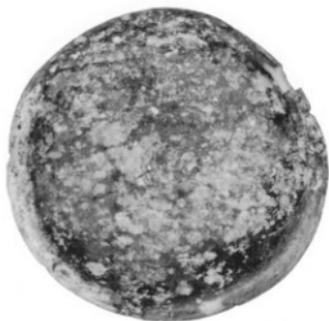
134'



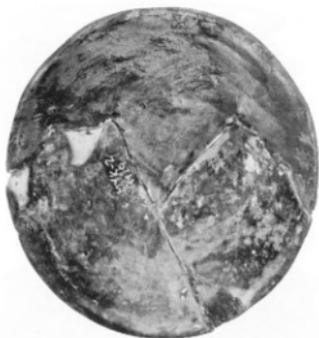
131



134



136'



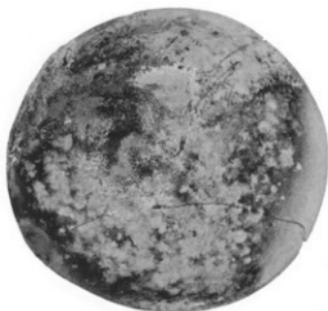
138'



136



138



137'



139'



137



139



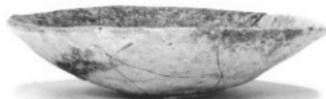
179'



178'



179



178



146



158



172



170



167'



167



180'



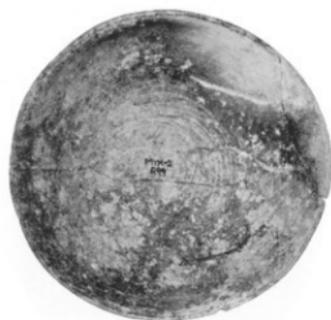
182'



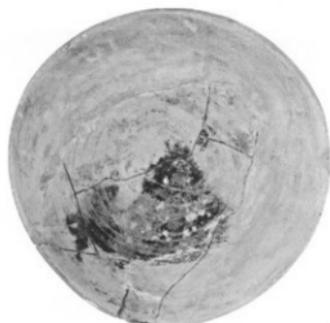
180



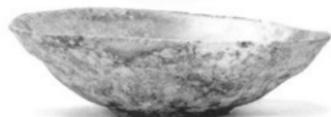
182



199



225'



199



225



240



242



254'



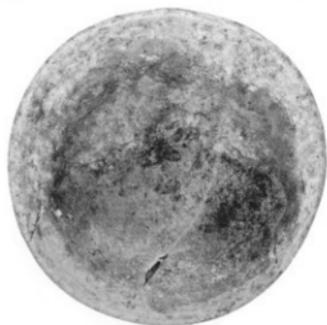
277



254



277'



279'



259



243



279



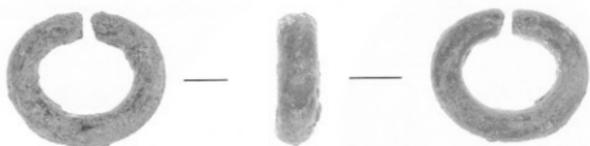
234



265



261



320



323



321



322

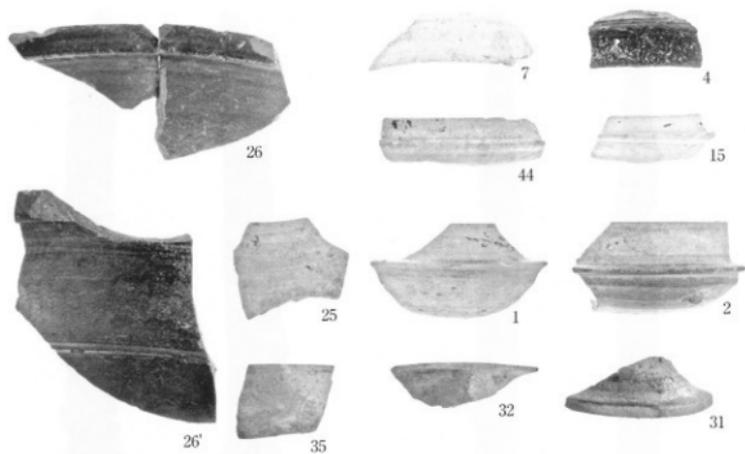


324

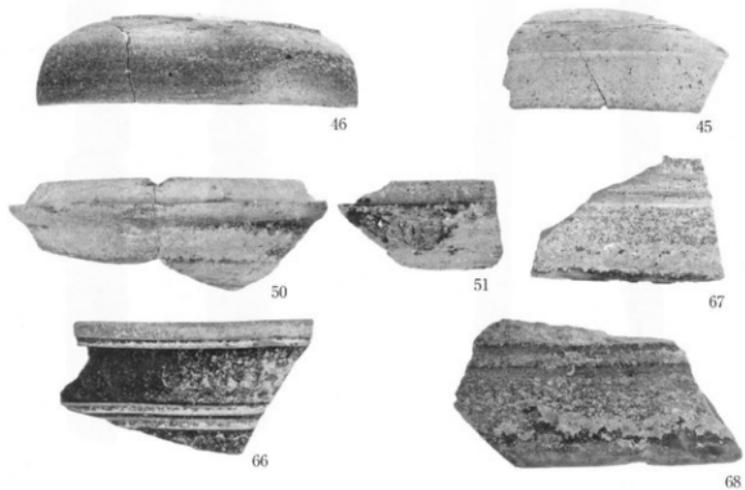


325

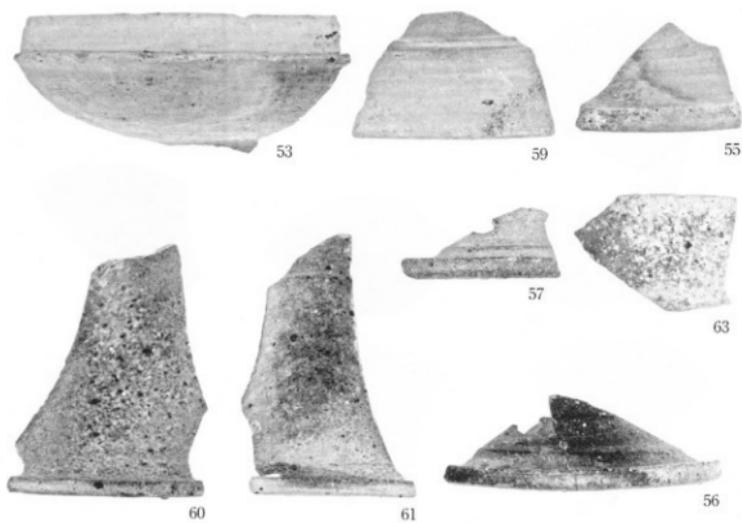
12号墳横穴式石室内出土鉄刀



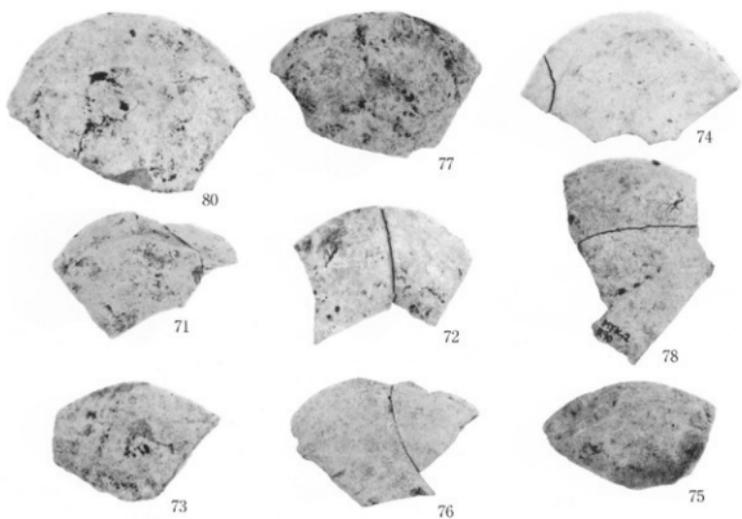
1. 12号墳横穴式石室内出土須恵器 杯身・蓋杯・器台・壺・高杯・鉢、黑色土器 椀



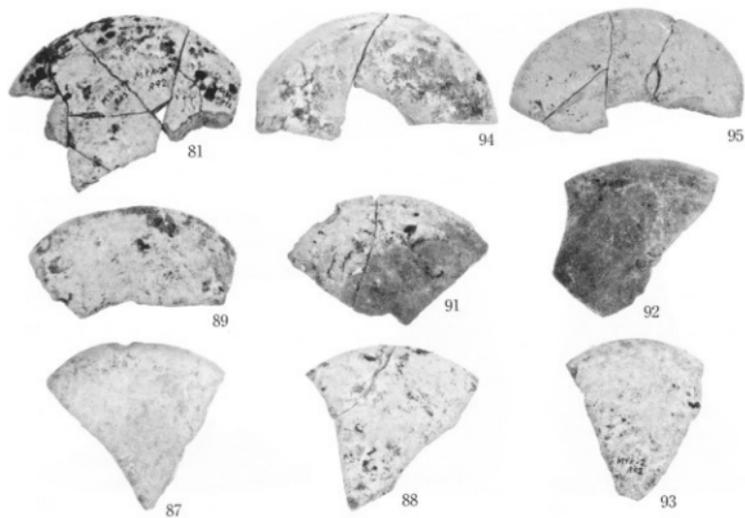
2. 12号墳横穴式石室内出土須恵器 蓋杯・杯身・器台



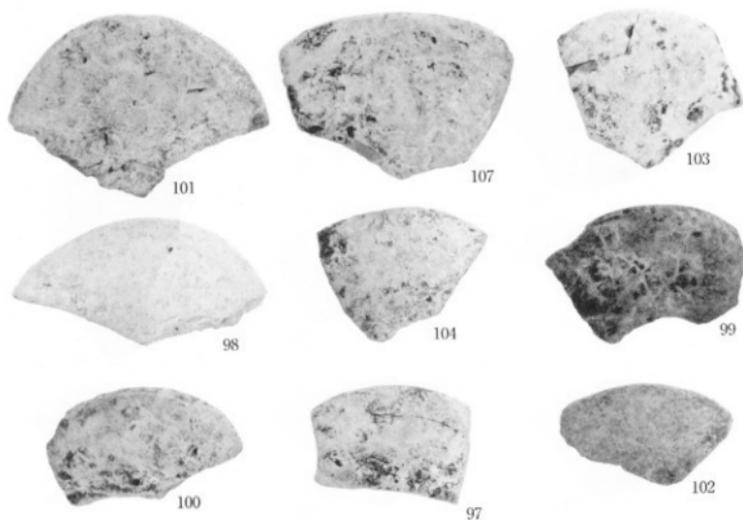
1. SK2出土須恵器 高杯・台付壺・広口壺



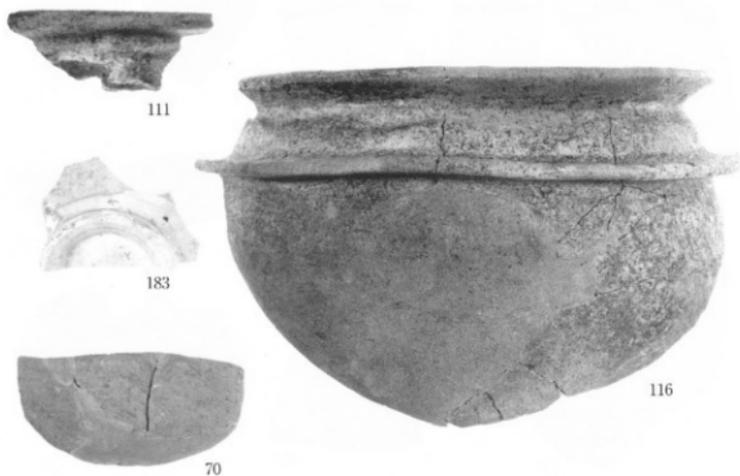
2. SK2出土土師器 Ⅲ



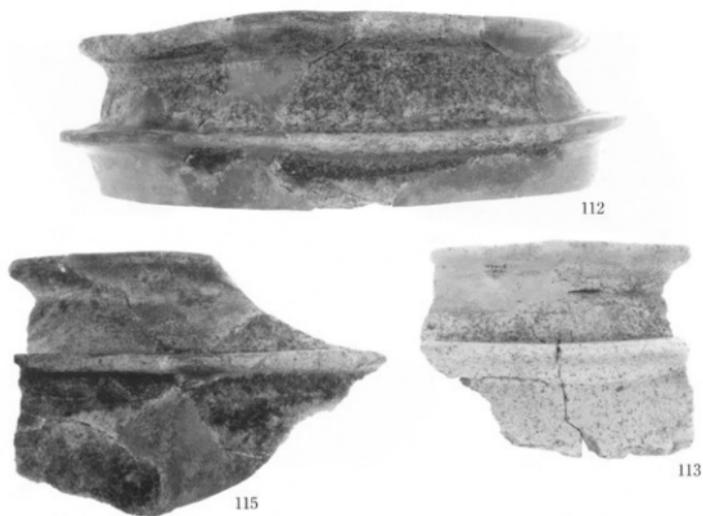
1. SK 2 出土土師器 皿



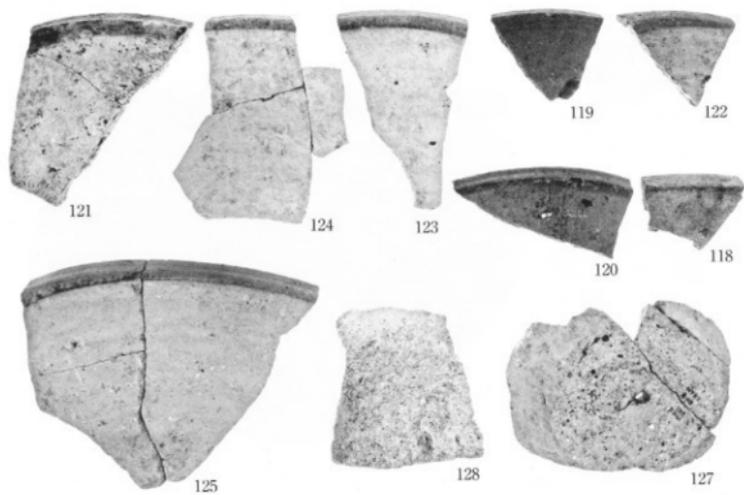
2. SK 2 出土土師器 皿



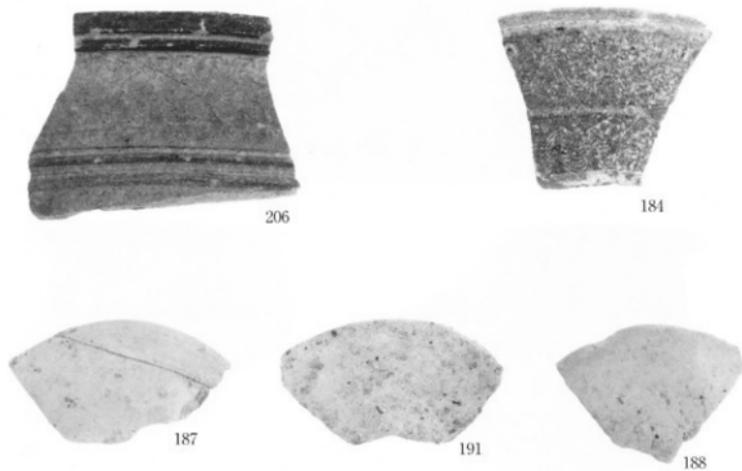
1. SK2出土土師器 羽釜・杯 輸入磁器 碗



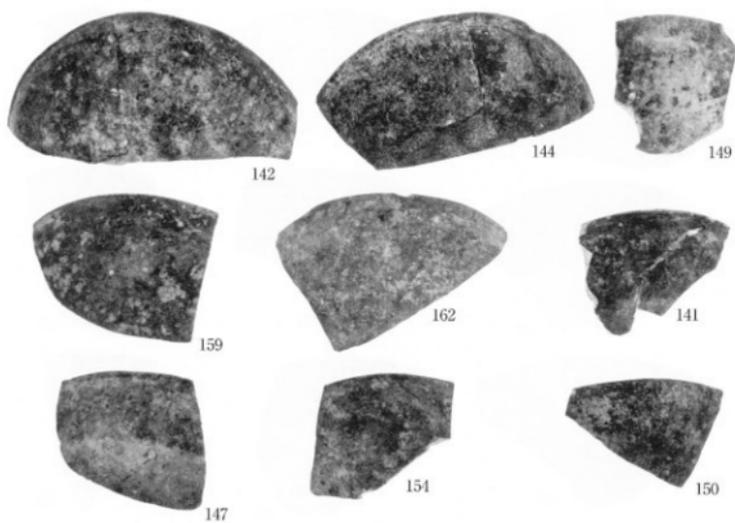
2. SK2出土土師器 羽釜



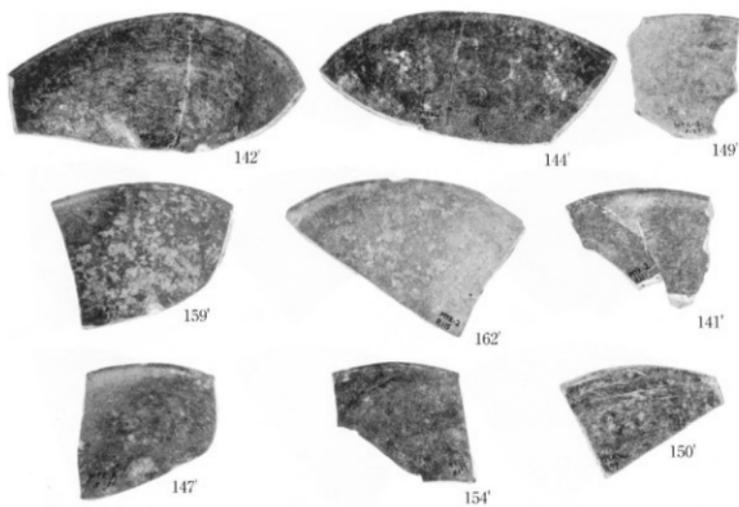
1. SK 2 出土須恵器 捏鉢



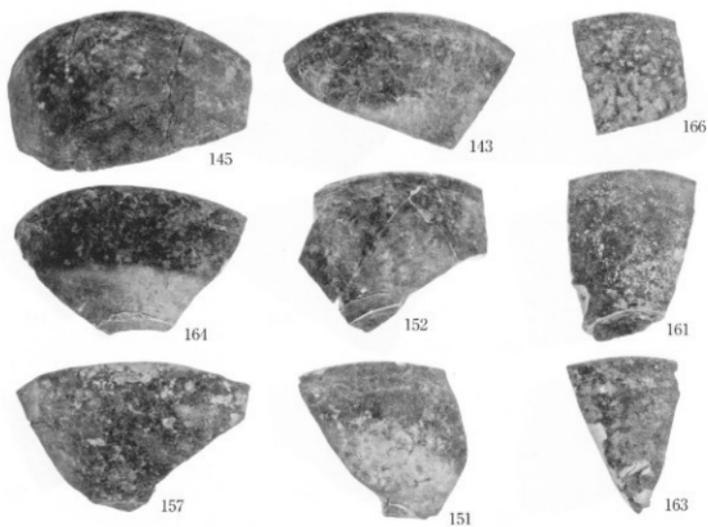
2. SK 3・5 出土須恵器 甕、土師器 皿



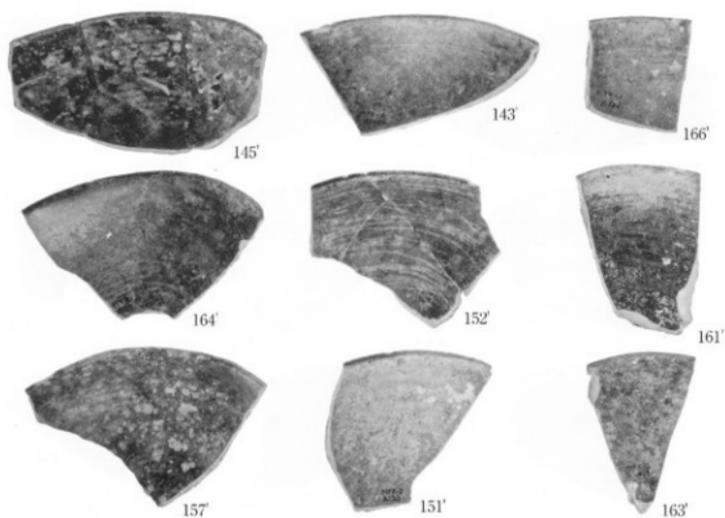
1. SK 2出土瓦器 椀 (外面)



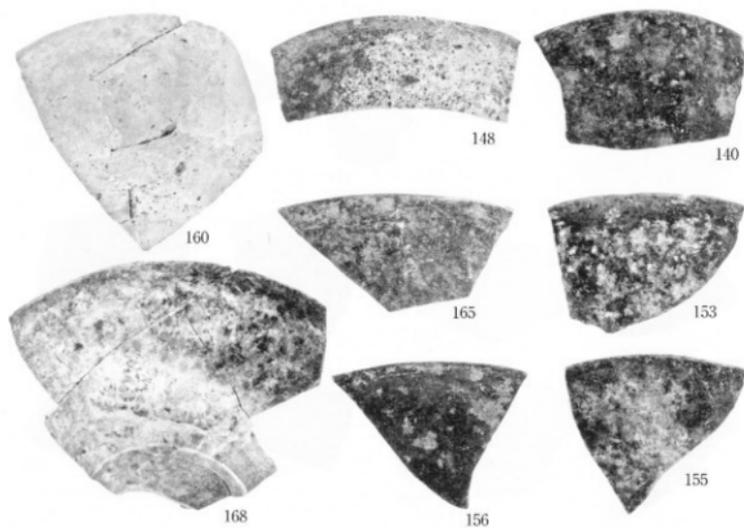
2. 同上 (内面)



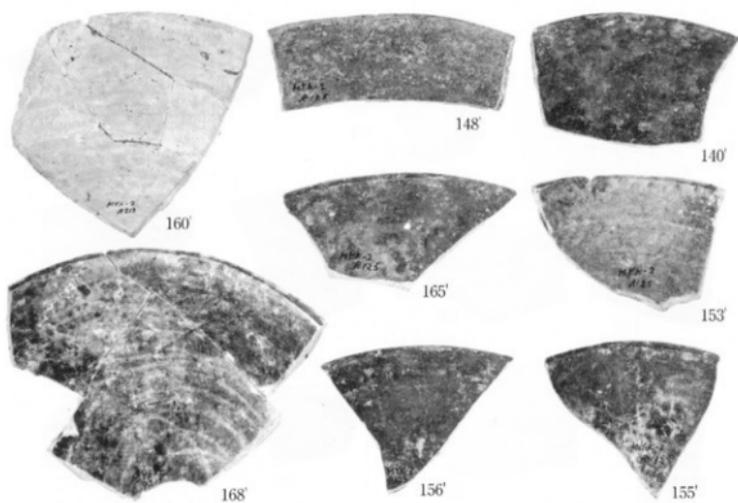
1. SK 2出土瓦器 輪 (外面)



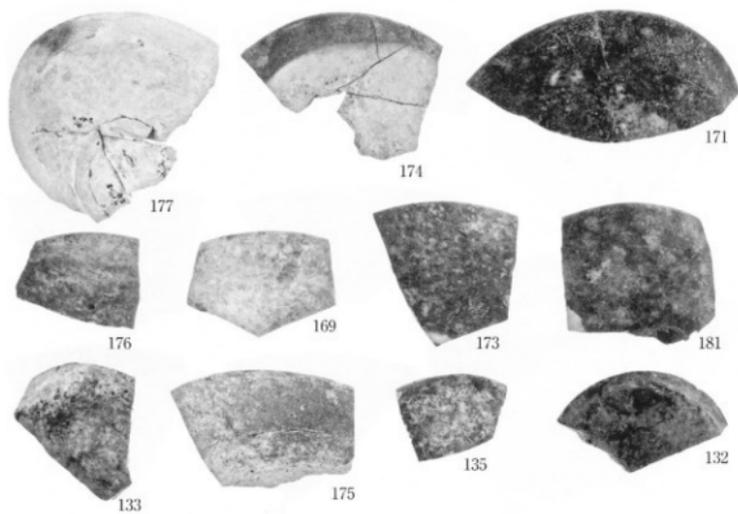
2. 同上 (内面)



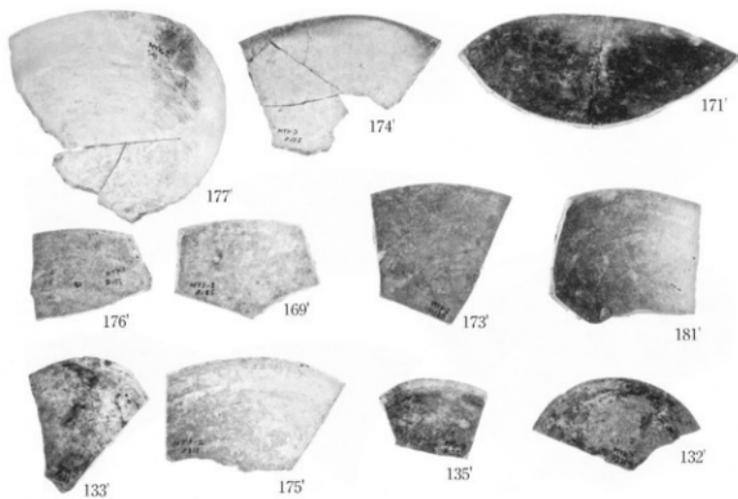
1. SK 2 出土瓦器 碗 (外面)



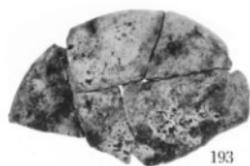
2. 同上 (内面)



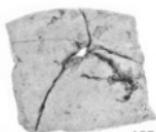
1. SK 2出土瓦器 皿・碗 (外面)



2. 同上 (内面)



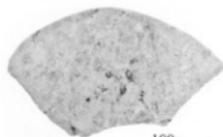
193



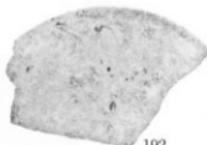
195



190



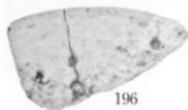
189



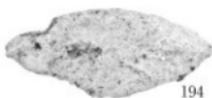
192



186



196

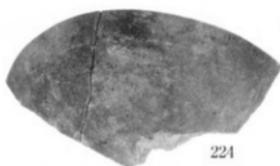


194



185

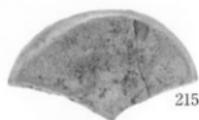
1. SK 3 出土土師器 皿



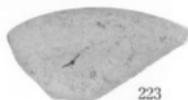
224



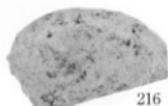
222



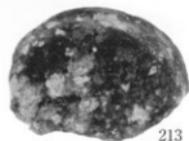
215



223



216



213



217

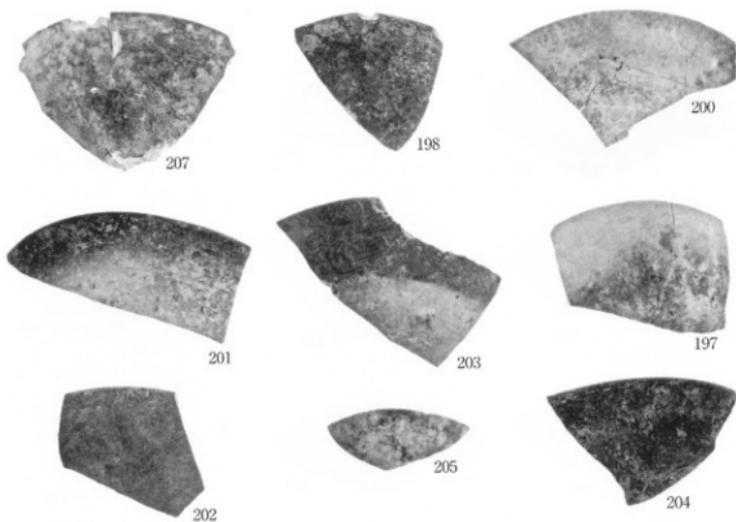


214

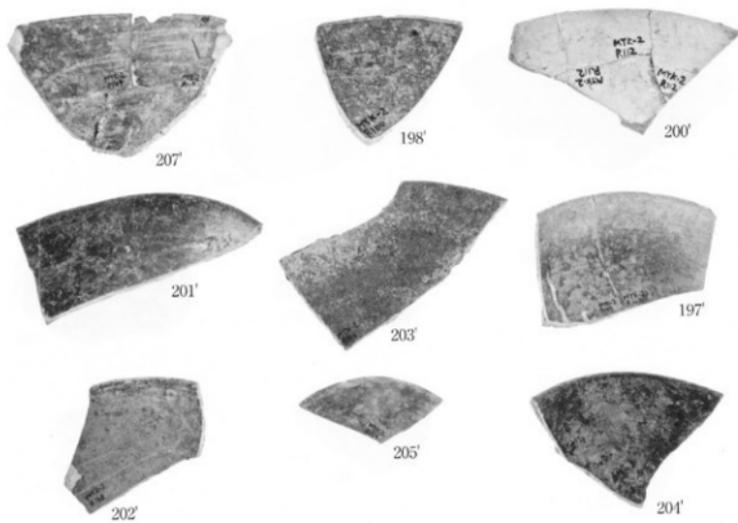


226

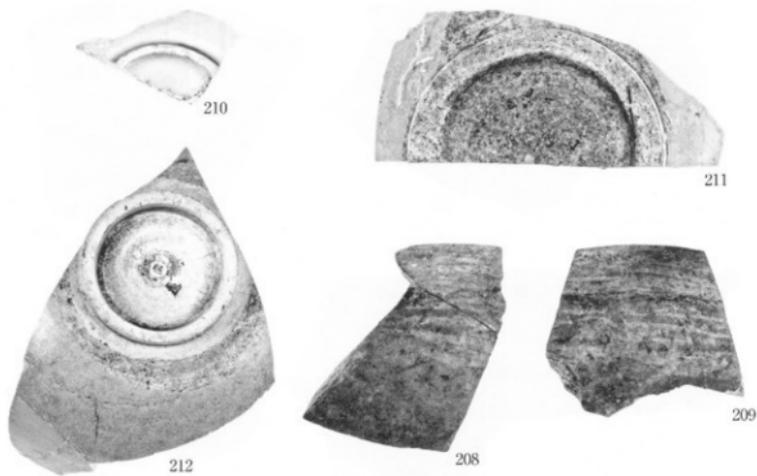
2. 第6層出土瓦器 皿・椀、土師器 皿、輸入磁器 碗



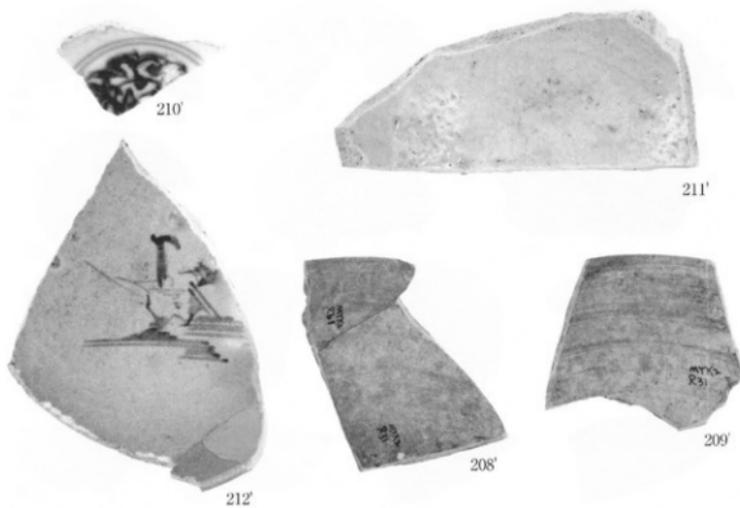
1. SK3、石垣2内出土瓦器 碗・皿 (外面)



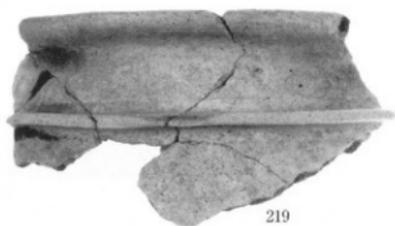
2. 同上 (内面)



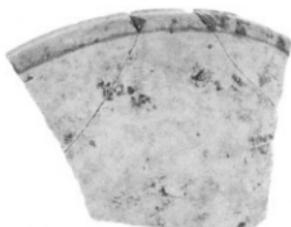
1. 第4層出土瓦器 碗、輸入磁器 碗、国产陶器 碗（外面）



2. 同上（内面）



219



220



218



221

1. 第6層出土土師器 羽釜、須恵器 捏鉢



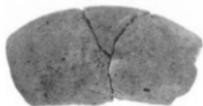
231



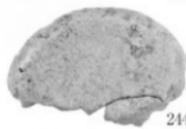
241



245



230



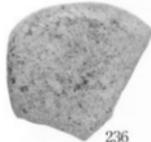
244



237



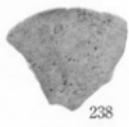
233



236



232



238



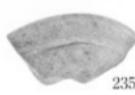
239



229

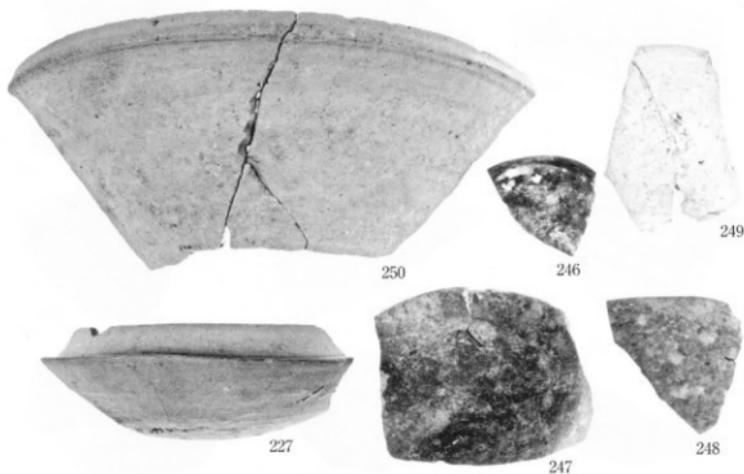


228

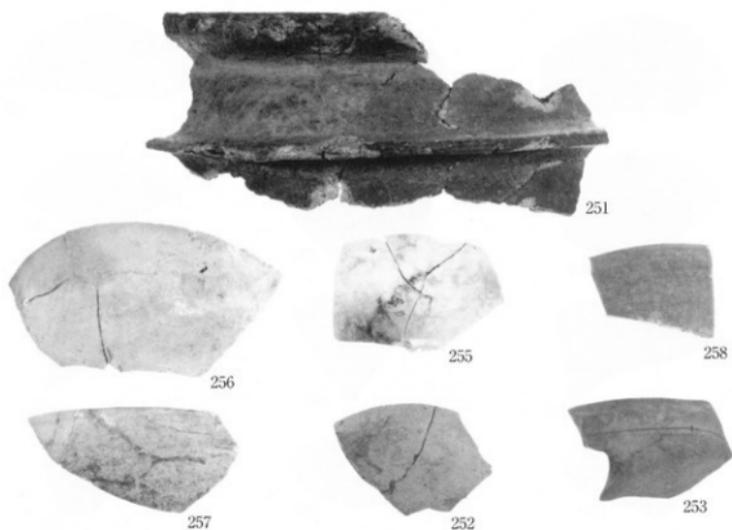


235

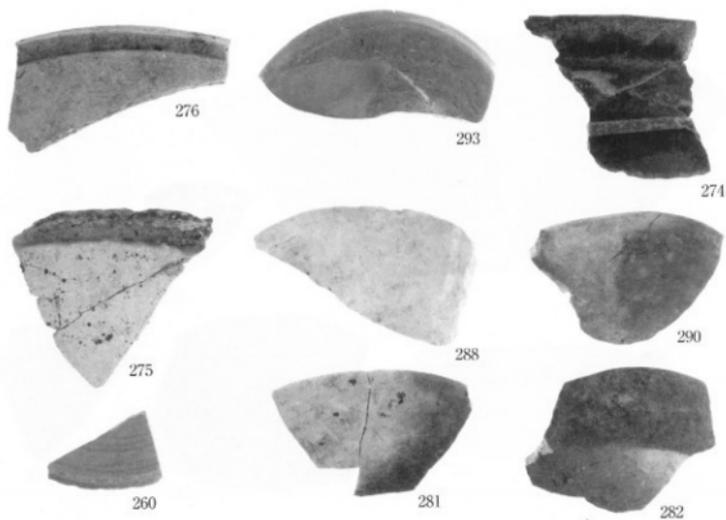
2. 第6・8層出土土師器 皿



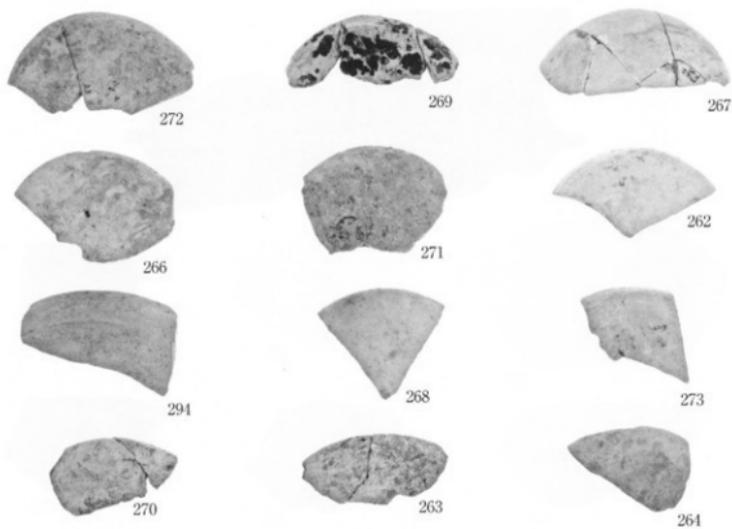
1. 第6・8層出土須恵器 杯身・捏鉢、瓦器 皿・碗



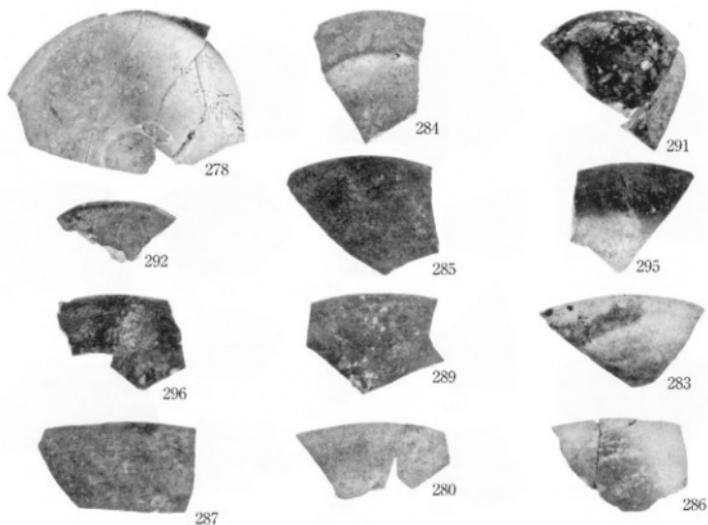
2. 第7層出土土師器 羽釜・皿、瓦器 碗、輸入磁器 碗



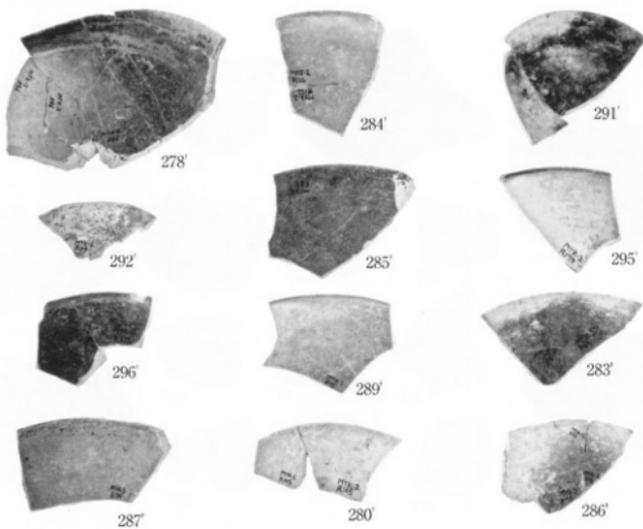
1. 第8層出土須惠器 脚部・捏鉢、土師器 羽釜、瓦器 椀、輸入磁器 碗



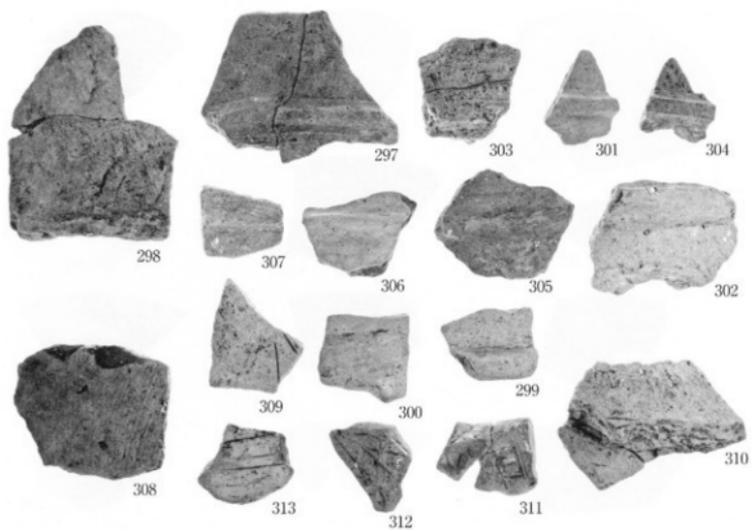
2. 第8・9層出土土師器 皿



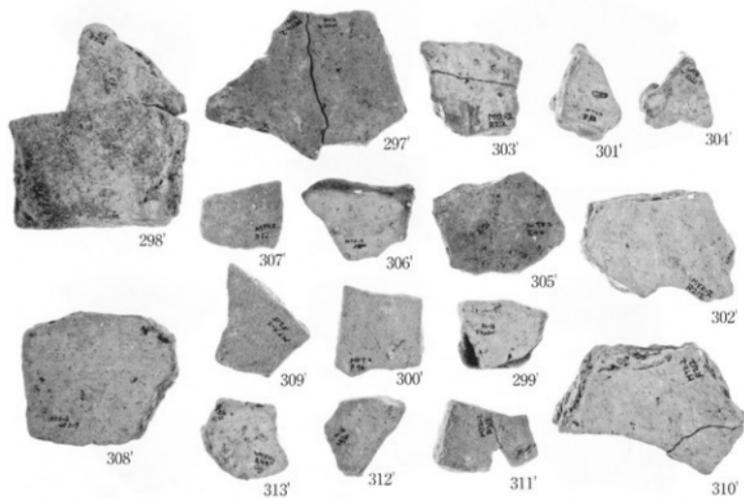
1. 第8・9層出土瓦器 碗・皿 (外面)



2. 同上 (内面)



1. 埴輪 円筒・形象 (外面)



2. 同上 (内面)



314



315



316



317



319



318

1. 土製品、石器 (表)



314'



315'



316'



317'



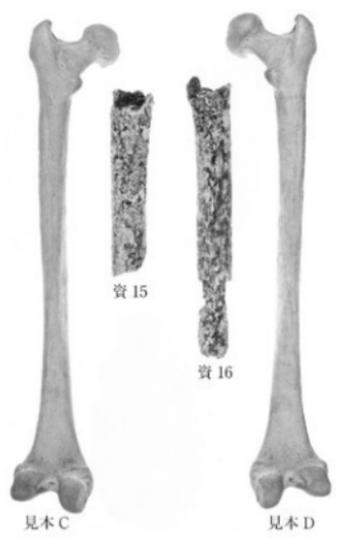
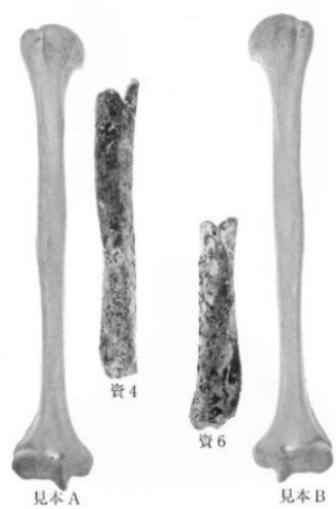
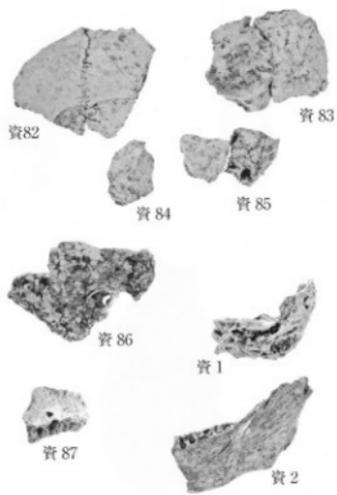
319'

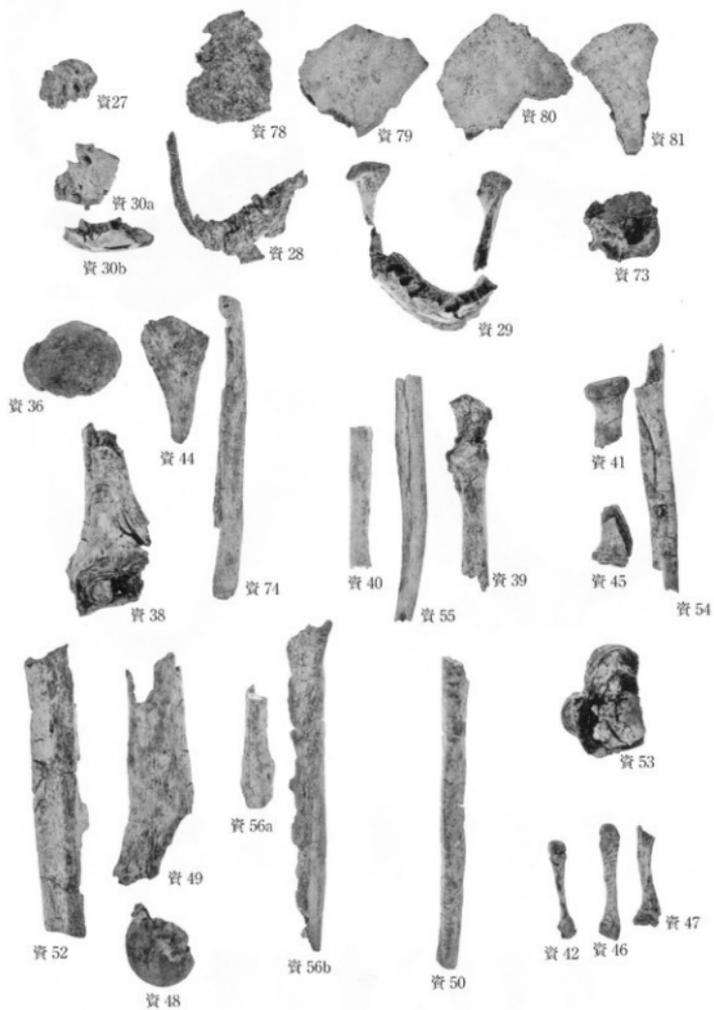


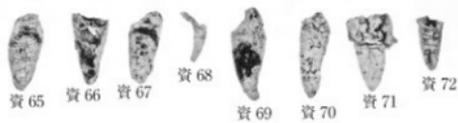
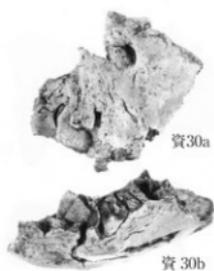
318'

2. 同上 (裏)

図版 54 遺物 人骨 (再利用時)

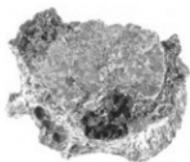








資31



資73



資53



資42



資46



資47

## 報告書抄録

ふりがな	みかんやまこふんぐんだい2じはっくつちようさほうく					
書名	みかん山古墳群第2次発掘調査報告					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	若松博忠・佐藤由美・安部みき子・山本与毅・伊藤薫・山下真理子					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北一丁目1番1号 TEL06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2009年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
みかんやま こふんぐん みかん山 古墳群	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 ひがしとようらちよう 東豊浦町 1113-6・7、1118、 1119-1、1121-1、 1123-1・5	27227	49	平成20年 7月7日 ～ 平成20年 8月19日	468㎡	共同住宅 建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
古墳	弥生時代 ～近世	古墳・溝・ピット・ 土坑	土師器・須恵器・ 金属器・埴輪・陶 器・磁器・瓦器・ 土製品			

### 〈要約〉

横穴式石室を伴う古墳、竪穴式小石室、鎌倉時代から江戸時代にわたるピット、土坑、耕作跡などを検出した。横穴式石室では、古墳時代の火葬および平安時代中葉における再利用時の人骨群を検出した。

## みかん山古墳群第2次発掘調査報告

平成21年3月31日

発行 東大阪市教育委員会  
印刷 株式会社ミラテック

